

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第327集

柏原市

# 大県郡条里遺跡 10・山ノ井遺跡 4

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024年1月

公益財団法人 大阪府文化財センター

柏原市

# 大県郡条里遺跡 10・山ノ井遺跡 4

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



周溝墓 10-1 と 80 溝



縄文土器・石棒・土鍋

# 序 文

この調査は、大阪府によって進められている寝屋川流域総合治水対策の一環である一級河川恩智川法善寺多目的遊水地の整備に伴うものです。この整備予定地の範囲には、大県郡条里遺跡と山ノ井遺跡の二つの遺跡が広がっていることが知られていたため、当センターでは、平成 23 年から継続して埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。今回の調査はその 10 次目にあたります。

これまでの調査では、現代までつづく古代条里制に伴う地割の痕跡を検出しているほか、近年では、弥生時代から古墳時代の流路や方形周溝墓を検出するなど、地下深くの状況が次第に明らかとなってまいりました。

今回の調査では、上層では古代から連続と続く条里型地割の痕跡を検出し、下層ではこれまでの調査も含めてはじめての円形周溝墓を確認いたしました。この遺跡が位置する河内地域では検出例の少ない形状の墓であり、今後の類例の蓄積が望まれます。また近接して縄文集落が存在していたことを推測させる土器や石器など、これまでにない量の遺物が出土しました。中には土偶や石棒など、縄文文化を特徴づける遺物も含まれているなど、縄文時代の研究にとってたいへん有用な資料を得ることができました。これらの成果を収めた本書が多くの方々に活用され、当地域の歴史解明に少しでも役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたりご指導とご協力を賜った大阪府都市整備部八尾土木事務所、大阪府教育庁文化財保護課、柏原市教育委員会をはじめ、周辺住民の皆様には深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業につきまして、より一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和 6 年 1 月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 坂 井 秀 弥



# 例 言

1. 本書は、大阪府柏原市法善寺4丁目地内に所在する大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府都市整備部八尾土木事務所の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、大阪府教育庁文化財保護課の指導・監督のもと実施した。整理作業及び本書の編集も公益財団法人大阪府文化財センターが行ない、令和6年1月31日の本書刊行をもって一連の事業を完了した。調査名・契約名称・契約期間・現地調査期間等については以下のとおりである。

【調査名】大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡 22-1

【委託事業名称（現地調査）】寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その10）発掘調査

【委託契約期間】令和4年7月1日～令和5年8月31日

【現地調査期間】令和4年7月1日～令和5年4月30日

【委託事業名称（整理作業）】寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その11）発掘調査

【委託契約期間】令和5年1月4日～令和6年1月31日

【遺物整理期間】令和5年5月1日～令和5年10月31日

【印刷製本期間】令和5年11月1日～令和6年1月31日
3. 現地調査及び整理作業は以下の体制で実施した。

〔令和4年度〕総務企画課長 亀井 聡、同 主査 永野 仁  
調査課長 佐伯博光、同 課長補佐 後藤信義、同 主査 伊藤 武、同 技師 田中秀弥

〔令和5年度〕総務企画課長 島谷美穂、同 主査 永野 仁  
調査課長 佐伯博光、同 課長補佐 後藤信義、同 主査 伊藤 武
4. 遺構の写真撮影は伊藤・田中が、遺物の写真撮影は中部調査事務所写真室が行なった。
5. 遺跡の古環境復原、また年代測定のため、株式会社 古環境研究所に委託し、検出した遺構の埋土について植物珪酸体分析を、株式会社 パレオ・ラボに委託し、遺物や土壌の放射性炭素年代測定、及び炭素窒素同位体比分析をそれぞれ実施した。それらの成果については、提出された報告書を本報告用に編集直し、第5章に掲載した。
6. 報告書の作成にあたって、以下の方々よりご指導を賜った。記して謝意を表したい。（敬称・所属略）  
上相英之（光拓本）、岡田憲一（縄文土器）、尾形優真（石器）、松永悦枝（須恵器）  
三好孝一（土器全般）、森岡秀人（弥生土器・土師器）
7. 本書の執筆は伊藤と田中が分担し、編集は伊藤が行なった。田中は、縄文時代の遺物及びサヌカイト製石器について、それ以外の遺物や遺構については伊藤が担当した。ただし第6章の凸帯文土器以下については、田中の原稿の要点を4頁に収まるように編集直しして掲載している。また、第2章第2節については、（その9）調査を担当した寶珍貴史の原稿を伊藤が修正して掲載した。
8. 本調査に関わる遺物及び写真・実測図等の記録類は、公益財団法人大阪府文化財センターが保管している。広く利用されることを希望する。

# 凡 例

1. 遺構図及び断面図に示した標高は、東京湾平均海面（TP.）を基準にしている。単位は全てメートルである。
2. 発掘調査での使用測地系は世界測地系（測地成果 2000）である。遺構図に記載した座標値の単位は全てメートルである。
3. 本書で用いた北はいずれも平面直角座標系第Ⅵ系の座標北を示す。
4. 現地調査及び整理作業は、公益財団法人大阪府文財センターが平成 22 年度に作成した『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して進めた。
5. 土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。  
なおその記載順は、記号・土色・土質とした。  
例：10YR5/6 黄褐 シルト
6. 遺構番号は、遺構の種類や調査区に関わらず 1 から通して付した。その場合「溝」や「土坑」などの遺構種類の前に番号を振った。複数の遺構の集合体である周溝墓については、各遺構番号とは別に集合体独自の遺構番号を付した。この場合は混乱を避けるため「周溝墓」の後に番号を振った。また将来的に（その 10）調査で検出した周溝墓であることがわかるよう、番号を「10-1」とした。  
例：「1 溝」・「40 ビット」・「55 土坑」・「周溝墓 10-1」
7. 本書中の遺構番号は、基本的には現地調査段階で振ったものをそのまま使用したが、遺構番号が漏れていたものや、番号が重複していたものについては、整理の段階で修正し、新たに番号を付した。
8. 遺構図における断面位置は、図面上に「ト」形によってその位置を示した。縮尺は各図のスケールバーを参照されたい。
9. 遺物実測図の縮尺は、土器・瓦・土製品・石製品（サヌカイト製石器と石庖丁を除く）は 3分の1、銭貨・鏡は 3分の2、その他の金属製品・サヌカイト製石器・石庖丁は 2分の1、木製品は 6分の1を基本としたが、大型の縄文土器や小型木製品などは、遺物に即して異なる縮尺としており必ずしもこの限りではない。各々の縮尺については、スケールバーに明示しているのでそちらを参照されたい。
10. 遺物実測図の断面については、縄文土器・弥生土器・土師器は白抜きとし、それ以外の黒色土器・瓦器・瓦質土器・須恵器・陶磁器類は黒塗り、瓦・土製品・石製品・金属製品はグレーとしている。また縄文土器についてののみ、胎土から生駒山西麓産ではないと判断できるものは、遺物番号にアンダーバーを入れた。
11. 写真図版中の遺物番号は挿図の遺物番号と対応する。また遺物写真のうち、俯瞰撮影を行ない縮尺率が判明しているものについては、写真の隅に縮尺率を記したが、カメラ（レンズ）の特性上正確な縮尺にはなっていない。
12. 遺構埋土については、本文中では何層もあるものを簡潔にまとめて説明しているため、挿図記載の土色とは表現が微妙に異なっている。詳細については挿図を参照されたい。

# 目 次

巻頭原色図版

序文・例言・凡例

第 1 章	調査の経緯と経過	1
第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	調査の経過	3
第 2 章	位置と環境	4
第 1 節	地理的環境	4
第 2 節	歴史的環境	5
第 3 章	調査の方法	9
第 1 節	現地調査	9
第 2 節	整理作業	12
第 4 章	調査の成果	14
第 1 節	基本層序	14
第 2 節	遺構と遺物	22
第 5 章	自然科学分析	80
第 1 節	分析の目的	80
第 2 節	放射性炭素年代測定	81
第 3 節	炭素・窒素安定同位体比分析	86
第 4 節	植物珪酸体分析	88
第 6 章	総 括	91

写真図版

報告書抄録

# 巻頭原色図版目次

上. 周溝墓 10-1 と 80 溝

下. 縄文土器・石棒・土偶

## 挿入写真目次

写真1	遺跡公開風景……………3	写真5	調査地南側の水田に残る鳥畠……………23
写真2	昭和23年の調査地周辺の状況……………4	写真6	測定試料……………82
写真3	作業風景……………13	写真7	植物珪酸体写真……………89
写真4	14層下層に広がる厚い砂層……………21		

## 挿表目次

表1	主要ピット一覧……………76	表4	結果一覧……………86
表2	測定試料及び処理……………83	表5	植物珪酸体分析結果……………88
表3	放射性炭素年代測定及び 暦年校正の結果……………83	表6	サヌカイト製石器計測表(掲載分)……………97
		表7	サヌカイト製石器計測表(未掲載分)……………97

## 挿図目次

図1	調査地位置……………1	図19	4溝・145土坑断面……………30
図2	今回の調査区と既往の調査区……………2	図20	鏡出土状況……………31
図3	調査地周辺の遺跡分布……………6	図21	9a層出土遺物……………32
図4	地区割り方法……………10	図22	9層下面検出遺構……………33
図5	地区割り……………11	図23	9層下面検出畦畔及び溝・踏込断面……………34
図6	基本層序断面(南北)……………17	図24	10a層出土遺物……………35
図7	基本層序断面(東西)……………19	図25	11a層出土遺物……………36
図8	3層下面検出遺構……………22	図26	10・11層下面検出遺構……………38
図9	143・144溝断面……………23	図27	10層下面検出畦畔・踏込断面……………39
図10	4層下面検出遺構……………24	図28	11層下面検出遺構……………40
図11	卒塔婆出土状況(1)……………25	図29	22畦畔断面……………40
図12	4a層及び1・2溝出土遺物……………25	図30	12a層出土遺物(1)……………41
図13	6層下面検出遺構……………26	図31	12a層出土遺物……………42
図14	5a・6a層出土遺物……………27	図32	12層下面検出遺構……………43
図15	7層下面検出遺構……………28	図33	23溝断面……………43
図16	卒塔婆出土状況(2)……………28	図34	23溝出土遺物……………44
図17	7a・8a層及び4溝・145土坑出土遺物……………29	図35	13a層出土遺物(1)……………45
図18	8層下面検出遺構……………30	図36	13a層出土遺物(2)……………46

図 37	13a 層出土遺物 (3)……………	47	図 56	土坑出土遺物 (2)……………	69
図 38	13a 層出土遺物 (4)……………	48	図 57	13 層下面検出土坑平面・断面 (5)……………	70
図 39	13a-1 層出土遺物……………	49	図 58	13 層下面検出土坑平面・断面 (6)……………	71
図 40	13a-2 層出土遺物……………	50	図 59	13 層下面検出落込・炭溜断面……………	72
図 41	13a-2 層・13a-2 層下面出土遺物 及び石棒・土器出土状況……………	51	図 60	落込出土遺物……………	73
図 42	13 層下面検出遺構……………	53	図 61	202 落込西肩部土器出土状況……………	73
図 43	周溝墓 10-1 関連遺構平面・断面 及び土器出土状況……………	55	図 62	13 層下面検出ピット断面 (1)……………	74
図 44	周溝墓 10-1 出土遺物……………	57	図 63	13 層下面検出ピット断面 (2)……………	75
図 45	50・51 溝断面……………	57	図 64	ピット出土遺物……………	78
図 46	50・51 溝出土遺物……………	59	図 65	14 層出土遺物及び土器出土状況……………	79
図 47	80・100 溝断面……………	60	図 66	分析試料とその出土位置……………	80
図 48	80・100 溝出土遺物……………	61	図 67	暦年校正結果……………	83
図 49	13 層下面検出溝断面……………	62	図 68	マルチプロット図……………	83
図 50	152・153・198 溝出土遺物……………	62	図 69	炭素・窒素安定同位体比……………	87
図 51	13 層下面検出土坑平面・断面 (1)……………	63	図 70	炭素安定同位体比と C/N 比の関係……………	87
図 52	13 層下面検出土坑平面・断面 (2)……………	65	図 71	植物珪酸体分析結果……………	89
図 53	13 層下面検出土坑平面・断面 (3)……………	66	図 72	耕作土層の生成と 畦畔の構築過程復原図……………	91
図 54	土坑出土遺物 (1)……………	67	図 73	畦畔の見え方概念図……………	92
図 55	13 層下面検出土坑平面・断面 (4)……………	68	図 74	縄文時代から古墳時代の遺構分布……………	94

## 写真図版目次

扉：調査地上空から東方に連なる生駒山地を望む〔北半部調査中〕

### 写真図版 1 遺構

1. 南半 3 層下面検出遺構〔南西から〕
2. 北半 3 層下面検出遺構
3. 北半 4 層下面検出 2 溝延長部の砂層
4. 北半 6 層下面検出砂の盛り上がり
5. 南半 7 層下面検出砂層の広がり

### 写真図版 2 遺構

1. 南半 8 層下面検出 4 溝と  
出土した卒塔婆 (42)
2. 鏡 (38) 出土状況
3. 北半 8 層下面検出 4 溝

### 4. 4 溝断面 (南半部北端)

5. 南半 9 層下面検出遺構〔南西から〕

### 写真図版 3 遺構

1. 北半 9 層下面検出遺構
2. 南半 9 層下面 6 畦畔検出状況
3. 北半 9 層下面 147 畦畔検出状況
4. 6 畦畔断面
5. 南半 10 層下面検出遺構〔南西から〕

写真図版4 遺構

1. 北半 10・11 層下面検出遺構 [北西から]
2. 北半 11 層下面検出 22 畦畔と  
148・246 畦畔接続部 [北東から]

写真図版5 遺構

1. 南半 10 層下面 22 畦畔と  
19 畦畔接続部検出状況
2. 南半 10 層下面 19 畦畔検出状況
3. 北半 10 層下面 22 畦畔と  
147 畦畔接続部検出状況
4. 北半 10 層下面 22 畦畔と  
148 畦畔接続部検出状況
5. 北半 10 層下面 22 畦畔検出状況
6. 149 畦畔断面
7. 南半 12 層下面 23 溝検出状況
8. 銭貨 (172) 出土状況
9. 銭貨 (174) 出土状況

写真図版6 遺構

1. 南半 13 層下面検出遺構 [南西から]
2. 北半 13 層下面検出遺構 [北から]

写真図版7 遺構

1. 北半 13 層下面検出遺構  
(手前は周溝墓 10-1) [北から]
2. 周溝墓 10-1 検出状況
3. 150 周溝断面 (南東部) と  
土師器 (354) 出土状況
4. 150 周溝断面 (南西部)
5. 150 周溝弥生土器 (350) 出土状況

写真図版8 遺構

1. 200 落込
2. 200 落込と 224 土坑
3. 202 落込と 212・229・231 土坑
4. 151 溝
5. 80 溝断面 (南半)

6. 80 溝断面 (北半)

7. 89 土坑
8. 90 土坑

写真図版9 遺構

1. 126 土坑
2. 127 土坑
3. 130 土坑
4. 229 土坑
5. 48 ビット
6. 248 ビット
7. 南半 50 溝付近の砂層の落込み
8. 北半 14 層中の砂層

写真図版10 遺構

1. 152 溝石庖丁 (405) 出土状況
2. 202 落込肩部縄文土器 (457) 出土状況
3. 13a 層弥生土器 (252) 出土状況
4. 13a-1 層石斧 (301) 出土状況
5. 13a-2 層下面石棒 (334) 出土状況
6. 13a-2 層下面縄文土器 (341) 出土状況
7. 14 層縄文土器 (472) 出土状況
8. 14 層縄文土器 (473) 出土状況

写真図版11 出土遺物 (土器・土製品)

写真図版12 出土遺物 (土器)

写真図版13 出土遺物 (土器)

写真図版14 出土遺物 (土器)

写真図版15 出土遺物 (土器)

写真図版16 出土遺物 (土器・土製品)

写真図版17 出土遺物 (石製品)

写真図版18 出土遺物 (石鏃)

写真図版19 出土遺物 (金属製品・木製品)

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

本調査は、大阪府都市整備部八尾土木事務所（以下「事業者」）によって進められている一級河川恩智川法善寺多目的遊水地の整備に伴うものである。この遊水地の整備は、寝屋川流域総合治水対策の一環であり、洪水を計画的に一時貯留することにより、下流河川の負担を軽減することを目的としている。このため、整備予定地の面積は広大で、且つ地下深くまで掘削工事が及ぶことになる。

整備が進められている場所は、柏原市の北端、八尾市との市境付近の約114,000㎡の範囲であり（図1・写真2）、西半部が周知の埋蔵文化財包蔵地「大県郡条里遺跡」の一部と、東半部が「山ノ井遺跡」の一部と重複する。このため、平成14年度（2002）と15年度（2003）の2度にわたって、遺跡の性格や内容を把握するための事前の遺跡確認調査が、大阪府教育委員会（現大阪府教育庁）（以下「府教委」）によって実施された。この調査では、事業予定地の全域から平安時代以降の遺物が出土したほか、山ノ井遺跡側からは弥生時代中期から古墳時代初頭の土器や、奈良時代の瓦の出土も確認された。また大県郡条里遺跡側からは、中世の層中に縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が混入していることが確認され、下層

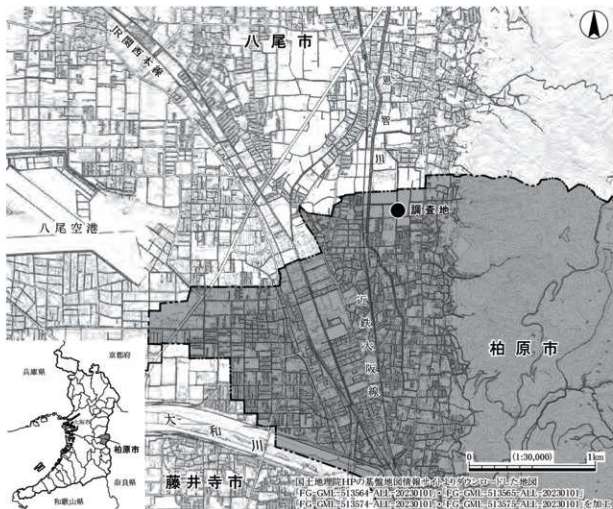
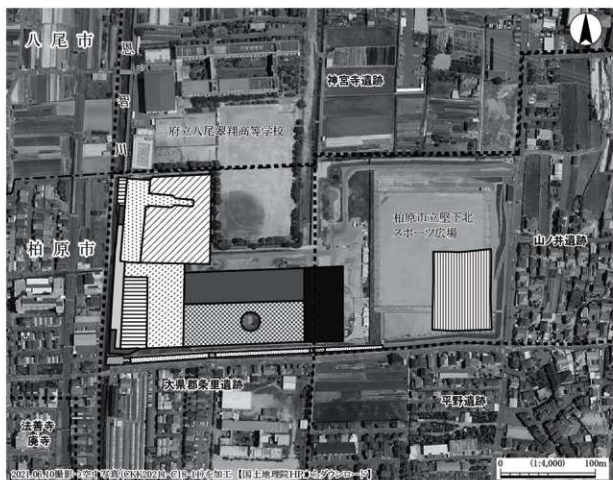


図1 調査地位置

にこの時期の遺構・遺物の存在が予想された。

上記調査によって、工事に先立つ本格的な発掘調査が必要と判断されたため、事業者（当時 大阪府土木部）は、平成 16 年（2004）8 月 6 日付けて府教委に発掘調査を依頼〔河整第 1469 号〕。府教委は事業者に対して財団法人大阪府文化財センター（現 公益財団法人大阪府文化財センター）（以下「当センター」）に調査を依頼するよう回答〔教委文 1919 号〕。同時に当センターに調査を実施するよう通知した〔教委文 1919 号〕。これにより、平成 23 年度（2011）より文化財保護法第 99 条に基づき発掘調査が開始されることとなった。

今回の調査地は、これまでに実施された大県郡条里遺跡（その 8）・（その 9）調査区の東側に隣接する。大県郡条里遺跡と山ノ井遺跡の二つの遺跡に跨っており、調査地西側の約 3 分の 1 が大県郡条里遺跡、東側の約 3 分の 2 が山ノ井遺跡の範囲となる。大県郡条里遺跡としては 10 次目、山ノ井遺跡としては 4 次目の調査である（図 2）。



- |   |  |
|---|--|
|  大県郡条里遺跡（その1）            |  大県郡条里遺跡（その6） |
|  大県郡条里遺跡（その2）            |  大県郡条里遺跡（その7） |
|  大県郡条里遺跡（その3）・山ノ井遺跡（その1） |  大県郡条里遺跡（その8） |
|  大県郡条里遺跡（その4）・山ノ井遺跡（その2） |  大県郡条里遺跡（その9） |
|  山ノ井遺跡遺跡（その3）            |  今回の調査地       |
|  大県郡条里遺跡（その5）            |  |

図 2 今回の調査区と既往の調査区





写真1 遺跡公開風景

今回の調査に先立ち、事業者と当センターは、平成27年3月5日付けで事業者・府教委・当センターの三者で締結した「覚書」に基づき、令和4年6月30日付けで委託契約を締結し、令和4年7月1日から令和5年4月30日までの期間で現地での発掘調査を実施した。調査面積は2,970㎡である。

## 第2節 調査の経過

大県部条里遺跡と山ノ井遺跡との遺跡境には、かつての坪境を示す用水路が通っていた。令和4年(2022)7月から直ちに発掘調査を開始できるよう、事前にその構造物撤去作業が行なわれた。予定どおり7月1日から、まずは南半部の機械掘削を開始したが、本格的な人力掘削開始は7月25日となった。各地層の掘削と、掘削面での遺構検出を繰り返し、11月18日に南半部最終遺構面のドローンによる空中写真測量を実施した。

南半部の機械掘削および人力掘削で発生した排土については、事業用地内に仮置きするスペースが確保できなかったことから、すべて調査区の北半部に仮置きすることとなった。このため南半部の人力掘削期間中に北半部の機械掘削を完了することが困難となった。南半部の人力掘削と併行して、機械掘削および排土の場外搬出を進めたが、南半部の人力掘削完了時には間に合わず、北半部の人力掘削開始は12月7日となった。南半部と同様に各地層の掘削と、掘削面での遺構検出を繰り返し行ない、令和5年(2023)3月16日に北半部のドローンによる空中写真測量を実施した。

上記のように二分割して発掘調査を実施し、最終遺構面の調査がほぼ終了に近づいた段階で、大阪府教育庁文化財保護課の立ち合いによる確認・指導を受け、その後の調査指示を仰いだ。文化財保護課の指示により、遺構の再確認や掘削など残りの調査を行ない、令和5年4月末日をもって現地調査を完了した。

なお、調査期間中の令和5年(2023)3月18日には、調査地近隣の方々を主たる対象とした遺跡の公開を行なった。事業予定地内で実施した発掘調査では初めての遺跡公開であったことから、前日からの雨天にもかかわらず、163名もの見学者が来場された(写真1)。

### 参考文献

- 1) 大阪府教育委員会 2005『大県部条里遺跡確認調査概要』

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

遺跡が所在する柏原市は、大阪府の南東部、奈良県との府県境に位置する。市の規模は東西・南北共に約6.6km、面積25.3km<sup>2</sup>で、北側に八尾市、西側に藤井寺市、南側に羽曳野市が接する。奈良県と接する市域の東辺部には、市全体の約3分の2の面積を占める山地が広がっており、この環境を生かしたブドウの栽培が盛んである。市の中央部には、奈良盆地から生駒・葛城山地を西に抜け出した大和川が、柏原市内で南河内を北流してきた石川と合流して西流する。本来の大和川は、石川と合流した後も北流して、今回の調査地の西側で久宝寺川（現 長瀬川）と玉櫛川（現 玉串川）に分岐し、それぞれはさらに幾筋もの河川に分かれて、深野池や新開池などに注ぎ込みながら、最終的には淀川と合流して大阪湾へと流れ込んでいた。しかし長い間の土砂の堆積により天井川となり、たびたび大阪平野で大規模な氾濫を起こした。このため宝永元年（1704）に念願であった流路の付け替え工事が始まり、現在のような柏原市内を東西に横断する流路へと変更されることとなった。この大和川の旧流路には新田の開発が進み、砂地に適した「河内木綿」の栽培が盛んとなった。この旧流路の痕跡は現在でもいたるところで確認することができる。今回の調査地は、この旧大和川が形成した自然堤防と、東の生駒山地から流れ出た小河川によって形成された扇状地に挟まれており、周辺には古代の条里痕跡が碁盤目状に残る水田域が広がっている（写真2）。



写真2 昭和23年の調査地周辺の状況

## 第2節 歴史的環境

柏原市は、河内と大和とを結ぶ交通・水運の要衝である。人や物資の往来が盛んで、歴史的にも古くから栄えた。特に生駒山西麓に形成された扇状地上には、古い時代からの遺跡が多く分布しており(図3)、人々の活発な営みをうかがうことができる。以下、時代ごとに調査地周辺の遺跡を概観する。

### 旧石器時代・縄文時代

八尾市八尾南遺跡や藤井寺市国府遺跡、羽曳野市翠鳥園遺跡など、近接市域では旧石器時代の良好な資料が確認されているが、柏原市内では石器は出土するものの、この時代の人々の明確な活動痕跡は未だ確認されていない。

縄文時代に入ると、生駒山西麓地域においてその痕跡を確認することができるが、遺跡の数はまだ少ない。調査地南側に位置する大泉遺跡では、草創期の有茎尖頭器をはじめ、早期の押型文土器がみつまっている。後期の斧跡と思われる石刃遺構も検出されており、この頃から人々が定住したと考えられている。調査地の北方に位置する八尾市恩智遺跡では、前期から晩期にかけての土器が出土しており、特に晩期中葉の土器が多い。まとめて出土した土器群の中には、在地の土器に混じって東北地方の大洞式土器や瀬戸内の谷尻式土器など他地域の土器が出土しており、また、東大阪市と八尾市に跨る池島・福万寺遺跡、八尾市久宝寺遺跡、田井中遺跡などからは、中部地方から関東・東北南部でみられる晩期後半の浮線網状文土器が出土しているなど、この時期には他地域との交流が盛んであったことがうかがえる。

晩期末葉になると、調査地南方の大泉遺跡、船橋遺跡、安堂遺跡などからは、船橋式や長原式などの凸帯文土器が多く出土するようになる。サヌカイト製の石器も多く、中には香川県金山産サヌカイトも多く含まれている。今回の調査でも、長原式の凸帯文土器が多く出土しており、大泉部条里遺跡(その2)調査では、この時期の竪穴建物や土坑などの遺構も確認されているが、上記恩智遺跡では、逆にこの時期のみ遺物量が減少しており、集落の移動を考えるうえで非常に興味深い。

また今回の調査では、晩期の土偶や石棒も出土している。同時期の土偶は、近隣の恩智遺跡、船橋遺跡、玉手山遺跡、また河内平野に立地する池島・福万寺遺跡や大阪市長原遺跡、東大阪市西ノ辻遺跡、宮ノ下遺跡、八尾市久宝寺遺跡、田井中遺跡、山賀遺跡などからもみつまっている。中でも長原遺跡や西ノ辻遺跡、田井中遺跡や久宝寺遺跡、宮ノ下遺跡、池島・福万寺遺跡出土の土偶は、今回出土したものとよく似た「台式土偶長原タイプ」と呼ばれるものである。石棒については、大泉部条里遺跡(その6)の調査でも残存長34cmのものが出土しており、(その8)・(その9)調査や、周辺では恩智遺跡、平野部では志紀遺跡、久宝寺遺跡、亀井遺跡、田井中遺跡などからも出土している。

### 弥生時代

弥生時代になると、前期には旧大和川流域の平野部を中心に、山賀遺跡や亀井遺跡など数多くの集落が出現するが、生駒山西麓地域では縄文時代に引き続き恩智遺跡や大泉遺跡などで集落が展開する。中期になっても生駒山西麓地域では基本的に前期と同じ位置に集落が営まれ、恩智遺跡では居住域の北西部に環濠帯が出現する。この集落を見下ろす東側の山中からは、集落が保有していたと考えられている垣内山銅鐸(外縁付鈕2式流水文)と都塚山銅鐸(扁平鈕式新段階袈裟禪文)が出土している。後期になると、大泉遺跡で居住域が広がるほか、当遺跡南東側に位置する高尾山の山頂に高地性集落が出現する。その近くからは多紐細文鏡が出土している。

前期以降、調査地西側の志紀遺跡や田井中遺跡などでは、畦畔や溝を備えた水田の開発が進むが、調査

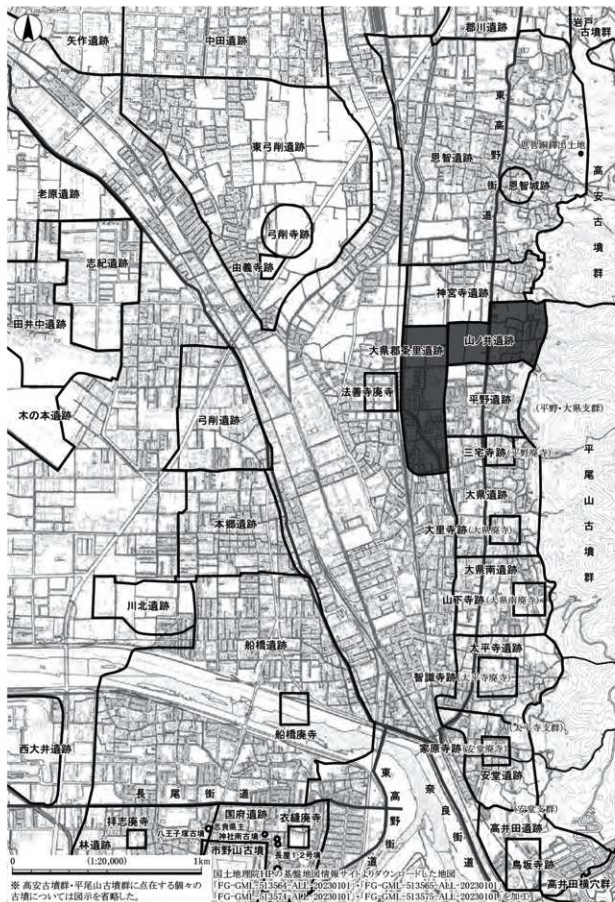


図3 調査地周辺の遺跡分布

地周辺では未だ水田は確認されていない。

また田井中遺跡では、前期から方形周溝墓の築造が始まる。中期以降は、多くの遺跡で方形周溝墓が築かれ、その規模も拡大していく。大県郡条里遺跡でも、(その8)・(その9) 調査において中期後半から後期後半の方形周溝墓(墳丘墓)が3基確認されている。

### 古墳時代

調査地北側に隣接する神宮寺遺跡では、前期初頭の河川が検出され、恩智遺跡でも集落が確認されている。また大県郡条里遺跡(その8) 調査では、同時期の方形周溝墓(墳丘墓)が検出されている。

調査地南側の大県遺跡、大県南遺跡、太平寺遺跡などからは、6世紀後半期を中心とした鉄滓や輪羽口、灰跡などの鍛冶に関連する遺構・遺物が数多く確認されており、その一帯に鍛冶集団の集落が広がっていたと考えられている。大県遺跡からは多数の韓式土器もみつまっていることから、鍛冶集団と渡来人との関係も指摘されている。

6世紀以降、調査地東側の生駒山地中腹には、平尾山古墳群や高安古墳群などの古墳群が築かれる。平尾山古墳群の大県支群・平野支群からはミニチュア炊飯具やかんざしなど、渡来系の副葬品が出土しており、韓式土器が出土した大県遺跡との関係が注目される。

平野部の志紀遺跡や田井中遺跡では、6世紀代の水田が確認されているが、調査地周辺では古墳時代の水田は確認されておらず、生産域の状況については不明な点が多い。

### 古代

調査地は、古代の行政区画では「大県郡大里郷」に属しており、現在でも、周辺には条里制に伴う整然と区画された耕作域が広がっている。当遺跡における条里型地割の出現時期は判然としませんが、遅くとも9世紀頃には開発が進んでいたのではないかと考えられている。なお西側に位置する志紀遺跡や田井中遺跡では、条里制によって区画された8世紀の水田が確認されている。

平安時代になると、調査地東方の山麓部を南北に通る街道が、平安京と高野山とを結ぶ「東高野街道」として本格的に整備され、以降、京から高野山・熊野三山・吉野などの霊場への参詣道として広く利用される。この東高野街道は、現在まで踏襲され、幹線道路として人や物資の流通に重要な役割を果たした。

その山麓の街道沿いには、北から三宅寺(平野廃寺)・大里寺(大県廃寺)・山下寺(大県南廃寺)・智識寺(太平寺廃寺)・家原寺(安堂廃寺)・鳥坂寺(高井田廃寺)の「河内六寺」と呼ばれる寺院が、7世紀中頃から後半にかけての短い時期に次々と建立される。『続日本紀』天平勝宝8年(756)には、この六寺を孝謙天皇が行幸・礼仏されたことが記されている。三宅寺については、これまでの数次にわたる調査でも、古代寺院に関わる遺構・遺物は確認できていないが、それ以外の各寺院跡からは寺跡の存在を示す良好な資料が数多くみつまっている。大里寺では北辺部で検出した井戸から「大里寺」、山下寺では西側に近接する調査で「山下春川」、鳥坂寺では井戸から「鳥坂寺」と墨書された土器がみつまっているほか、多くの瓦に混じって鳥坂寺や智識寺から陶瓦、家原寺からは鬼瓦が出土している。また、鳥坂寺からは遺存状態が非常に良好な金堂の基壇や階段が、智識寺からは塔基壇が、家原寺からは礎石に混じって塔心礎が検出されている。

六寺のほか、8世紀後半には称徳天皇と道鏡によって、調査地西方に由義寺が建立される。『続日本紀』にはその名が登場するものの、所在不明であったことから「幻の寺院」と呼ばれていたが、平成28年(2016)の調査で、塔跡と考えられる一辺が約20mの方形基壇や、多種多様な軒瓦が確認された。基壇は掘り込み地業と版築によって築かれており、その規模から大和安寺の塔に匹敵する七重塔のものと考えられてい

る。瓦には平城宮をはじめ、興福寺や法隆寺など平城京内外の寺院と同範のものや、大阪市四天王寺、柏原市河内国分寺・国分尼寺と同範のものが含まれているなど、平城京（大和）・摂津国・河内国の三地域の瓦を使用していることも明らかとなった。

このほか、大泉遺跡では掘立柱建物や井戸とともに、8世紀を中心とした時期の鍛冶関連遺構や遺物が確認されており、古墳時代から平安時代初頭にかけて連綿と鍛冶集団が活動していたことが判明している。

## 中世

古代に設定された条里型地割の痕跡は、今回の調査同様、恩智遺跡の中世の遺構面でも確認されている。東高野街道周辺や「天王の森」一帯では居住域もみつかり、平安時代末から鎌倉時代初頭に記された『山塊記』の應保元年（1161）九月十七日の条に登場する「恩智庄」との関係が推定されている。また古墳時代から古代の鍛冶に関わる遺構・遺物が多くみつかった大泉遺跡でも、この時代には畦畔や溝を備えた耕作地へと姿を変えており、平野部の田井中遺跡や志紀遺跡なども含め、周辺の広い地域に、条里制に伴う整然と区画された水田景観が広がっていたことがうかがえる。なお山下寺跡寺域の調査では、14世紀の掘立柱建物や土坑が検出され、神宮寺遺跡でも室町時代の井戸やビットがみつかり、

周辺には中世寺院もいくつか点在する。東高野街道沿いには、大和西大寺叡尊によって再興された真言律宗寺院教興寺がある。臨池式伽藍配置を採用し、多くの塔中を構えた。また恩智遺跡の「天王の森」北側では、鎌倉時代の軒丸瓦・軒平瓦が多く出土しており、恩智神社の神宮寺である感応院の寺域であった可能性が考えられた。

このように、荘園や寺院を含めた中世集落の様相が徐々に明らかとなってきている。

## 参考・引用文献

- 大阪府教育委員会 2000『恩智遺跡発掘調査報告』
- 大阪府教育委員会 2016『大泉遺跡・東高野街道 一般国道（旧）170号交通安全施設等整備事業に伴う発掘調査一』
- 柏原市立歴史資料館 2007『河内六寺の輝き』
- 柏原市歴史資料館 2022『柏原の歴史1 旧石器～弥生時代』
- 柏原市教育委員会 1984『太平寺・安堂遺跡 1983年度』
- 柏原市教育委員会 1984『大泉・大泉南遺跡 下水道管渠埋設工事に伴う一』
- 柏原市教育委員会 1985『大泉南遺跡 一山下寺跡寺域の調査一』
- 柏原市教育委員会 1988『大泉南遺跡 一聖下小学校屋内部発掘に伴う一 1985年度』
- 柏原市教育委員会 1995『平野・大泉古墳群 一高尾山創造の森に伴う一』
- 柏原市教育委員会 1998『大泉南遺跡 一般称健康福祉センター建設に伴う一』
- 柏原市史編纂委員会 1973『柏原市史 第二巻本編（I）』『柏原市史 第四巻史料編（I）』柏原市役所
- 関西縄文文化研究会 2007『第8回関西縄文文化研究会 関西の突帯文土器 資料集』
- 増補史料大成刊行会編 1965『増補史料大成 山塊記一』臨川書店
- 竹内理三編 1975『荘園分布図 上巻』吉川弘文館
- 瓜生堂遺跡調査会 1980『恩智遺跡』
- 八尾市史編纂委員会 2019『新版 八尾市史 古代・中世史料編』八尾市
- 八尾市史編纂委員会 2020『新版 八尾市史 考古編2』八尾市
- 財団法人八尾市文化財調査研究会 1997『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』Ⅲ 神宮寺遺跡（第1次調査）
- 財団法人 大阪府文化財センター 2002『志紀遺跡 その2・3・5・6』
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2013『田井中遺跡2・木の本遺跡』、2013『大泉郡条里遺跡』、2014『田井中遺跡3』、2015『大泉郡条里遺跡2』、2016『大泉郡条里遺跡3・山ノ井遺跡』、2017『大泉郡条里遺跡4・山ノ井遺跡2』、2018『山ノ井遺跡3』、2020『大泉郡条里遺跡5』、2021『大泉郡条里遺跡6』、2021『大泉郡条里遺跡7』、2022『大泉郡条里遺跡8』

## 第3章 調査の方法

### 第1節 現地調査

現地での発掘調査は、当センターが平成22年に定めた『遺跡調査基本マニュアル』<sup>1)</sup>に準拠して行なった。

**調査名** 事業者との契約名称とは別に、当センターの調査台帳で管理する調査名を付した。調査年次がわかるよう「大塚郡条里遺跡・山ノ井遺跡22-1」とし、遺物取り上げラベルや写真撮影用ラベル・遺構図面、また遺物への注記など、すべてこの調査名を用いることとした。

**調査区割り** 排土置き場や、一度に行なえる空中写真測量の範囲などを考慮し、調査区を南北に二分割し、南から調査を進めた。ただし調査区名は分けずに一つの調査区とした。

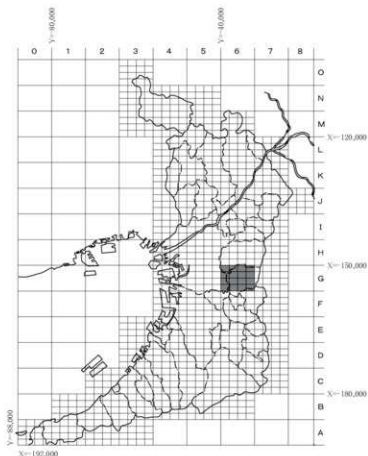
**地区割り** 遺物の取り上げに用いる区画割りで、当センターの調査領域である大阪府内全域を網羅する。世界測地系に則った平面直角座標系第VI系を基準とし、I～Vの大小5段階の区画を設定した(図4)。第I区画は大阪府の南西部を通る $X=-192,000$  m・ $Y=-88,000$  mを起点に、府城を東西9区画(0～8)、南北15区画(A～O)に分割したもので、一区画は東西8 km、南北6 kmとなる。第II区画は第I区画を東西、南北各4分割の、計16区画(1～16)に分けたもので、一区画は東西2.0 km、南北1.5 kmとなる。第III区画は第II区画を東西20分割(1～20)、南北15分割(A～O)する一辺100 mの区画である。第IV区画は第III区画をさらに東西、南北ともに10分割(東西1～10、南北a～j)した一辺10 mの区画で、出土遺物については、基本的にこの区画ごとに取り上げることとした。第V区画は第IV区画をさらに「田」の字状に4分割(I～IV)した一辺5 mの区画で、今回の調査では、遺物が多く含まれている北半の13層掘削時のみ使用した。

上記の方法で区画した場合、この調査の第I区画は「G6」、第II区画は「3・4」となり、第III区画は「I1・1J・20I・20J」の4区画に分かれる(図5)。なお遺物取り上げ用ラベルや遺物登録台帳への記入は、煩雑となるため第I・II区画は省略し、「20J-10c」のように第III区画以降のみとした。

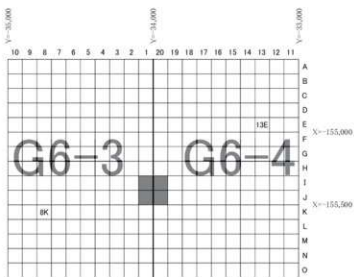
**掘削・記録** これまでの調査の成果を参考に、機械掘削により現代の盛土から近世以降の耕作土などを除去し、機械掘削完了面からスコップや鋤簾などを用いて人力掘削を行ない、遺構を検出した。掘削で生じた土砂はベルトコンベヤーを使用して調査区外へと搬出した。検出した遺構については、柱穴などの小さなものは片手用草削りや移植ゴテなどを用いて慎重に掘り下げた。埋土の堆積状況など観察が必要な遺構については、二分割するなど断面を残して掘削し、順次遺構平面や埋土堆積状況などの図面作成と写真撮影を行なった(写真3)。

最終遺構面の調査がほぼ終了に近づいた段階で、大阪府教育庁文化財保護課の確認を受け、その後の調査指示を仰いだ。

**写真撮影** 遺構写真については、以前は35mmカメラを使用していたモノクロフィルムとリバーサルフィルムの撮影を、デジタル一眼レフカメラ(APS-C)による撮影に切り替えた。使用したデジタルカメラは「Nikon D5600」で、RAWデータとJPEGデータを記録した。その際のファイル名はカメラの初期設定のまま「DSC-〇〇」とした。また調査区の全景写真や重要な遺構など必要に応じて6×7フィルムカメラを併用し、モノクロフィルムとリバーサルフィルムによる写真撮影を行なった。調査区の全景写真を撮影する場合には、高所作業車を利用して高位置からの撮影を行なった。その撮影は調査担当者が行なっている。

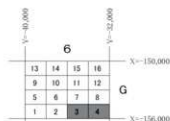


第Ⅰ区画 (1区画=南北6×東西8km)

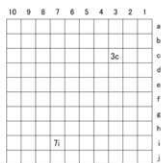


第Ⅲ区画 (1区画=100×100m)

は今回の調査地が含まれる区画



第Ⅱ区画  
(1区画=南北1.5×東西2km)



第Ⅳ区画 (1区画=10×10m)



第Ⅴ区画 (1区画=5×5m)

図4 地区割り方法

**遺構図** 調査区全体の遺構平面図は、遺構が稀薄な上層では、光波アリダードを用いた平板測量によって作成したが、最終遺構面で検出した遺構については、ドローンによる空中写真測量を南半と北半で1回ずつの合計2回行ない、50分の1の全体平面図とそれを縮小編集した100分の1の平面図を作成した。また各遺構の断面や遺物出土状況、調査区全体の地層断面などについては、オートレベルや巻尺、コンベックス



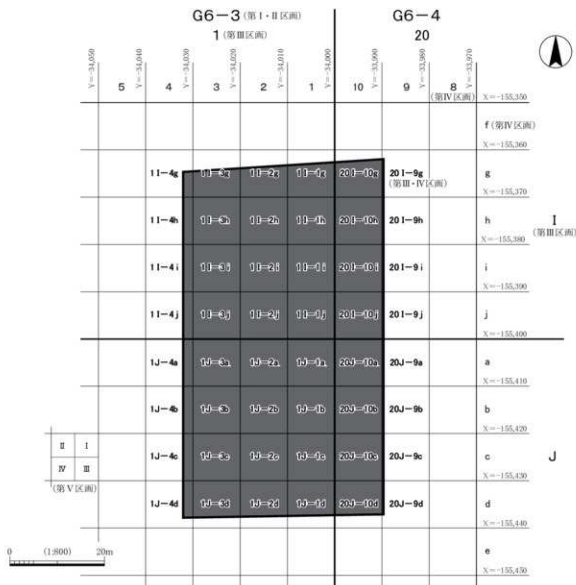


図5 地区割り

などを用いて、随時 20分の1や10分の1の図面を作成した。

方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）を用いた。

**遺構名** 遺構番号は、遺構の種類や調査区などに関わらず1から通して振り、遺構の種類は遺構番号の後ろに付した。「1溝」・「40ピット」・「90土坑」という具合である。つまり今回調査を実施した範囲内には、「40ピット」と「40土坑」のような同じ番号をもつ遺構は存在しない。ただし周溝と墳丘によって構成される「周溝墓」のような集合体の場合には、上記のような遺構番号とは別に集合体の遺構番号を付した。この場合「周溝墓 10-1」のように、遺構名称の後に番号を付けた。なお、通常は「周溝墓 1」のように若い番号から順に振るが、調査区が隣接する（その8）・（その9）の調査でも周溝墓が確認されており、将来的にそれらと混同するおそれがあることから、10回目の調査で検出した1基目の周溝墓であることがわかるよう、今回の調査で検出した周溝墓については「周溝墓 10-1」と呼ぶこととした。

## 第2節 整理作業

整理作業についても、当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して行なった。

現地調査期間中は、現場詰所において出土遺物の洗浄や注記、現地にて作成した遺構実測図や撮影した写真の整理など、基礎的な整理作業を現場作業と並行しながら実施し、現地調査終了後の令和5年5月から同年10月までは、東大阪市所在の当センター中部調査事務所において、本格的な遺物整理作業及び報告書の作成を進めた。

**遺物** 整理作業の対象となった遺物は、縄文時代から中世に属するものが中心である。現場撤収時の遺物量は収納コンテナに35箱で、内容は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、輸入磁器、国産陶器、瓦、石棒・石鎌・石斧・石庖丁・砥石・敲石などの石製品、銭貨・鏡・鉄鏃・銅鏃などの金属製品、卒塔婆・容器底板などの木製品、土偶・土鍾などの土製品などである。

出土遺物には原則出土した日付順に登録番号を付し、ブラシやハケを用いて洗浄し、乾燥後は遺物登録台帳と照合できるように注記作業を行なった。ただし木製品や金属製品、石鏃など一部の石製品には注記していない。注記は面筆を用いて遺物の端に小さな文字で登録番号を墨書したが、黒い瓦器など墨では目立たない場合には白インクを使用した。なお、その注記には調査名を書きやすいように省略して「大カタ22-1遺物登録番号」とした。注記後は遺物の内容が分かるよう登録番号ごとにデジタルカメラで撮影して、調査区・地区割り・出土遺構面/層位・遺構番号・出土年月日・遺物内容などを記入した出土遺物台帳を作成した。また本格的な整理作業が始まった段階で、遺構ごとに広げて接合作業を行ない、出土した遺物の内容を確認しながら、実測可能な遺物を抽出した。抽出したものは必要に応じて石膏を用いた復元作業を行ないながら順次実測作業を行なった（写真3）。また縄文土器や鏡の文様、銭貨などについては実測図に貼り込めるよう拓本をとった。

上記の手順で作成した手描きの遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込み、描画ソフト（Adobe Illustrator）を用いてトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本などのデータを貼り込み、挿図を作成した。本書に掲載した遺物は最終的に474点となった。なお掲載遺物については、出土遺物台帳とは別に実測遺物台帳も作成している。

**遺構** 最終遺構面の遺構平面については、既に空中写真測量によってデジタル化されていたため、調査区全体の平面図や個々の遺構平面図の多くは、これを加工して作成した。それ以外の現地で実測した全体平面図や個々の遺構断面、遺物出土状況、調査区の地層断面などについては、遺物同様の手順でデジタルトレースし、挿図を作成した。

このように報告書掲載の挿図は、遺物・遺構ともにすべてデジタル化したものを用いた。

**写真** 現地で撮影したモノクロ/リバーサルフィルムについては、その都度現像・焼き付けに出し、直ちにアルバムへの収納及び台帳登録を進めた。遺構写真台帳へはデジタルカメラで撮影した写真を用い、調査区・地区割り・遺構番号・遺構種類・撮影内容・撮影方向・撮影日・撮影者などとともに、全景写真などフィルム撮影も行なったものについては、収納したフィルムを検索できるよう、アルバム・フィルム番号も記入した。

報告書写真版のうちの遺構写真については、6×7フィルムからの引き伸ばしではなく、デジタルカメラで撮影したRAWデータを色調補正して使用した。使用した写真については、遺構写真台帳にその旨明記している。遺物写真については、挿図のレイアウトがほぼ決まった段階で、大まかに図版レイアウトを組み、中部調査事務所の写真室へ遺物を搬入して撮影を行なった。

**報告書編集** これらの作業が進み、挿図や写真図版が大まかに出来上がってきた段階から、並行して本文の執筆に取りかかった。また文章量と調整しながら挿図の組み換えや遺物番号の入れ替えなどを行ない、写真図版と併せて報告書の編集作業も進めた。

**収納・保管** 整理作業を終えた遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外の未掲載遺物に分け、マニュアルにしたがって収納コンテナに内訳を記したラベルを貼って収納した。収納には内寸が55×34×15cmのコンテナを主に使用したが、卒塔婆などの長大なものについては、内寸130×30×18cmの異形コンテナを用いた。最終的なコンテナ数は、掲載遺物20箱、未掲載遺物33箱となった。

図面のうち遺構実測図については、調査区ごとに分けて左上隅に通しの図面番号を赤鉛筆で記入し、調査区・記録内容・縮尺などを明記した遺構図面台帳を作成した後、A2サイズのファイルに収納した。遺物実測図の収納にはA3サイズのファイルを用いた。

各種台帳やデジタルカメラで撮影した遺構写真、報告書原稿などのデジタルデータは外付けハードディスクに格納した。

これらの出土遺物や実測図面・写真・台帳などの記録類は、報告書刊行後にすべて当センターから大阪府に移管する予定である。

## 註

### 1) 財団法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』

このマニュアル策定後、フィルムカメラ本体やフィルムの製造中止、またフィルム現像所の減少などが相次いだことにより、遺構の撮影がフィルムカメラからデジタルカメラへと移行が進んだ。また整理作業時に作成する各種台帳も、自治体に返却した時の汎用性や簡便性を重視し、ファイルメーカーで作成するものからエクセルの台帳へと変わってきた。これらに伴いマニュアルもその都度こまめに更新している。



写真3 作業風景

## 第4章 調査の成果

### 第1節 基本層序

前章で記したとおり、調査区を南と北に二分割して調査を進めた。調査区の周囲には南半・北半それぞれ排水を兼ねた側溝をめぐらせ、且つ側溝より内側には、調査区内を4分割（全体では8分割）するよう、それぞれに田の字となるようなトレンチを設けた。調査区内の層序は、これらの側溝やトレンチの壁面で観察し、写真や図面の記録には、この田の字としたトレンチの壁面を用いた（図6・7）。また特徴的な層序については適宜周囲の側溝壁面でも記録をとった。

当遺跡が立地する地域は、遺跡名のとおり、古代に設定された条里の痕跡をとどめる水田、あるいは畠として長い間継続して利用されている。ただし洪水などの自然災害が多く、耕作地を幾度となく土砂が覆った。今回の調査では、この土砂などの氾濫堆積物と、それを除去・攪拌して生成した耕作土層などの土壌化層をセットで捉えるよう努め、前者を「b層」、後者を「a層」とした。ただし氾濫堆積物が完全に除去・攪拌され、残存していない場合が多く、この場合はa層が連続することとなり、分層も難しくなる。層序は調査区西側に接する（その8）・（その9）調査の成果を参考に、大きく1～14層に分層したが、よく似たa層が連続する場合など、隣接調査区と完全に同様の分層が出来る訳ではなく、北半の5層と6層のように、二つの地層をまとめて掘削する場合もあった。また各層の中が細分される場合には、「4a-2層」のように枝番号を付けて表現した。

遺構面の呼称については、X層の上面を「第X面」とする調査が多いが、今回は現地調査の段階からX層除去後の面を「X層下面」と呼んでいたため、本書内でもそのままの表現を用い、検出した遺構についても、「X層下面検出遺構」としてまとめて扱っている。これは遺構の扉面を表現したのではなく、単にどの地層を掘削後に検出できた遺構なのかを表したものである。

#### 0層～3層

近世以降の氾濫堆積層や耕作土層である。1b層は現代盛土の機械掘削面に現れた厚い極粗～細粒砂層で、大きな災害があったことがうかがえる。上方粗粒化が著しく、下層部は粒子が非常に細かいシルトへと変化し、災害直前に掘られた深い溝の中にも堆積する。下部のシルトとの境が明瞭であったことから、上部の砂層を1b-1層、下部のシルト部分を1b-2層とした。もともと新しい時期の氾濫堆積層と判断し、1b層としたが、北半でこの砂層を切るさらに新しい時期の土坑が確認できたことから、0b層が存在していたことが明らかとなった。この土坑は、0b層を処分するために掘られた災害復旧用の土坑（調査では0b土坑と呼称）であるが、0b層自体や0b層復旧後に生成された耕作土、また1a層も、近年の造成により完全に削平されており、確認できなかった。

1b層に覆われた災害直前の耕作土層を2a層としたが、面的にはほとんど残っていない。細～極細粒砂を多く含む灰色のシルトで、災害直前に掘られた深い溝の底に堆積する。2b層は確認できなかった。

3層は、氾濫堆積層である3b層とそれを攪拌した3a層から成る。3b層は細礫・極粗粒砂～極細粒砂・シルトで、上方粗粒化していた。3a層は砂粒を含む灰色のシルトや粘土質シルトなどで、北半では上下2層に分層できる。

3a層からは、土師器皿・播鉢・羽釜、瓦器椀、瓦などの小片に混じって、磁器碗片や煙管の一部が出

土している。明らかに近世の地層であり、この3a層が僅かに残る程度まで機械掘削で除去した。

#### 4層

断面観察によって、3b層に切られる砂層の存在が認められたことから、3b層よりも一時期古い氾濫堆積層の広がりを認識することができ、これを4b層としたが、おそらく平面的には3b層と4b層とを分層することは困難と思われる。特に調査区南半分に分布している。細粒砂～シルトで、上方粗粒化しており、上下に分層が可能である。またラミナも明瞭であった。4a層は4b層を含めた下位層まで達するような深い攪拌によって生成した土壌層で、南半では島畠を形成し、島畠周囲から島畠上にも認められた。粗～中粒砂を非常に多く含む灰色シルト(4a-1層)、あるいは細～極細粒砂を多く含む灰色の粘土質シルトや灰オリーブ色シルト(4a-2層)などで、上下2層に分層できる箇所もある。層厚は、北半では0.2～0.25m程度であるが、南半では島畠の周囲の攪拌が深いため、約0.4mを測る箇所もある。下面には踏み込み痕跡が多く広がっている。

4a層からは、土師器皿・羽釜・播鉢、瓦器椀、瓦質土器火鉢、瓦など中世の遺物が出土しているが、僅かではあるが陶器碗・播鉢や磁器染付碗など、近世の遺物も確実に含まれていることから、17世紀頃の地層と考えられる。

#### 5・6層

5a層は、南半では島畠内の4b層直下に認められる程度で、その大半は4a層生成時の攪拌によって取り込まれ、残存しない。細～極細粒砂を多く含む暗灰黄～灰オリーブ、あるいは灰色のやや粘土質シルトやシルトである。この層から下部の10層までb層は認めらず、分層が難しい地層が連続する。

6a層は、極粗～極細粒砂が混じる暗灰黄色や灰色のシルト～砂質シルトで、やや粘土質の部分のみられる。砂粒の量や粒径の違いによって分層しているが、7a・8a層との区別がむずかしい。5a層と合わせても厚さは0.15m程度である。

北半では、5a層と6a層ともに粗～中粒砂が僅かに混じる粘性の強い灰色粘土質シルトであり、分層が困難であった。このため「5a・6a層」として一括して掘削した。下位の7a・8a層とも土色・土質ともによく似ており、分けることが難しかったが、5a・6a層側が若干細～極細粒砂が多かったことなどを手掛かりに、分層できる箇所は分層し、分層が困難な箇所については、5a層から8a層の層厚約0.2～0.3mを二分するようにほぼ層の midpoint で便宜的に分けた。

5a・6a層からは、土師器皿、瓦器椀、瓦質土器羽釜、中世須恵器甕、白磁碗などが出土している。5a層以下には国産磁器が含まれていないことから、中世以前の地層であると判断できる。6a層からは永楽9年(1411)初鑄の永楽通寶も出土しており、中世後半の15・16世紀頃の地層と考えられる。

#### 7・8層

南半では極粗～中粒砂が混じる灰オリーブや暗灰黄・灰色のシルト～やや粘土質シルトで、若干8a層に細～極細粒砂が混じる程度で、7a層と8a層はほとんど区別できない。7a・8a層ともに層厚0.1m程度で、南半のうちの東半分は念のため両層を分けて調査したが、南半のうちの西半部については、7a層と8a層とを一括して掘削した。

北半の7a層と8a層は、上記のとおり5a・6a層と酷似した粗～中粒砂が僅かに混じる粘性の強い灰色粘土質シルトである。5a・6a層との分層も難しかったが、7a層と8a層とを分けることが困難であったため、5a・6a層同様、「7a・8a層」として一括して掘削した。層厚については上記のとおりである。

5～8層については、それぞれの層が薄かったか、もしくは上位層の耕作によって下位層が完全に攪拌さ

れて上位層に取り込まれたなどが考えられる。

7a・8a層からは、土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿、瓦質土器羽釜・足釜、輸入磁器碗・皿などが出土している。8a層からは淳熙元年（1174）初鑄の淳熙元寶、8a層下面からは和鏡も出土しているが、瓦器椀には14世紀代のもので含まれており、中世中頃の13・14世紀頃の地層と考えられる。

#### 9層

9a層は暗灰黄・灰・灰オリーブ色などのシルトで、粒径は場所によって異なるものの、どの地点も砂粒が混じる。8a層との分層が難しい箇所も多く、砂粒の混じり具合や粒径の違いを手掛かりに分層した。8a層と10a層との中間的な土色・土質で、層厚は0.1m程度である。

9a層からは、土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿・壺、瓦質土器足釜、東播系須恵器片口鉢、輸入磁器碗・皿などのほか、下面の砂からは寛元元年（1038）初鑄の皇宋通寶も出土している。小片ではあるが、瓦器椀の中には14世紀代のものもみられることから、7・8層とはそれほど隔たらない時期の地層と考えられる。

#### 10層

氾濫堆積層を攪拌して生成した11a層を大きく攪拌して取り込んだ地層である。このためどの地点も砂粒を多く含んでいる。灰・暗灰黄・オリーブ黒・灰オリーブ色などの砂質シルトや、灰・灰黄色のシルトで、層厚は約0.15～0.2mを測る。この層の上面の標高は、調査区南端部で約11.8m、北端部で約11.6mと、北側に向かって緩やかに下がっている。

10a層から出土する遺物には、縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器も若干含まれるが、土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿、黒色土器椀、白磁碗・皿、東播系須恵器片口鉢、中世須恵器甕、瓦などの中世の遺物が主である。瓦器椀はどれも古手のものばかりであることから、中世前半の11・12世紀頃、下っても13世紀前半までの地層と考えられる。

#### 11層

上位10a層の耕作により攪拌され、北半ではほとんど残っていない。僅かに西端の坪境畦畔付近で、細～極細粒砂を非常に多く含む灰色シルトの11a層を確認できる程度である。南半でも調査区の西辺約4分の1の範囲のみの分布であり、東半では確認できない。南半の11a層は中～極細粒砂を非常に多く含む灰黄褐色の砂質シルトや、シルト混じりの粗～細粒砂で、層厚は約0.1mを測る。ただし、調査区南西隅では0.15m程度と若干厚くなり、シルト混じりの粗～細粒砂である11a-1層（上層）と、それよりも12a層を攪拌した際のシルトがより多く混じる11a-2層（下層）の2層に分かれる。それぞれの層厚は0.05～0.1m程度である。

11b層である粗～細粒砂は、調査区南端の坪境畦畔（22畦畔）頂部に薄く認められる程度で、広範囲への広がりはみられない。

11a層から出土する遺物には、古墳時代や古代の須恵器・土師器も若干含まれるが、瓦器椀・皿、土師器皿・羽釜、黒色土器椀、白磁碗、灰釉陶器皿、瓦などの中世の遺物を含んでいる。おそらく10層とはそれほど隔たらない11・12世紀頃の地層と考えられる。

#### 12層

12a層は粗～細粒砂が僅かに混じる灰色粘土である。南半では約0.2～0.25mの厚みがあるが、北端部では11a層の攪拌の影響で薄く、厚さ0.05～0.1m程度となる。ただし、11a層の攪拌が及んでいない坪境畦畔部分では、12a層が約0.2mの厚さで残存しており、本来の層厚をうかがうことができる。12b層は認められない。

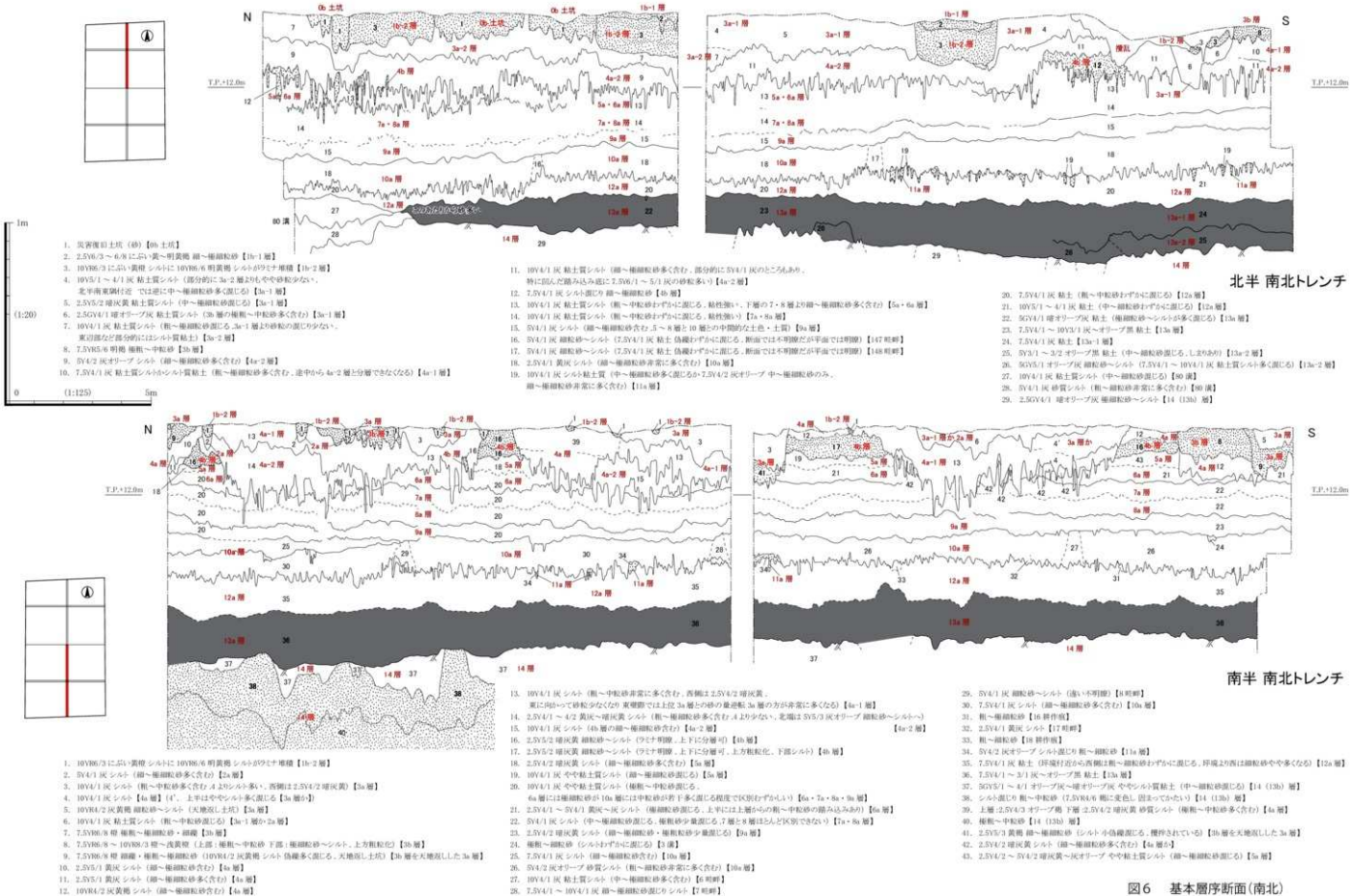
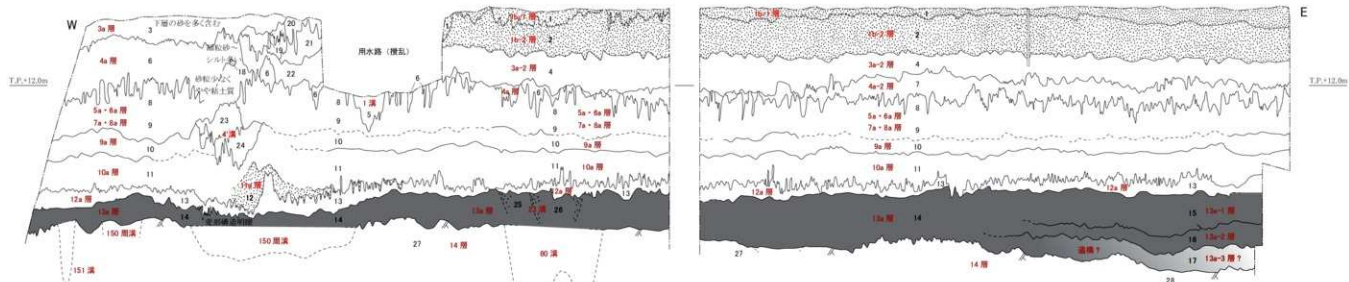


図6 基本層序断面(南北)

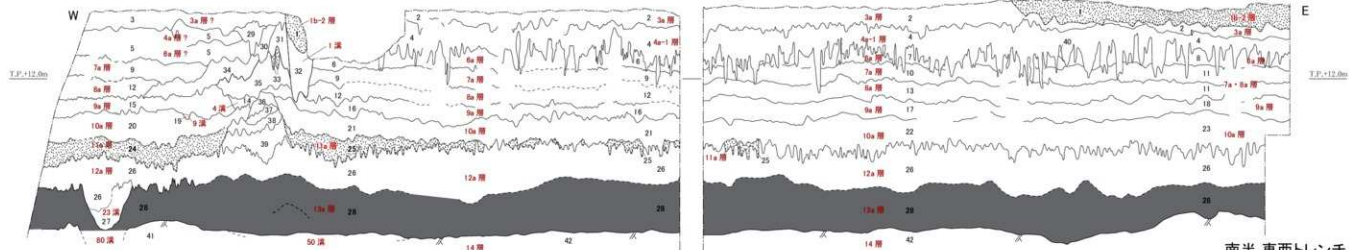




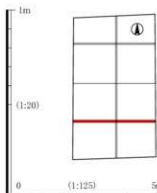
北半 東西トレンチ



1. 2.5V3/2-6 層に多い黄→暗黄褐色細砂(10-1層)
2. 10V3/2に多い黄褐色から10V3/3に多い黄褐色(10-2層)
3. 2.5V3/2埋戻灰 粗粒砂シット(下層の砂を多く含む)【10層】
4. 10V4/1 粘土質シット(粗→細粒砂少量混入。3a-1層が砂粒の混り少ない。底部部分の粗粒には少な量粘土)【10-2層】
5. 粗→細粒砂(2.5V4/1 粘土質シット多量含む)【10層】
6. 5V4/2 灰リニアシット(粗→細粒砂多量含む)【10層】
7. 10V4/1 粘土質シット(粗→細粒砂多量含む。部分的に5V4/1 泥の混りあり。粗→細粒砂(2.5V4/1)と1層の砂粒あり)【10-2層】
8. 10V4/1 粘土質シット(粗→中粒砂多量含む。粘性強い)【5a-6a層】
9. 10V4/1 粘土質シット(粗→中粒砂多量含む。粘性強い)【7a-8a層】
10. 5V4/1 泥シット(粗→細粒砂多量含む。5層と10層と中間の土色・土質)【5a層】
11. 2.5V4/1 泥シット(粗→細粒砂少量含む)【5a層】
12. 2.5V4/1 泥シット(粗→細粒砂少量含む)【11a層】
13. 10V3/1-4/1 灰粘土(中→細粒砂多量含む)【11a層】
14. 2.5V4/1-10V3/1 灰→オリーブ黒土【11a層】
15. 10V4/1 灰粘土(粗→中粒砂多量含む。13a-1層の方向は粘土層が広がっている)【13a-1層】
16. 2.5V4/1 灰粘土(粗→中粒砂多量含む)【13a-2層】
17. 2.5V3/2 オリーブ黒(粗→細粒砂多量含む)【13a-3層がやや混雑あり】
18. 5V4/2 埋戻灰→細粒砂(粗→中粒砂多量含む)
19. 粗→細粒砂
20. 粗→細粒砂(2.5V4/3 オリーブ黒シット多量含む)
21. 2.5V4/3 黄褐色シット(粗→細粒砂多量含む)
22. 5G4/1 埋りオリーブ黒シット(中→細粒砂多量含む)
23. 5V3/2 オリーブ黒シット(粗→中粒砂多量含む)
24. 5V3/2 オリーブ黒褐色シット(粗→細粒砂多量含む)【10層】
25. 5V4/1 粘土質シットと10V4/1 粘土質シット混合(粗→細粒砂多量含む)【10層】
26. 5V4/1 粘土質シット(粗→中粒砂多量含む)【10層】
27. 2.5V4/1 埋りオリーブ黒 細粒砂シット【14(13b)層】
28. 5G4/1-4/1 オリーブ黒→オリーブ黒や粘土質土(中→細粒砂混入)やシット混入の粗→中粒砂(2.5V4/4 層に色変じ。混入している)【14(13b)層】



南半 東西トレンチ



1. 10V3/3に多い黄褐色シットに10V3/6の明黄褐色シットがわずら混入【10-2層】
2. 10V4/1 泥シット(粗→中粒砂多量含む。5.2V3/4より多い。西側は2.5V4/2埋戻灰)【5a層】
3. 10V4/2 灰質シット(粗→細粒砂少量混入。粗→細粒砂非常に多く含む)【5a層(4a層か?)】
4. 10V4/1 泥シット(粗→中粒砂非常に多く含む。西側は2.5V4/2埋戻灰。粗→細粒砂少量含む)
5. 粗→細粒砂(2.5V4/1 灰質シット多量含む。上部は2.5V3/2埋戻灰)【5a層(4a層か?)】
6. 2.5V3/2-4/2 埋戻灰質シット→砂質土(粗→中粒砂含む)【5a層】
7. 2.5V4/2-5V4/1 埋戻灰→泥シット(粗→細粒砂が混入)
8. 埋戻灰→砂粒の少ない黄褐色の(粗→細粒砂少量含む。上部は2.5V3/2埋戻灰)【5a層】
9. 5V4/2 灰リニアシット(粗→細粒砂少量含む)【10層】
10. 2.5V4/2-5V4/1 埋戻灰→泥シット(6a-8a層粘土は区別できない)【10層】
11. 5V4/2 灰リニアシット(粗→細粒砂少量含む)【7a-8a層】
12. 粗→細粒砂(2.5V4/3 黄褐色シット多量含む)【10層】
13. 2.5V4/2-5V4/1 埋戻灰→泥シット(6a-7a層粘土は区別できない)【5a層】
14. シット混入の粗→細粒砂【10層】
15. 2.5V4/1-4/2 黄褐色埋戻灰シット(粗粒砂粒混入。粗→細粒砂含む)【5a層】
16. 2.5V4/2 埋戻灰シット(10層の砂層で粗→細粒砂が混入する層が混入していない)【5a層】
17. 5V4/2 埋りオリーブシット(10層の砂層で粗→細粒砂が混入)【5a層】
18. 2.5V4/1 泥シット(中→細粒砂少量含む)【5a層】
19. 2.5V4/1 泥質シット(粗→細粒砂少量含む)【5a層】
20. 2.5V4/2 埋戻灰質砂質土(粗→細粒砂少量含む)。上部は2.5V3/2埋戻灰の混入込みあり)【5a層】
21. 5V3/2 オリーブ黒砂質シット(中→細粒砂非常に多く含む)【5a層】
22. 5V4/1 泥質シット(粗→細粒砂非常に多く含む)【10層】
23. 5V4/1 泥質シット(中→細粒砂少量含む。西側は6a-7a層の粗粒が混入する)【10層】
24. 2.5V4/2 埋戻灰質砂質土(粗→細粒砂少量含む)。上部は2.5V3/2埋戻灰の混入込みあり)【5a層】
25. 5V4/2 埋りオリーブ黒細砂(少な量含む)【10層】
26. 2.5V4/1 灰粘土(沖積層付から埋戻灰→粗粒砂が混入している。沖積土の西は細粒砂や粘土)【11a層】
27. 10V3/1-3/3 オリーブ黒→埋戻灰シット(下層に粗→細粒砂少量混入)
28. 2.5V4/1-2/1 灰→オリーブ黒質土(粗→細粒砂少量含む)
29. 2.5V4/1 灰質シット(10V3/6 黄褐色 粗→細粒砂非常に多く含む)
30. 2.5V4/2 埋戻灰シット(粗→細粒砂少量含む)
31. 2.5V4/2 埋戻灰シット(粗→細粒砂含む)
32. 2.5V4/2 埋戻灰シット(粗粒砂混入。粗→細粒砂非常に多く含む)【10層】
33. 10V3/6 埋戻灰 粗粒→細粒砂
34. 2.5V4/2 埋戻灰シット(粗粒→細粒砂少量含む)
35. 埋戻灰→細粒砂(2.5V4/3 オリーブ黒シット多量含む)
36. 2.5V4/2 埋戻灰シット(粗→細粒砂少量含む。2a層に色変じ)
37. 中→細粒砂(2.5V4/2 埋戻灰シット多量含む。2a層に粘土混入)
38. シット混入の粗→細粒砂
39. 3aと2層に(西側)粗粒砂非常に多い
40. 5V3/1 オリーブ黒褐色シット(2.5V3/1 埋戻灰シット(2.5V4/4)【5a層か?】)
41. 5V4/1 埋りオリーブ黒 粗粒砂シット【14(13b)層】
42. 5G4/1-4/1 オリーブ黒→オリーブ黒や粘土質土(中→細粒砂混入)やシット混入の粗→中粒砂(2.5V4/4 層に色変じ。混入している)【14(13b)層】

図7 基本層序断面(東西)



12a層からは、縄文土器や弥生土器、古墳時代や古代の須恵器・土師器などとともに、灰釉陶器や土師器皿のほか、和同開珎が1点、隆平永寶が2点出土している。ただし瓦器は含まれておらず、土師器皿も器壁が薄いての字状口縁皿であることから、10世紀後半から11世紀前半頃の地層と考えられる。

### 13層

13a層は灰～オリーブ黒色の粘土である。13a層上面には、地震の影響と思われる変形構造が明瞭な箇所もあるが、不明瞭で12a層との分層も難しい箇所もある。調査区中央付近では、灰色粘土（13a-1層）と、中～細粒砂が混じるオリーブ黒色粘土（13a-2層）に細分でき、北半東端でも、粗～中粒砂が僅かに混じる灰色粘土を上下に分層が可能である。層厚は0.2～0.3m程度であるが、調査区北西隅に向かって徐々に薄くなる。調査区北半の西辺部や、調査区北西隅で検出した周溝墓の周辺には分布しておらず、12a層除去後の面で、すでに周溝墓の墳丘や154溝など、本来は13層下面で検出する遺構が確認できた。これは14層の標高が高いことが強く影響していると考えられる。

13a層出土の土器は、縄文土器が大半を占めるが、弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器なども含まれている。僅かではあるが、7世紀前半の須恵器杯蓋や土師器杯もみられる。また13a-2層からは、縄文土器や弥生時代中期の土器が出土している。

### 14層

13層下面で検出した遺構の基盤となる地層である。この地層よりも下層にある砂層（写真4）が帯状に盛り上がり現れている箇所や、鉄分が沈着してスコップが入らないほど硬化している箇所など、土質は場所によってさまざまである。調査は基本的にこの地層の上面で終了したが、上面の一部には攪拌や踏み込みなどにより乱れて遺物も混入している箇所が認められたことから、本来ならば13b層とすべき地層も含め、一括して14層として掘削した。

調査区を斜行する80溝より西側一帯は、暗オリーブ灰色の極細粒砂～シルトで、調査区北西隅の周溝墓を検出したあたりの標高がもっとも高く、11.4mを測る。この地層上で検出した遺構には、埋土に基盤層を掘削した際の偽礫が多く含まれていた。80溝を東に越えたあたりからは、徐々に中～細粒砂が混じるオリーブ灰～暗オリーブ灰色のややシルト質の粘土へと変化するが、ちょうど調査区の南西隅と北東隅とを結んだ対角線あたり（図42に示した太破線部）には、（その8）調査で確認された縄文時代晩期前葉とされた大きな流路の東肩部があたっており、その肩部に沿ってできた自然堤防状の盛り上がりがあり、14層の上面まで及んでいる。その影響でシルト混じりの粗～中粒砂となる箇所や、鉄分が沈着して掘削も困難なくらいまで硬化している箇所も多くみられた。この80溝東側の流路肩部にあたる付近の標高がもっとも低く、11.1mで、それより東側は再び緩やかに高くなっていき、調査区南東隅では11.3mとなる。

14層からも、縄文時代晩期前葉～中葉の土器が数点出土している。おそらく14層生成過程で混入したものと考えられる。



写真4 14層下層に広がる厚い砂層

## 第2節 遺構と遺物

前節で記したとおり、遺構については、X層除去後の面で検出した遺構を「X層下面検出遺構」のようにまとめて報告する。本来はX層の「上面検出遺構」なのか、「下面検出遺構」なのかなどを検討し、表現すべきであるが、本書では遺構の帰属面を表した表現にはなっていない。単にどの地層を掘削後に検出できたものなのかを表したものであり、遺構の帰属面の検討には注意を要する。

なお本書内では、b層の有無に関わらず、遺構面の呼称など、a層とb層を含めた意味で層序を表現する場合、また枝番を付けて細分した地層をあわせて表現する場合には、a・bや枝番を付けずに、単に「○層」としている。

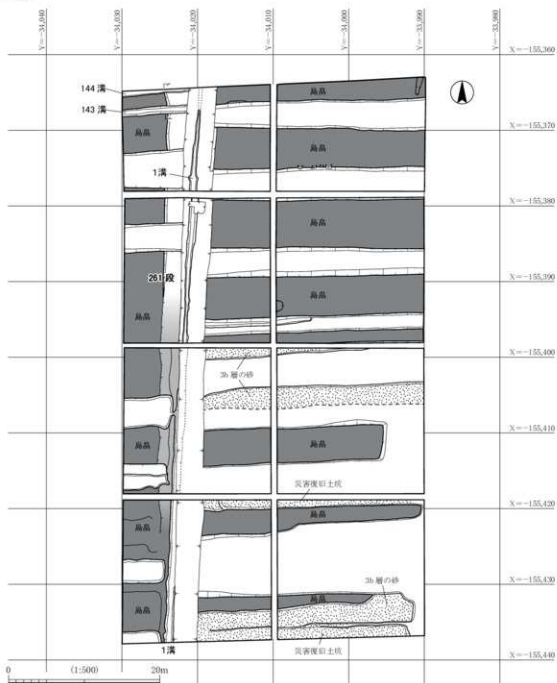


図8 3層下面検出遺構

### 3層下面検出遺構 (図8・9)

調査区の西寄りには、調査区内を南北に縦断する坪境が位置する(図2)。この坪境は古代条里制に伴って設定された地割を反映したものであり、調査開始直前までコンクリート製の水路が設けられていた。調査開始時に撤去したそのコンクリート水路の痕跡が、機械掘削後の面から3層下面にも深く及んでいたため、3層下面での坪境の詳細については不明な点が多いが、その水路による攪乱部分から溝1条と段、調査区北西隅で溝2条、また坪境の水路の東と西側では、島畠を形成した耕作地の痕跡を検出した。



写真5 調査地南側の水田に残る島畠

**1 溝** 調査区の西寄りに位置し、コンクリート水路の攪乱部分にはほぼ重なるが、南半では攪乱の西肩部に沿って、北半では攪乱内で検出した。現代の水路の方向とは微妙にずれており、国土座標軸から約3度東偏する。幅は約1m、深さは約0.2～0.3mで、溝の底は8層や一部9層にまで達する。埋土は、北半では灰色の粘土質シルトを多く含む粗～細粒砂、南半では細礫～細粒砂を非常に多く含む暗灰黄色シルトである。南半の一部では、上部に1b～2層の堆積が認められたことから、1b層をもたらした災害直前まで機能していたことがうかがえる。上限については、何度も掘り直しが行なわれ、古い溝を完全に掘り直すような場合には、遺物も新しくなり特に判断が難しいが、6層下面で、溝の肩部から細杭を検出していることから、溝の開削時期はその頃まで遡る可能性が考えられる。

1溝からは、土師器皿、瓦器椀、瓦質土器揃鉢、国産陶器(1～3)、瓦、瓦質土管、古墳時代の須恵器杯などの小片が出土している。国産陶器は、唐津焼などいずれも17世紀以降のものである。

**261 段** 1溝の西側に沿って検出した。北半では1溝の西側に3～4mほど隔てるが、南に向かって徐々に1溝に寄っていく。高低差は約0.15～0.2mで、粗～細粒砂や、砂粒を多く含むシルトなどが複雑に堆積する。確実に3層の下面で検出できる遺構であるが、1溝よりは一時期古く、1溝に切られる。段を掘り下げた段階では不明瞭で判然としなかったが、続く4層下面では、この段の裾に沿って溝、あるいは砂の堆積を検出しており、本来はこの段の裾が溝状に窪んでいたことがうかがえる。これについては4層下面検出の遺構として報告する。

**143・144 溝** 両溝は1溝より西側の調査区北西隅に位置する。東西方向の溝で、約1.6～1.9m隔てて並行する。北側の144溝は調査区の側溝と重なり北肩を欠くが、南側の143溝と埋土や深さが同じであり、同規模の溝であったと考えられる。143溝は幅約1m、深さ0.2mを測る。埋土は両溝ともにシルトの偽礫や極粗～極細粒砂を含む灰色粘土質シルトであり、水が流れていたような痕跡は認められない。1溝との関係は攪乱で削られており不明である。

**耕作域** 坪境の1溝を挟んで東と西側には幾筋もの島畠が並ぶ。いずれの島畠も東西方向に長いものである。これらは4b層(砂)をもたらした災害後に復旧・造成された耕作地の景観を示しているが、これよりも



図9 143・144 溝断面

新しい時期の攪拌・造成が広範囲に及ぶ箇所については、島島の一部も削平されて、その規模を若干小さくする。調査区の南半はそれが顕著で、北半に比べて島島が細く、短い。南半の1溝より東側の島島は、細いものでは幅1.5～2m程度、長さも短いものでは23～24mほどしかなく、調査区東端まで達するような長いものはない。これに比べ北半は、後の攪拌の影響もなく、島島が良好に遺存する。いずれも長さは28m以上で、坪境の攪乱から調査区東端まで達する。幅も5～6mと広い。島島外側の水田部分は島島に比べて幅が狭く、2m程度である。南半の1溝より西側についても、島島の高まりと外側の水田部分が交互に整然と並ぶが、この付近には3層が分布していない箇所もあり、水田部分の窪みには1b-2層のみが堆積している箇所もあった。北半の1溝より西側については、水田部分と思われる窪みに認められるが、東側のように整然と並んでおらず、面的にも不明瞭であった。また143溝の南側では、西側に接する（その8）

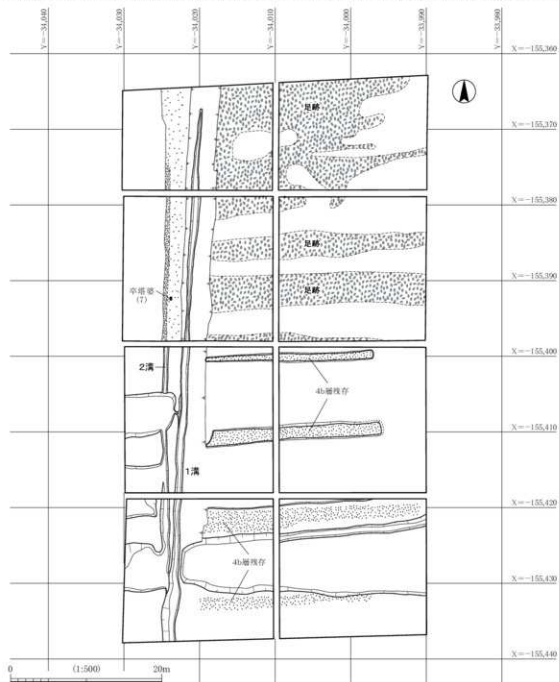


図10 4層下面検出遺構

調査の成果とは、島島の高まりと外側の水田部分との凹凸が逆転する箇所がみられた。遺構検出時に断面観察用の断ち割りトレンチを設定し、どちらが島島の高まりになるのかを検討したが、(その8) 調査側の島島とは連続するような凹凸にはならなかった。

このほか一時期新しい遺構として、いわゆる「災害復旧土坑」と呼ばれる土坑が南半に2基みられる。4a層を覆った氾濫堆積物(3b層)と、下部の土壌層とを天地返しした深い土坑である。島島と同じく東西方向に細長く、南側の土坑で、長さ28m以上、幅は1.4m以上を測る。深さは0.3m以上あり、その底は4a層、一部は5a層にまで達する。土坑の下半は、3b層を寄せ集めたシルト偽礫が多く混じる細礫・極粗砂～極細粒砂で埋められている。

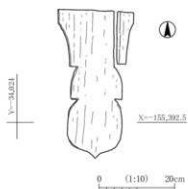


図 11 卒塔婆出土状況(1)

#### 4a層出土遺物(図12)

土師器皿・羽釜(6)・搥鉢、瓦器椀、瓦質土器火鉢、瓦などの中世の遺物に混じて、古墳時代や古代の須恵器杯・器台の小片も出土しているが、陶器碗(5)や搥鉢、磁器染付碗など近世の土器も確実に含んでいる。

#### 4層下面検出遺構(図10～12)

4a層の耕作に伴う攪拌が広範囲に、しかも深くまで及んでいるため、下の5層が残存している箇所は非常に少ない。上層島島の芯部分に4b層が僅かに残っており、その下面で5a層が検出できる程度である。この4b層が残存していた箇所が一見島島のようにみえるが、実際には4a層の攪拌が及んでいないだけであり、遺構ではない。北半でも4a層の島島を検出した箇所の下部で、人や動物の踏み込み痕跡を多数検出したが、顕著な遺構は検出できなかった。西寄りの坪境では、1溝とその西側で溝1条を検出した。

1溝については、前述のように後の時期に深くまで掘られていることから、この面でも上面の状況と変化なく、同じ位置で検出できる。ちなみに北半では、1溝を検出した攪乱内には3～4層はなく、当初から4層下面での検出であった。

2溝 1溝の西側に位置する。1溝とは広い箇所です。1.8m隔てるが、南に向かって徐々にその間隔が狭くな



図 12 4a層及び1・2溝出土遺物

り、調査区南端では1溝に合流する。幅は約0.6mで、深さは0.05m程度で非常に浅い。3層下面検出の261段の裾と重なることから、本来は段に伴っていた遺構で、またその規模から、溝というよりは段裾の浅い窪みであったと考えられる。なお、北半では溝としては認識できておらず、砂の広がりとして検出している。ただしその砂の分布状況を写真撮影したところ、西肩部の砂が帯状にのびていることが確認できた（写真図版1-3）。不明瞭ではあるが、おそらく南半から続く僅かな窪みがあったと考えられる。なお、後述する8層下面検出の4溝の影響が6層下面にも及んでいるが、この窪みはそれとは若干ずれており、下層の影響は受けていないと考えている。

2溝からは、土師器皿（4）が僅かに出土している。17世紀以降のものか。また北半で検出した溝状にのびる砂層の東肩部から、木製卒塔婆（7）が1点出土している（図11）。水輪以下を欠くが、最大幅

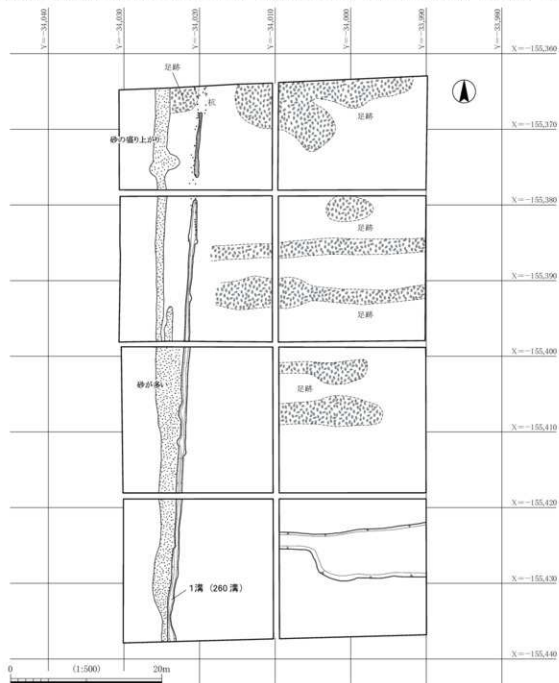


図13 6層下面検出遺構

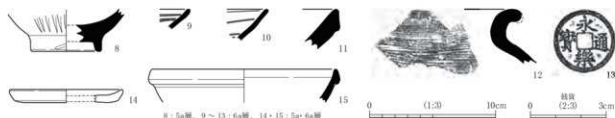


図14 5a・6a層出土遺物

20.2cmを測る大型品である。書かれていた文字は、墨が完全に流れており判読できないが、墨書があった部分が極僅かに盛り上がり、斜め方向から光を当てると、その凹凸に陰影ができて浮かび上がり、辛うじてその痕跡を認識することができた。ただし裏面には梵字の「𑖀」が辛うじて読み取れるが、表面はおそらく梵字が書かれていたと思われる程度で、判読はできなかった。

#### 5a・6a層出土遺物（図14）

南半の5a層からは、土師器皿、瓦器椀、青磁碗（8）の小片が、6a層からは、土師器皿、瓦器椀（9・10）、瓦質土器羽釜・甕（12）、東播系須恵器片口鉢（11）などの小片のほか、瓦や銭貨（13）、古墳時代の須恵器杯・甕片も出土している。

9・10は14世紀代の和泉型。13は永楽9年（1411）初鑄の永楽通寶である。北半の5a・6a層からは土師器皿（14）、瓦器椀、瓦質土器羽釜、白磁碗（15）の小片や砥石が出土している。この5a層以下には国産磁器が含まれていない。

#### 5層下面検出遺構

遺構は検出できなかった。調査区南半のうちの東半部では、上面で検出した鳥島外側の水田部分の攪拌がこの面にも及んでおり、鳥島状の僅かな凹凸のみみられる程度である。西半部では、上面で検出した2溝の底部が僅かに残っているが、両者ともこの面に伴う遺構ではない。

なお、北半では6層との分層が困難であったため、5層下面での遺構検出は行っていない。

#### 6層下面検出遺構（図13）

坪境で溝1条のほか、砂や足跡の広がりを検出した。

**1溝（260溝）** この面では260溝と新たな遺構番号を振ったが、上層まで続く坪境の1溝のことである。前述のように後の時期に深くまで掘られていることから、この面でも同じ位置で検出できる。なお北端部では、溝の両肩部に打ち込まれた木杭を検出した。この杭はこれより上層では検出できていない。直径5cm程度の細杭で、北端から約20mの範囲まで確認できる。

この1溝の西側で、帯状にのびる砂の盛り上がりを検出した。これは8層下面に位置する溝（4溝）の影響によるものであり、この面に伴う遺構ではない。

また1溝より東側では、数箇所足跡の広がりを検出している。その分布範囲は、4層下面で足跡を検出した箇所とほぼ重なることから、4層下面の足跡が深くまで達しており、この面にも残っていたと考えられる。畦畔痕跡など耕作に関わる遺構は検出できなかった。

#### 7層下面検出遺構（図15・16）

調査区南端の4分の1の範囲のみ、面的に広げて遺構検出を行なった。残る4分の3の範囲は、8層との分層が困難であったため、この面での遺構検出は行っていない。

下層に位置する溝（4溝）の影響で、その上部は砂が盛り上がり、この面でも6層下面同様にその砂が帯状に検出できる。4溝よりもやや広い幅で、極粗～中粒砂が非常に多く混じるオリブ褐色砂質シル

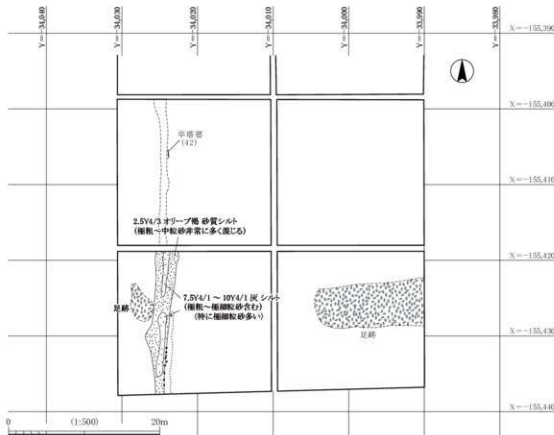


図 15 7層下面検出遺構



図 16 卒塔婆出土状況 (2)

トが広がり、4溝の上部がやや変色し、極粗～極細粒砂を含む灰色シルトとなっている。

南東隅の一部には、この面まで4層の攪拌が及んでおり、その攪拌下面の足跡が検出できるが、遺構は検出できなかった。

南半北西部の7・8層掘削中に、木製卒塔婆が出土した。横位の状態で、下層4溝の東肩部の砂層中に埋まっていた。溝の肩部に立てられていたようなものではなく、おそらく4溝を流れてきたものと思われる。川渡えをした際に、溝に引っかかっていた卒塔婆を脇に撤去・放置したものではないだろうか。

#### 7a・8a層出土遺物 (図 17)

南半の7a層からは土師器皿(16)・羽釜、瓦器椀(17・18)、瓦質土器羽釜などの小片に混じて、古墳時代の須恵器杯片も出土している。17・18はともに和泉型で、17は14世紀前半、18は13世紀後半の所産である。

南半の8a層からは、土師器皿(19～21)・羽釜、瓦器椀(23)・皿(22)、瓦質土器足釜(25)、青磁皿、青白磁合子(24)、瓦などの小片に混じて、銭貨(40)や砥石(41)、古墳時代の須恵器杯や弥生土器甕も出土している。23のように12世紀代のももあるが、20のような15世紀前半のものも含まれている。24は削り出し高台で、内面のみ施軸とする。釉は明緑灰色で、器壁が薄いことから合子と判断した。40は背月星の淳熙元寶。背文から淳熙元年(1174)から淳熙6年(1179)までの鑄銭であることがわかる。



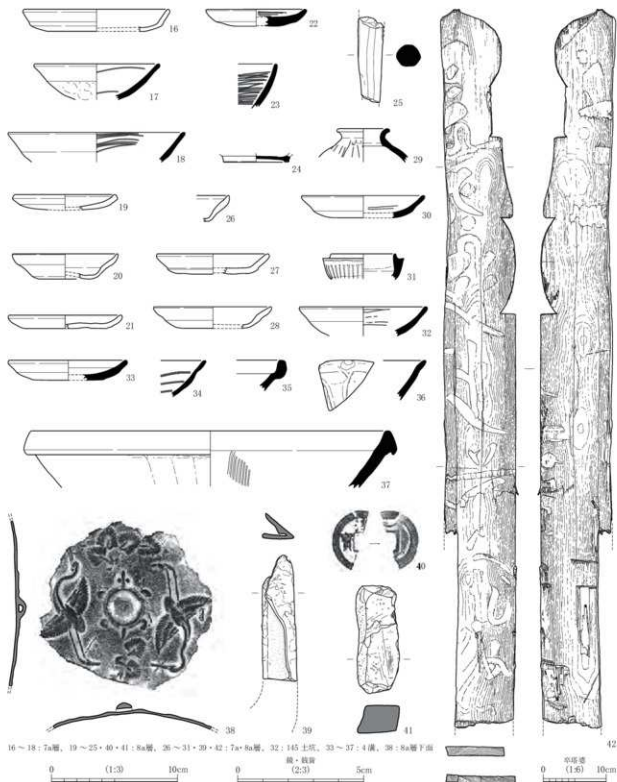


図17 7a・8a層及び4溝・145土坑出土遺物

南半の7a・8a層一括掘削中に、8a層下面検出の4溝の脇から卒塔婆(42)が出土している。

北半の7a・8a層からは、土師器皿(26~28)、瓦器椀・皿(30)・小壺(29)、青白磁合子(31)、瓦などの小片が出土している。また鉄製の鏡先と、8a層下面からは和鏡(38)も出土している。26・28や瓦器椀は14世紀代のものである。29は外面ヨコナデの後、間隔をあげた縦位の細いヘラミガキを施す。12~13世紀頃のものか。38は「松喰鶴鏡」と呼ばれる平安時代後期から鎌倉時代に流行した意匠を表

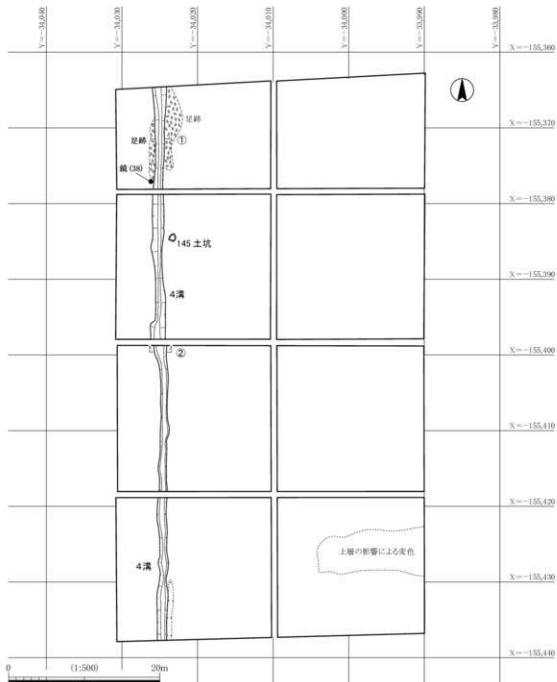


図 18 8層下面検出遺構

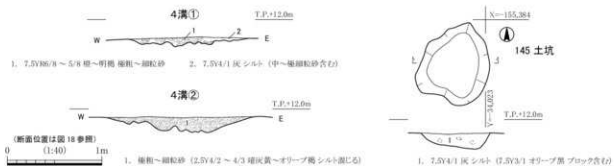


図 19 4溝・145土坑断面



図 20 鏡出土状況

した和鏡である。外縁部を欠損するが、欠損形状や文様構成から円形鏡と考えられる。鏡胎は約 1mm と薄い。亀形鈕で、その鈕を中心に 2羽の鶴が左旋回し、空間には松葉を散らす。鶴の 1羽は外向き、もう 1羽は首をくねらせて内向きとし、2羽ともに「×」状の折枝をくわえる。12世紀後半頃の製作と考えられる。39は厳密には鎌先か鋤先かの判別はできない。耳部先端の破片で、最大幅 2.65cm を測る。風呂装着部の V字のえぐりは約 39度である。西側に接する（その 8）調査でも出土している。42は残存長 114cm、厚さ 1.5cm で、片側の半分弱を欠損するが、幅は 19cm に復元できる。一般的な卒塔婆に比べ長く、大型である。7と同じく、書かれていた文字は、墨が完全に流れており判読できないが、墨書があった部分が僅かに盛り上がり、辛うじてその痕跡を認識することができた。おそらく表面には五大種子などが書かれていると思われるが、卒塔婆の全体が残っておらず、文字の痕跡も不明瞭なため、何が書かれていたのか正確には判読することができなかった。裏には墨書はない。小堂などに貼り付けられていたものである可能性も考えられるが、釘穴はない。

#### 8層下面検出遺構（図 17～20）

西半部で、溝 1 状と土坑 1 基を検出した。東半部で遺構は検出できなかったが、南東隅には、まだこの面でも 4 層の影響による変色がみられる。

**4 溝** 調査区の西寄りに位置する。坪境に設けられた溝である。この後に坪境となる前記 1 溝とは完全に位置が西側にずれていることから、この面を境に坪境が移動していたことがうかがえる。ほぼ国土座標軸にのる南北方向の溝で、1 溝より西側の Y=-34.025 のライン上に位置する。幅は狭い箇所で約 1m、広い箇所では約 2m で、深さは約 0.1～0.15m を測る。埋土はシルト混じりの極粗～細粒砂である。北端部では、溝の両脇で足跡を多数検出している。

4 溝からは、瓦器椀 (34)・皿 (33)、瓦質土器播鉢 (37)・羽釜、東播系須恵器片口鉢 (35)、青磁碗 (36)、瓦などが出土している。35 は 14 世紀、37 は 15 世紀前半の所産である。

**145 土坑** 調査区北半の、4 溝の東肩部に位置する。平面形は長径 0.86m、短径 0.72m の不整形な土坑で、深さは 0.16m を測る。埋土はオリブ黒色の砂質シルト偽礫を含む灰色シルトである。

瓦器椀片 (32) が 3 点出土している。いずれも 14 世紀前半のものである。

#### 9a 層出土遺物（図 21）

9a 層、及び 9a 層下面からは、土師器皿 (43～50)・羽釜 (67)・播鉢 (51)、瓦器椀 (54～59)・皿、東播系須恵器片口鉢 (52・53)、瓦質土器足釜 (60・68)、輸入磁器碗 (61～65)・皿 (66)、瓦などとともに、弥生土器、古墳時代や古代の須恵器などの小片も出土している。このほか土錘 (69) や、釘 (72～74)・鎌 (75)・雁股鍬 (71) などの鉄製品、砥石 (76・77)、容器底板 (78)、サヌカイト製の剥片、また 9 層下面の砂からは銭貨 (70) が出土している。

土師器皿には 49・50 のような 12 世紀代のものから、46 のような 14 世紀代のものも含まれている。また瓦器椀も同様に、59 のように 11 世紀代の古いものもある一方、小片ではあるが 56・58 のように 14 世

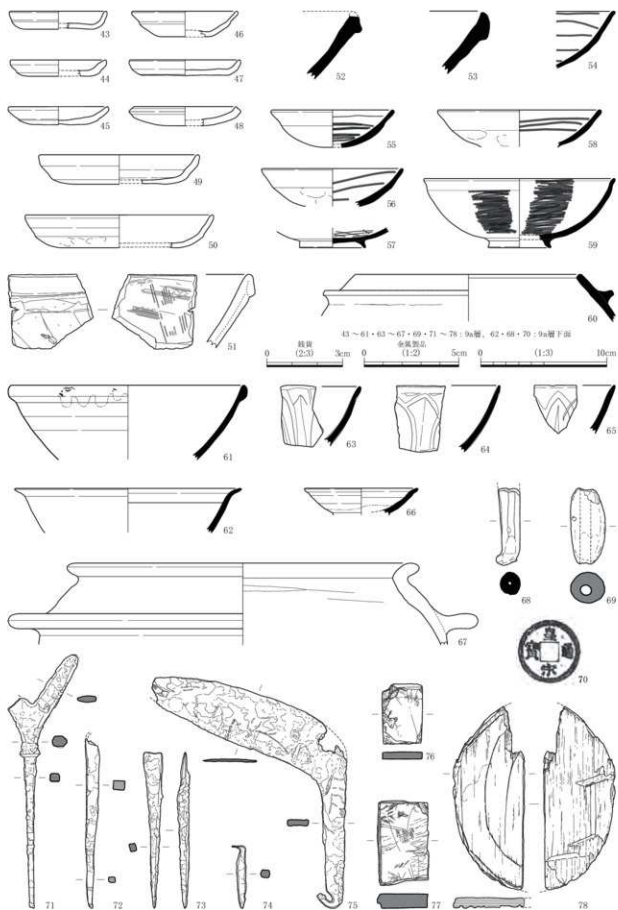


图 21 9a 層出土遺物

紀代のものもみられる。70は寛元元年(1038)初铸の皇宋通寶。73は頭部を曲げる前の釘と考えられる。78は片面に円を描いていたと思われる線刻がある。側板のアタリを示したものか。

### 9層下面検出遺構(図22・23)

これより上層では、坪境に設けられた溝以外、耕作地を区画する畦畔などの遺構は確認できなかったが、この面から下層では明瞭な畦畔の痕跡が検出できる。この面では溝に代わって坪境に畦畔1条と、その東側で6条、西側で2条の畦畔が並ぶ。このほか溝も4条検出している。

**22 畦畔** 坪境に設けられた畦畔である。8層下面検出の4溝よりも僅かに東側にずれた位置で検出した。古い畦畔の位置を踏襲して築かれたもので、11層下面までほぼ同じ位置にその痕跡が検出できる。北半では不明瞭で、一部分のみの検出であったが、その代わり、畦畔の西側に沿って、砂を多く含む帯状の変色

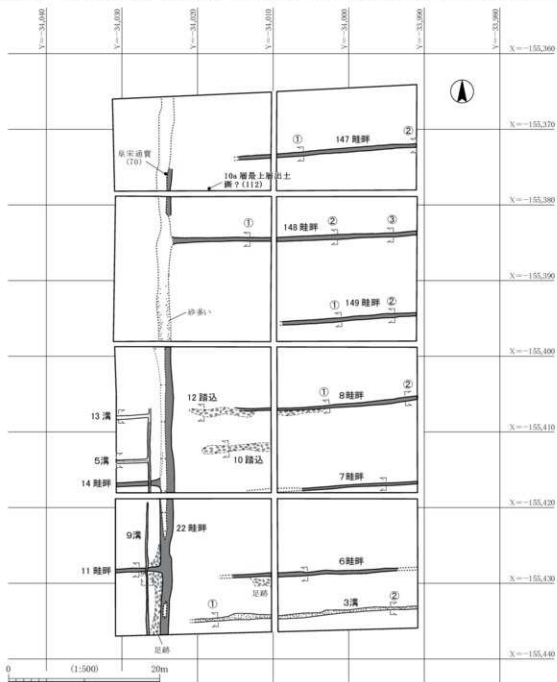


図22 9層下面検出遺構

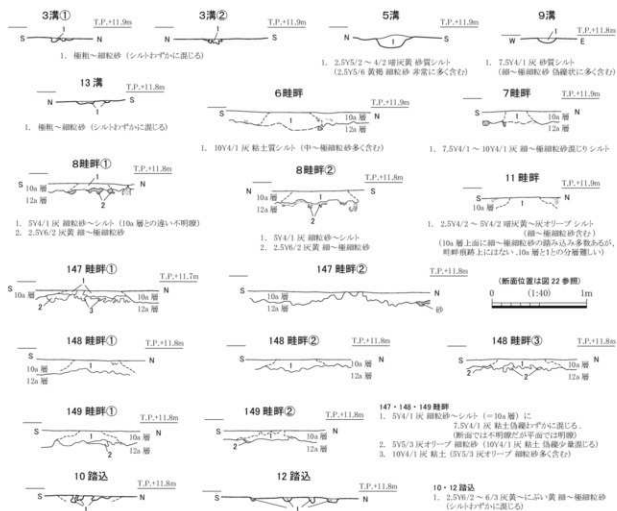


図 23 9層下面検出畦畔及び溝・踏込断面

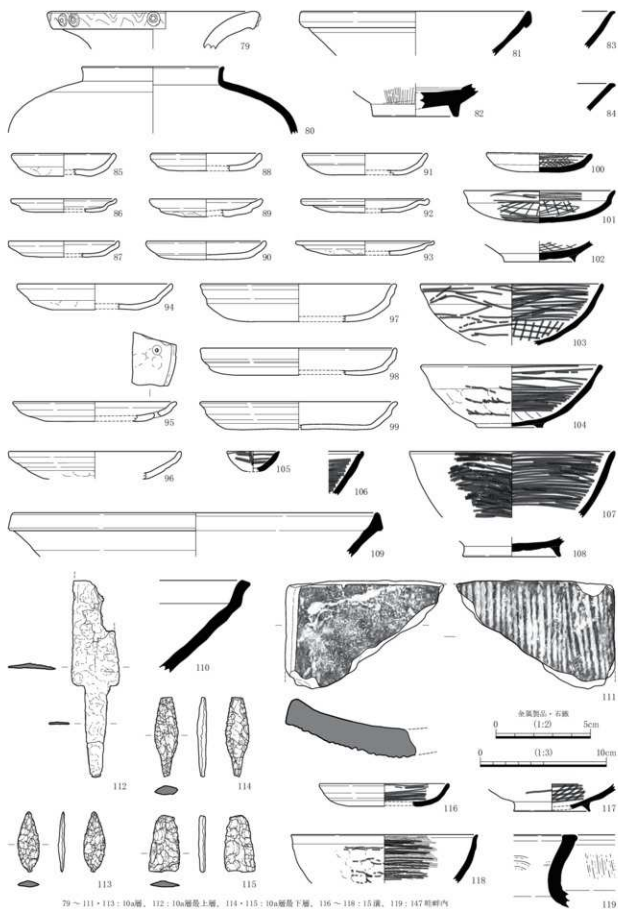
部を検出した。北半中央部の東西トレンチ断面をみる限り、これは上面検出の4溝の影響と思われるが、この面にも畦畔の西脇に沿って浅い溝があった可能性も考えられる。

**6・7・8・147・148・149畦畔** 坪境の22畦畔より東側に整然と並ぶ東西方向の畦畔である。南から6・7・8・149・148・147畦畔とした。淡い青緑色の変色帯が直線的のびていることが明瞭に検出できた。それぞれの間隔は、6畦畔と7畦畔が11.3m、7畦畔と8畦畔が10.7～11.0m、8畦畔と149畦畔が11.2～11.4m、149畦畔と148畦畔が10.7～11.2m、148畦畔と147畦畔が10.9～11.6mで、いずれも3～4度西偏する。9層下面での畦畔の検出幅は、0.2～0.6m程度で、10層下面からの盛り上がりは、約0.1～0.15mを測る。148畦畔のみ西側の22畦畔までのびるが、ほかは22畦畔までは達しておらず、途中で不明瞭となる。また6・7・8畦畔の周囲では、帯状に広がる足跡(10・12踏込)を検出している。

南端の6畦畔以外の畦畔については、続く10層下面検出の畦畔痕跡とほぼ重なるが、6畦畔のみ若干位置がずれる。これは10a層を耕土とする耕作の途中に、6畦畔の位置が移動したためと考えている。

9層下面の調査終了後、147畦畔を掘削中に須恵器甕の口縁片(119)が1点出土した。短頸の水平口縁で、8世紀後半から9世紀前半頃の所産と思われる。

**11・14畦畔** 坪境の22畦畔より西側に並ぶ東西方向の畦畔痕跡である。南から11畦畔、14畦畔とした。11畦畔は東側の6畦畔の、14畦畔は7畦畔のほぼ延長上に位置するが、東側の畦畔痕跡よりそれぞれ



79 ~ 111・113 ~ 115: 10a層, 112: 10a層最上層, 114・115: 10a層最下層, 116 ~ 118: 15溪, 119: 147相野内

图 24 10a層出土遺物

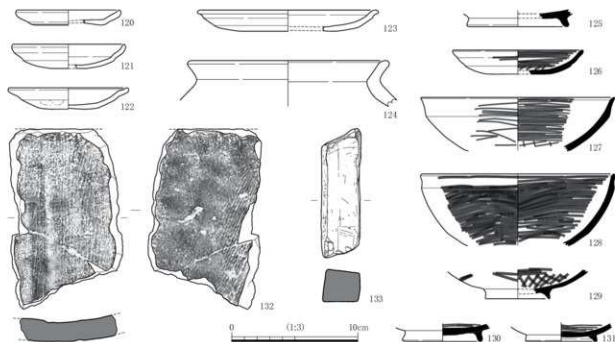


図 25 11a層出土遺物

れ若干北側にずれる。11 畦畔については、22 畦畔の西側に広がる足跡が約 0.3 m の幅で途切れており、平面的には容易に検出することができたが、断面では踏み込みの有無以外、周囲の耕土層（10a 層）とは区別が難しかった。11 畦畔・14 畦畔の間隔は 11.5 m で、両者ともに重複する 9 溝に切られる。

9 層下面で検出したこれら一連の畦畔については、これより上の 8 層下面でその痕跡を確認できないことから、9 層の耕作に伴う疑似畦畔 B とは考え難い。また断ち割り断面では、畦畔の盛り上げりに 10 層がすり付いていることが観察できることから、10 層の耕作に伴う畦畔であったと考えている。

**3 溝** 6 畦畔南側の、調査区南端に位置する。6 畦畔に平行する東西方向の溝で、幅は 0.3 m 程度である。6 畦畔は明瞭に土の変色が認められたが、3 溝はブロック状の砂（シルトが僅かに混じる極粗～細粒砂）が点々と一筋にのびるものであった。溝というよりは、帯状にのびる踏み込み痕跡とすべき遺構である。断ち割り断面でも溝状の掘り込みは検出できなかった。

**5・9・13 溝** 調査区南半の、22 畦畔より西側に位置する。11・14 畦畔を切る細い溝で、10 層の上面に帰属する遺構と考えられる。9 溝は国土座標軸にのる南北方向の溝で、長さは調査区南端から約 30 m を測る。幅は約 0.2 m、深さは 0.05 m 程度で非常に浅い。埋土は細～極細粒砂を多く含む灰色の砂質シルトである。5・13 溝は 9 溝から直角に西に折れ曲がる東西方向の溝である。5 溝は幅約 0.3～0.4 m、深さ約 0.1 m で、埋土は細粒砂を非常に多く含む暗灰黄色の砂質シルトである。13 溝については、5 溝と同規模であるが、既に溝底が現れており、変色した溝の痕跡のみの検出であった。

図化できなかったが、5・9 溝からは、土師器皿や瓦器椀の小片が僅かに出土している。5 溝出土の瓦器椀は 14 世紀代のものである。

#### 10a・11a 層出土遺物（図 24・25）

10a 層には、縄文土器や弥生土器（79）、古墳時代や古代の土師器・須恵器（80）も若干含まれるが、土師器皿（85～99）・羽釜、黒色土器椀（105～108）、瓦器椀（102～104）・皿（100・101）、東播系須恵器片口鉢（109・110）、中世須恵器甕、白磁碗（81～84）・皿、瓦（111）、両刃の鉄製品（112）などの中世の遺物が主である。どれも 12 世紀に収まるものである。また敲石（142）のほか、サヌ



カイト製の石鐮（113～115）や、剝片・石核も出土している。

79は弥生時代後期後半の広口壺。13層下面検出の周溝墓に伴っていた遺物か。土師器皿は、時期差はみられるが、いずれも12世紀までに収まるものである。中には92・93のような11世紀代のの字状口縁皿も含まれている。瓦器椀・皿はいずれも12世紀前半に収まる和泉型である。黒色土器はいずれも11世紀代のB類であるが、107は内外面ともに黒化処理が顕著でない。110は11世紀代の所産。112は両刃の刃物で、切先を欠く。武器か工具かも不明。刃部最大幅は2.5cmで、中心が僅かに盛り上がるが、明瞭な鋸はない。厚さ0.25cmと薄い。茎は長さ4.9cmで、区をつくる。裏面は平坦で、刃部のウラスキはない。鋸にしては薄く、湾曲もない。石鐮はいずれも弥生時代のものである。113は凸基式で、114が有茎式。115は基部と刃部の先端を欠損する。142は12a層出土の敲石と接合した。10a層生成時に12a層までを大きく攪拌したために割れて混入したと考えられる。

11a層にも、杯・蓋・高杯・甕など古墳時代や古代の須恵器・土師器が若干含まれるが、土師器皿（120～123）・羽釜・甕（124）、黒色土器椀（125）、瓦器椀（127～131）・皿（126）、灰釉陶器皿、白磁碗、瓦（132）、砥石（133）など、10a層とほぼ同時期の遺物が出土している。

土師器皿も10a層出土のものと同時期で、11世紀代のものから12世紀代のものである。瓦器椀・皿はいずれも和泉型で、やや古手の11世紀後半から12世紀前半のものが主である。このほか、サヌカイト製の剝片・楔形石器が1点ずつ出土している。

#### 10・11層下面検出遺構（図26・27）

9層下面で検出した畦畔とほぼ同じ位置から畦畔を検出した。坪境に1条と、その東側で6条、西側で3条の畦畔が整然と並ぶ。

なお下層の11層は、10a層より大きく攪拌されており、調査区南半の東側約4分の3の範囲にはほとんど残っていない。したがって、その範囲では10a層の下面が直ちに12a層となっている。北半では南半よりもさらに11層の残りが悪く、坪境で検出した22畦畔にすり付く程度しか残っていない。遺構にも顕著な変化が認められなかったため、北半では11層まで掘削し、10・11層下面検出遺構としてまとめた。

**22畦畔** 上層まで踏襲される坪境の畦畔である。9層下面で検出した畦畔の下部に位置する。北半では畦畔の盛り上がりに向かってすり付く11層までも除去しているため、畦畔に凹凸ができ、盛り上がりが明瞭となったが、南半では周囲に11層が残るため、畦畔の頂部が帯状に検出できる程度である。ただし、こちらにも砂が多い11a層の上面に12a層の粘土が帯状に現れた状態であり、非常に明瞭であった（写真図版5）。南半では畦畔の西側に沿って15溝とした溝状の浅い窪みが認められる。北半でも、北端部で同様の窪みが検出できるが、その南側は僅かに窪むものの、遺構として認識できるようなものではなかった。北半部では、畦畔の高さは0.1m程度で、裾部の幅は約0.9～1.2mを測る。

15溝からは、土師器皿、瓦器椀（117・118）・皿（116）、白磁、古墳時代の須恵器などの小片が出土している。116～118はいずれも12世紀前半の所産。118は内面ハケ調整の後、密なヘラミガキを施す。

**17・19・21・147・148・149畦畔** 坪境の22畦畔より東側に整然と並ぶ東西方向の畦畔で、その位置は、17畦畔以外、9層下面検出の畦畔と重なる。南半については遺構番号を新たに南から17・21・19畦畔としたが、北半については9層下面検出の畦畔とまったく同じ位置であったことから、番号を変えずに、南から149・148・147畦畔のままとした。それぞれの間隔は、17畦畔と21畦畔が10.0m、21畦畔と19畦畔が11.2m、19畦畔と149畦畔が11.3m、149畦畔と148畦畔が11.0m、148畦畔と147畦畔が11.0mで、いずれの畦畔も3～4度西偏する。畦畔の規模は、南半では幅約0.5～0.8mで、盛り

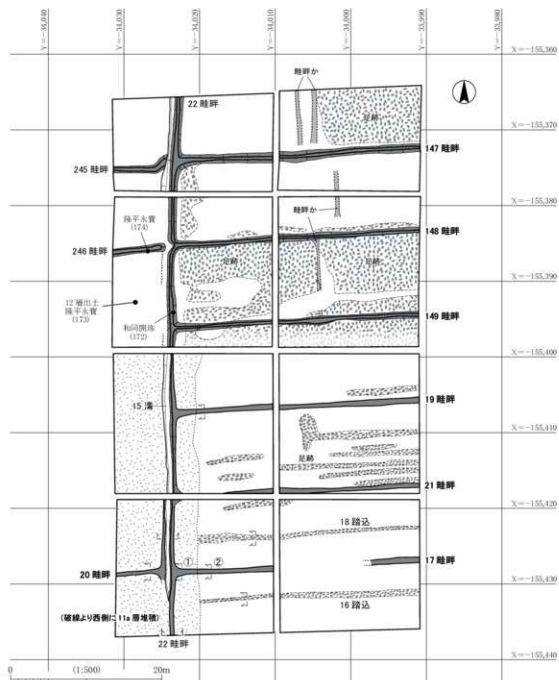


図 26 10・11層下面検出遺構

上がりはほとんど認められない。帯状にのびる灰色の粘土を畦畔として認識できる程度である。北半の畦畔は、幅 0.6 ~ 1 m 程度で、10 層下面からの盛り上がりは、147 畦畔や 148 畦畔のように 0.05 ~ 0.1 m ほど認められる箇所もあるが、南半と同じ盛り上がりほとんど認められず、灰色の変色帯として認識する箇所が多い。ただし、畦畔の北側が若干下がる傾向が認められた。

南端の 17 畦畔以外は調査区東壁際から一直線にのびて、西側の 22 畦畔に接続するが、17 畦畔のみ、途中が不明瞭で、検出できない箇所があった。またこの畦畔のみ、9 層下面検出の畦畔 (6 畦畔) から北側に 1 m ほど位置がずれていた。これについては、もともと 17 畦畔の位置に設定されていた畦畔が、10a 層の耕作の途中で、若干南側に移動し、その移動後の畦畔が 9 層下面で検出できたのではないかと考えている。その場合、10a 層が 2 層に分層できるはずであるが、現地での分層は不明瞭できていない。



図 27 10層下面検出畦畔・踏込断面

17 畦畔も含めたこれらの畦畔は、続く 11 層下面で検出する 22 畦畔際の畦畔とずれることなくつながっている。これは 11a 層の耕作に伴う畦畔を踏襲して、まったく同じ位置に 10a 層の耕作に伴う畦畔が造られていたことを示している。したがって、これら 10a 層下面で検出した畦畔については、11a 層の耕作に伴う疑似畦畔であった可能性も否定できないが、調査区東半部については、前記のとおり 10a 層によって 11 層が完全に攪拌されており、10a 層下面が直ちに 12a 層となっている。畦畔はその面で検出であることから、図 23 の 147 畦畔②の断面が端的に示しているように、これらの畦畔は 10a 層の耕作に伴う疑似畦畔 B であった蓋然性が高いと考えている。

南半では、畦畔と畦畔との間で、畦畔の方向と同じ東西方向にのびる幅 0.5 ～ 1 m 程度の足跡（16・18 踏込）を幾筋も検出しているが、北半では畦畔の上にも及ぶような面的に広がる足跡を検出している。

また 149 畦畔から北側の、上記足跡がない箇所から、南北方向にのびる変色帯を 4 条検出している。幅は 0.3 ～ 0.5 m ほどで、周囲には完全に掘り切れていない 10a 層が薄く残っており、この帯状の部分のみ 12a 層が現れている状態であった。ほかの畦畔の検出状況によく似ており、東西方向の畦畔によって区画された水田を、小区画に細分する南北方向の畦畔であった可能性が考えられる。

**20・245・246 畦畔** 坪境の 22 畦畔より西側に位置する東西方向の畦畔である。南半に 1 条、北半に 2 条あり、南半の 1 条を 20 畦畔、北半の 2 条のうち南側を 246 畦畔、北側を 245 畦畔とした。20 畦畔は東側の 17 畦畔の、246 畦畔は 148 畦畔の、245 畦畔は 147 畦畔のほぼ延長上に位置するが、22 畦畔の西側に沿って、15 溝とした浅い窪みがあることから、東側の畦畔のように 22 畦畔とは接続せず、途切れる。なお、245 畦畔の東端部はくの字に屈曲し、246 畦畔の東端部では、坪境の 22 畦畔が窪むように僅かに湾曲する。20 畦畔から 246 畦畔の間隔は 42.5 m で、本来はこの間に東側と同様に 3 条の畦畔があったと思われるが、不明瞭でその痕跡は検出できなかった。246 畦畔と 245 畦畔との間隔は 10.5 ～ 10.8 m で、裾部の幅は約 1 m を測る。盛り上がりはそれほど顕著でなく、僅かに盛り上がる程度である。20 畦畔については、幅 0.5 m 程度で、盛り上がりは認められない。11a-1 層の耕作に伴う畦畔であったとも考えられるが、9 層下面検出の 11 畦畔と同じ位置であることから、10a 層耕作に伴う（11 畦畔の）疑似畦畔 B であった可能性が高い。

11 層下面の調査終了後、遺物の埋納などがいないか確認するため、畦畔部分を先行して掘削したところ、22 畦畔の中から和同開珎（172）が 1 点、246 畦畔内から隆平永寶（174）が 1 点出土した。

#### 11 層下面検出遺構（南半）（図 28・29）

前記のとおり、調査区の東側約 4 分の 3 の範囲には 11 層が分布しないため、その範囲は 10 層下面の状況とまったく変化はない。11 層は調査区南半の坪境周辺を中心に 0.1 ～ 0.15 m の厚さで分布しており、調査区南西隅では 11a-1 層と 11a-2 層の 2 層に分層できた。11a-1 層除去後の面では、特に 10 層下面とは変化が認められなかったが、11a-2 層下面では、22 畦畔の西側で新たに 1 条の畦畔を検出した。

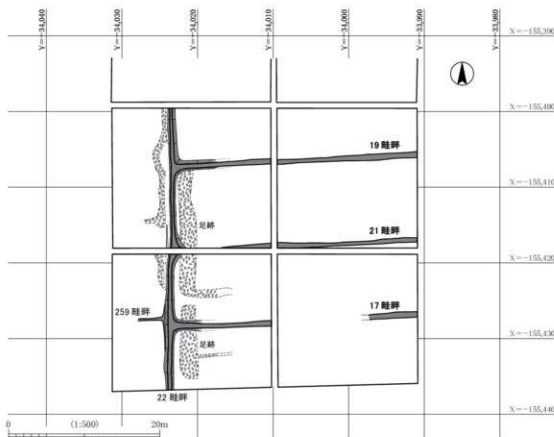


図 28 11層下面検出遺構

**22 畦畔** 坪境の畦畔である。10層下面では畦畔の頂部が帯状に検出できる程度であったが、11層が畦畔に向かってすり付いているため、11層を除去すると北半と同様に畦畔の盛り上がりが見えなくなった。南半では盛り上がりの高さは0.1m程度で、畦畔裾部の幅は約0.8～1.2mである。この畦畔の周辺では、帯状に広がる足跡を検出している。なお南端部では、畦畔の上面に11b層が薄く認められた(図29)。これは22畦畔の盛り上がりか11a層の耕作に伴う疑似畦畔Bであったことを示している。

**259 畦畔** 調査区南西隅の、22畦畔西側に位置する。22畦畔に直交する東西方向の畦畔である。10層下面では17畦畔の延長上で20畦畔を検出していたが、11層下面ではそれよりも約1m北側にずれた位置で検出した。検出位置は近接するが、明らかに異なる畦畔だったことから、遺構番号を259畦畔と振り替えた。幅は約0.3mで、顕著な盛り上がりは認められなかった。この畦畔は、11a-2層の耕作に伴う疑似畦畔Bと考えられる。

#### 12a層出土物 (図30・31)

縄文土器、弥生土器、古墳時代の須恵器蓋杯(144～151)・高杯・壺(瓶)(152)・甕や土師器甕、古代の須恵器杯(159～162)・蓋(154～157)・壺(158・163)や土師器甕(164～166)・製塩土器、瓦(171)などが出土しているが、土師器皿(167)や灰軸陶器(168～170)など若干新しい時

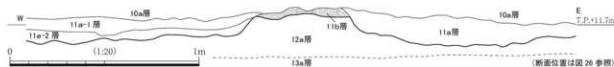


図 29 22 畦畔断面

期の遺物も僅かに含まれている。ただし瓦器はまったく含まれていない。また、22 畦畔より西側の 12a 層最上層から、隆平永寶 (173) が 1 点出土している。このほか、砥石 (143) やサヌカイト製の石鎌 (134 ~ 139)・剝片 (141)・楔形石器・スクレイパー (140)・石核、敲石 (142) が、また南半では馬の歯も出土している。

134 ~ 137 は有茎式石鎌で、138 は凸基式である。いずれも弥生時代のものである。139 は縄文時代晩期の凹基式石鎌の未製品である。141 は縁辺に二次加工がみられ、製品製作を試みたものと思われる。142 は端部に敲打痕がみられる。10a 層出土片と接合した。144 は 6 世紀後半の杯蓋。天井部に 2 条の沈線を施し、その間に刺突文を隙間なく配す。遺跡東方に広がる平尾山古墳群 (平野大県第 20 支群 3 号墳) からよく似た蓋が出土している。147 ~ 149 は 7 世紀前半の杯。149 の内面には墨の痕跡が認められる。151 は 6 世紀前半の杯。内面には当て具痕が、外面には 1 条のヘラ記号がみられる。152 は平底であることから、平瓶である可能性も考えたが、体部が最大径に対してやや高い。底部外面は未調整で、中央には不明瞭であるが、回転台のゲタ痕跡と思われる方形の僅かな窪みがみられる。体部はヨコナデで、底部外面周縁にはおそろく手持ちで施されたと思われる 2 周程度するヘラ削りを施す。内面の底部と体部との屈曲部

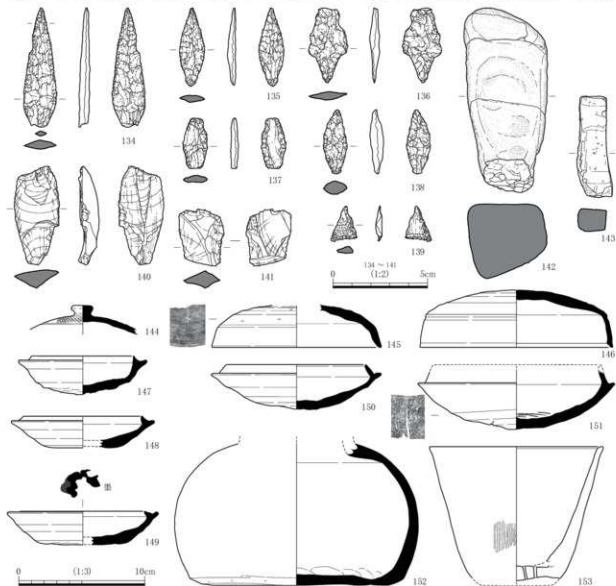


図 30 12a 層出土遺物 (1)

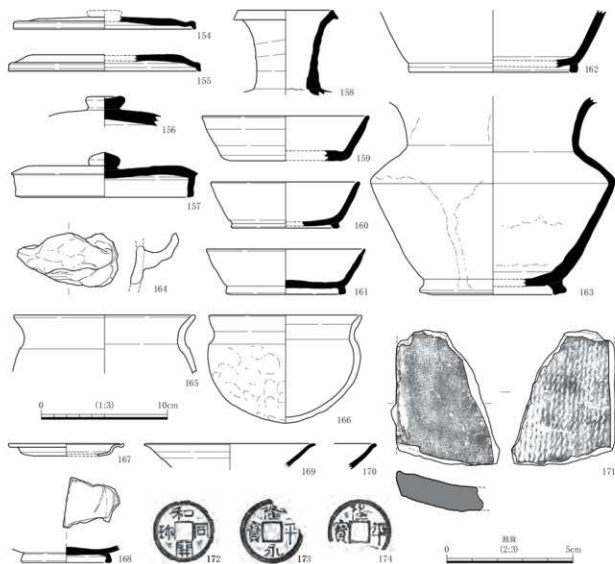


図 31 12a 層出土遺物

には指頭圧痕が明瞭に残る。頸部から口縁部は欠損するため形状は不明だが、破部上端が肥厚していることから、頸部への屈曲部で割れていると復元できる。朝鮮半島百済地域出土の土器に似る。153は6世紀頃のものと思われるが、器種や時期など詳細は不明。外面はハケ調整で、底部には直径2mm程度の小孔を多数あける。古代の土師器・須恵器については、須恵器杯の高台貼り付け位置などから、いずれも8世紀末から9世紀前半頃のものと考えられる。167はての字状口縁皿で、器壁は1.5mm程で薄い。10世紀後半の所産。168～170はいずれも9世紀後半の皿である。

#### 12層下面検出遺構 (図32～34)

調査区を斜めに縦断する溝1条と、細溝2条を検出した。

23溝 次に報告する13層下面検出の80溝とちょうど重なる位置にあたる。地層断面観察用に設けた東西方向のトレンチによって、下層の80溝の存在が事前に判明していたことから、80溝の影響でできた窪みではないかとの予想ができた。また断面観察によって、図33のような堆積を示していることが明らかとなったことから、この溝は、12層上面に人為的に掘られた遺構ではなく、下層80溝の影響によってできた溝状の窪みと判断した。

12層中の遺物と混じらぬよう、23溝を先行して掘削し、遺物を分けた。出土遺物には縄文土器、弥生土



図32 12層下面検出遺構

器(176)、古墳時代の土師器甕(180)・須恵器杯蓋(177)・高杯(178・179)などの小片のほか、サヌカイト製の刺片・楔形石器(175)・石核などがある。

176は簾状文を施した弥生時代中期後半の広口壺。180は布留式期中頃の甕。175は他の楔形石器と比べ大型である。4面から敲打痕がみられ、一部に原礫面を残す。

**細溝** 23溝の脇から溝2条を検出した。幅は0.15m程度と細く、浅い。下層13層下面には、同位置に溝はなく、23溝のように下層の影響でできたものではない。これについては、人為的な遺構というよりは、



図33 23溝断面

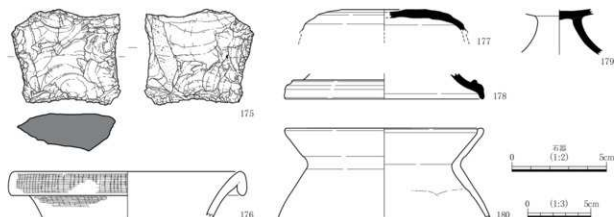


図 34 23 溝出土遺物

雨水などが 23 溝に向かって流れ込んだ痕跡ではないかと考えている。

このほか調査区北西部では、14 層が高く盛り上がり、13 層が薄いため、12 層下面の遺構検出の段階で、既に下層で検出する周溝墓や溝の輪郭が検出できた。

### 13a 層出土遺物 (図 35 ~ 41)

13a 層・13a—1 層やその下面出土の土器は、縄文土器 (181 ~ 250・272 ~ 281) が大半を占めるが、弥生土器 (251 ~ 258・282 ~ 286) や、古墳時代から 7 世紀前半の土師器 (259・290 ~ 292)・須恵器 (260 ~ 263・287 ~ 289) など含まれている。また石廬丁 (264) や石斧 (301) のほか、サヌカイト製の石鏃 (265・294 ~ 299) や刺片 (270)・楔形石器 (269)・スクレイパー (266 ~ 268・300)・石核 (271) などの石器が多く出土している。特異な遺物として、小型の銅鏃 (293) も 1 点みられる。

181 ~ 229・272 ~ 280 は凸帯土器で、2 条凸帯の深鉢が中心である。その多くは縄文時代晩期末の長原式である。凸帯貼り付け位置は、口縁端部に凸帯を貼り付けるものが大半であるが、183・210・280 のように、口縁端部からやや下がった位置に凸帯を貼り付けるものも少数みられる。183・280 は刻目が大型の O 字で、船橋式の可能性がある。181・187 は、1 条凸帯で砲弾形になる深鉢である。181 は全体の形状が分かるもので、最大径が胴部中央付近にくる。外面にはケズリを施し、刻目は小 V 字である。198・202・206・211 はボール状の浅鉢と思われる。198 は凸帯の上面に 1 条の沈線、あるいは条痕を施している。192 は壺の可能性がある。247 はやや小型の波状口縁鉢で、内外面に指頭圧痕と粘土紐の接合痕がみられる。248 も椀形になる鉢で、外面にケズリを施す。249 は口縁端部の上面に刻目を施しており、滋賀里 IV 式と考えられる。250 は篠原式の深鉢である。波状口縁で、口縁端部の外面に 2 条の条痕を施す。272 には刻目を施した際の工具痕が凸帯間に 2 条みられる。273 は壺の可能性があり、274 はボール状になる浅鉢、281 は椀形の鉢である。

底部は大きく 3 種あり、猪鼻状になるもの (230 ~ 238・246) と、立ち上がり部に強い屈曲をもつもの (239 ~ 244)、真っ直ぐ立ち上がるもの (245) に分かれる。230・239・240・245 は、底部外面に種子と思われる圧痕がみられる。

251 は弥生時代中期後半の甕、252 は前期中段階の広口壺。頸部に断面三角形の貼付突帯をめぐらせ、それより上に 2 条の沈線を施す。253・254 は中期後半の有段口縁壺。口縁部外側に櫛描文を施す。255 は端部に近接して穿孔がみられる。おそらく壺蓋と思われる。256・286 は後期、257・258・285 は前期の所産。291・292 は後期のミニチュア土器である。259 は 5 世紀前半の甕。260・261 は 7 世紀前半の杯蓋で、290 の土師器杯とともに 13a 層の下限を示すと考えられる。262・263・287 ~ 289 は 5 世紀後



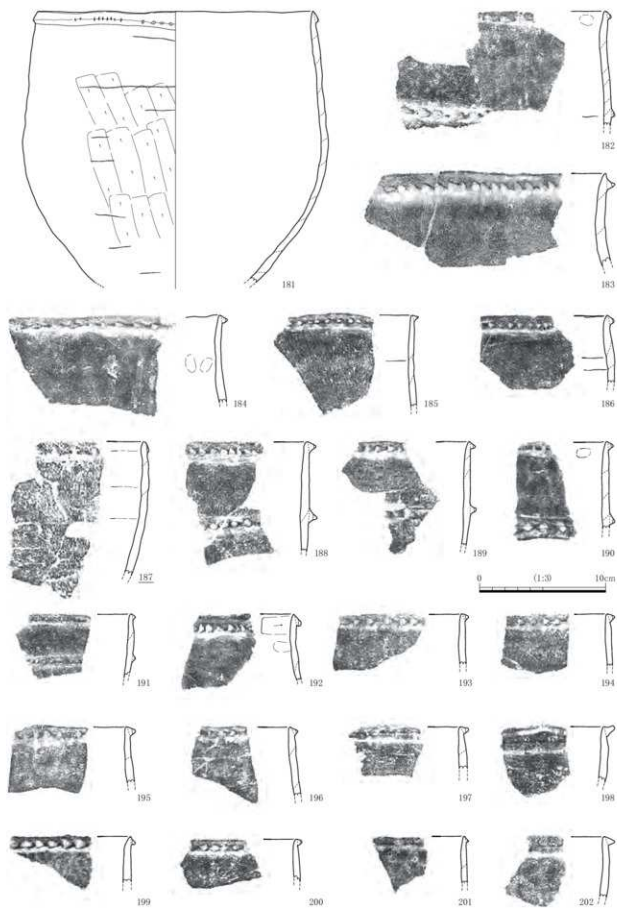


图 35 13a层出土遗物(1)

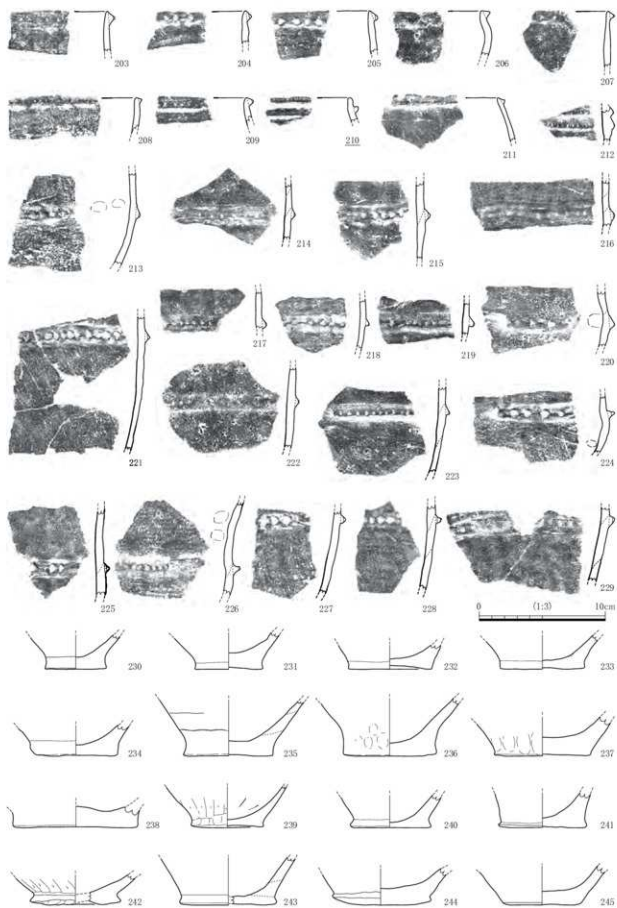


图 36 13a 层出土遗物 (2)

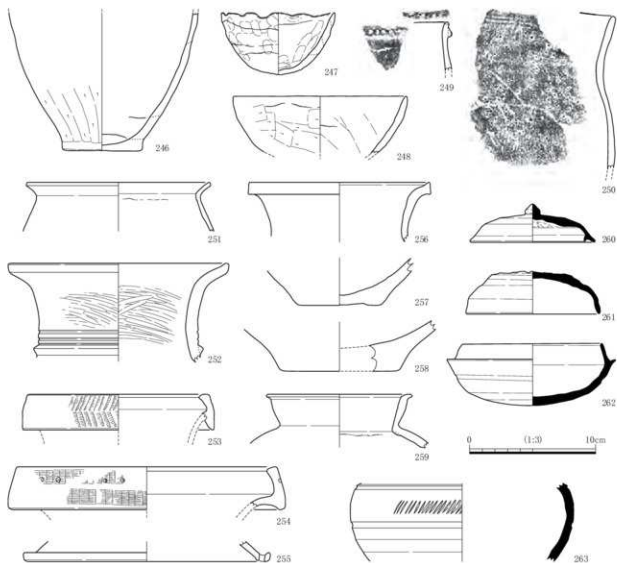


図 37 13a層出土遺物(3)

半から6世紀前半にかけての須恵器杯・台付壺・無蓋高杯などである。

264は緑色片岩製の石庖丁であるが、端部にも刃部をつかっており、何かに転用されていたと考えられる。265は石鎌片、266～268はスクレイパー、269は楔形石器である。270・271は剥片(270)と石核(271)の接合資料である。剥片は直接打法によって製作されており、自然面を打点にしている。294～299はすべて弥生時代の有茎式石鎌である<sup>3)</sup>。300はスクレイパーで、刃部は両面に設ける。301は縄文時代晩期の磨製石斧である。長さ13.8cm、幅6.2cmで、刃部は丸く、刃縁はシャープである。基部は平基で一部を欠損する。断面は楕円形で、最大厚2.7cmを測る。293は有茎式の銅鎌と考えられるが、茎部は折れて欠損する。表面は研磨されておらず、雑なつくりだが、両面に僅かな鋸状の稜が認められる。残存長1.8mm、幅0.8mm、厚さ2mmで、刃部寄りに針穴程度の極小さな孔が開く。

13a-2層やその下面からは、縄文土器(302～328・341～344)や弥生土器(329～333・345)が出土している。石製品も多く、サヌカイト製の石鎌(337～339)や剥片・楔形石器(340)・スクレイパー・石核などのほか、石庖丁(335)や石斧(336)、石棒(334)も出土している。

302・320・343は壺で、304はボール状になる浅鉢、322は鉢である。それ以外はすべて深鉢である。13a層・13a-1層と同じく長原式の凸帯土器が主となる。320には凸帯に刻目を施さない。319は凸帯

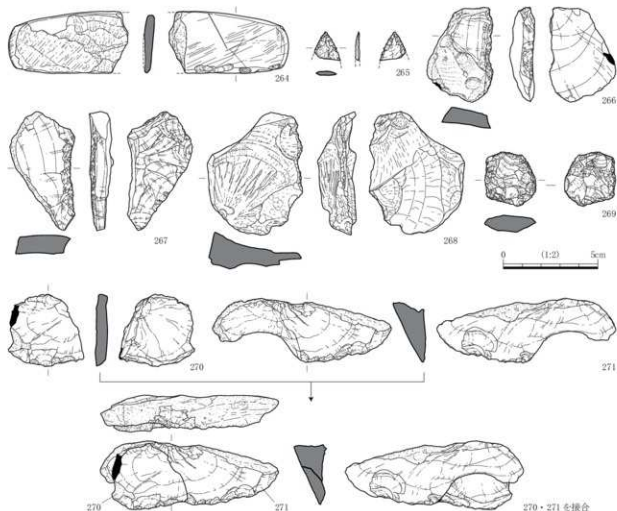


図 38 13a層出土遺物(4)

間の破片と考えられ、外面には多条の線刻による文様がある。321は口縁部が逆「く」字形に折れ曲がる浅鉢と考えられる。口縁端部は外反させ丸く取める。外面には粘土紐の接合痕もみられ、粗製である。322は記録上13a-2層出土となっているが、実際には13a-2層下面から14層に埋まるような状態で出土しており、本来は472～474と同様に14層出土すべき土器である。平底で、体部には粘土紐の接合痕が残る。323と同時期か。323は篠原式の深鉢である。胴部には貝殻条痕がみられる。341は口縁部がやや内傾し、最大径が胴部凸帯付近にくる。2条凸帯で、刻目は2条ともにD字である。胴部凸帯下の一部には、刻目を施した際に付いた工具痕が残る。胴部凸帯より下にはケズリを施し、内面には指頭圧痕がみられる。

底部片には、324・325のように立ち上がり部に強い屈曲をもち、「く」字状になるものと、327・328のように猪鼻状になるものがある。そのほか326のように小型で底面が大きく凹むものもある。325の底部外面には木葉と種子の圧痕がみられる。

329・330・332・345は弥生時代前期の壺や甕、331・333は後期の壺である。330・345には頸部のヘラ描沈線文がみられる。329の口縁端部には刻目状の圧痕がみられるが、不明瞭で全体にめぐるようなものではない。

334は結晶片岩製の石棒である。縄文時代晩期末頃のものと考えられる。先端を丸く、やや下がった位置に3条のくびれをつくることにより頭部を表現する。基部は折れて欠損する。断面形は楕円形で、下端部では幅5.8cm、厚さ3.9cmを測る。頭部の最大幅は7.0cmで、残存長は17.1cmである。石棒については、

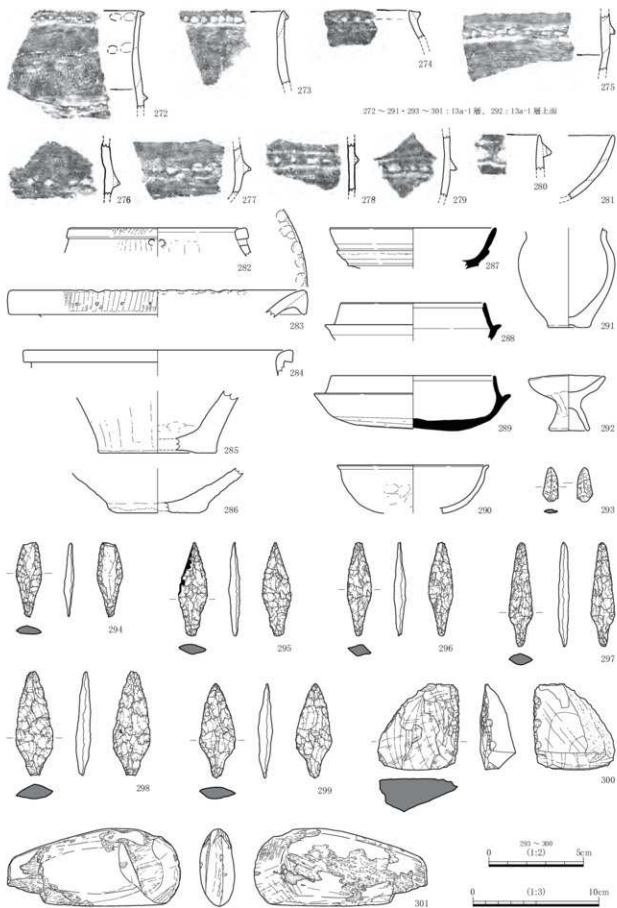


图 39 13a-1 層出土遺物

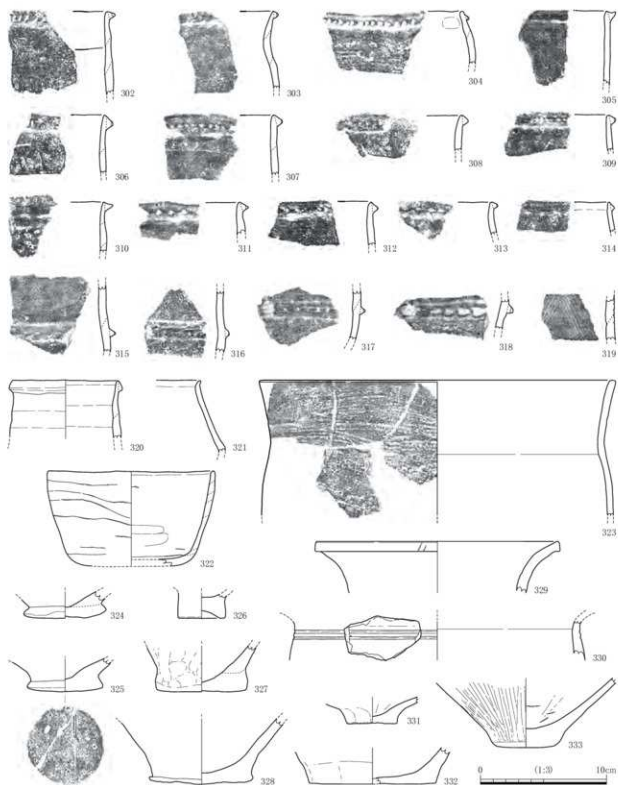


図40 13a-2層出土遺物

これまでに実施した(その6)・(その8)・(その9)調査でも出土している。335は緑色片岩製。平面形は直線刃の半月形を呈する。片刃で、A・B両面ともに全体を丁寧に研磨し、背部も丸く磨く。336は磨製の石斧と思われるが、欠損部が多く詳細は不明。石鐮のうち337は凹基式、338は平基式、339は有茎式である。339は刃部がやや丸く外湾する。337は縄文時代晩期、338・339は弥生時代の所産と考えられる。340は楔形石器で、側面は折れている。

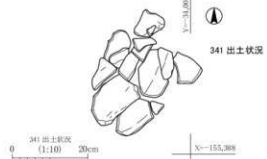
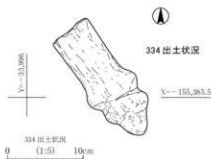
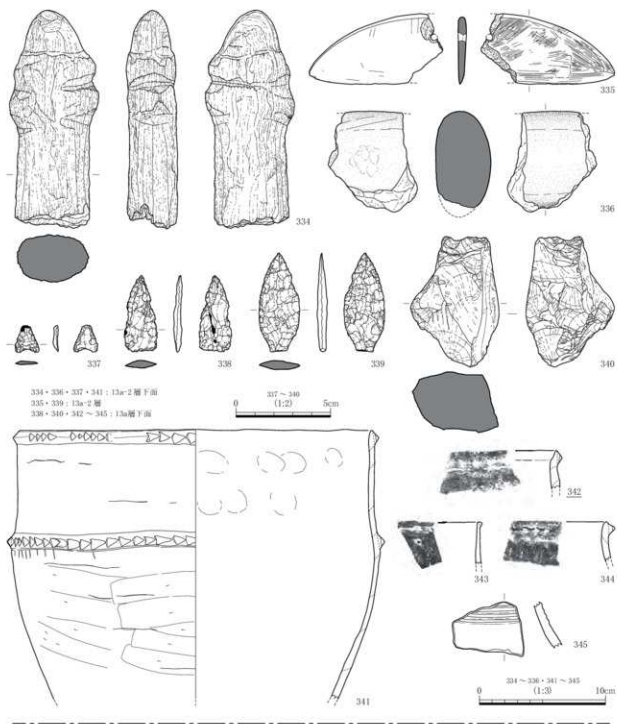


図 41 13a-2層・13a-2層下面出土遺物及び石棒・土器出土状況

### 13層下面検出遺構(図42～64・表1)

縄文時代晩期末から古墳時代前期の遺構を多数検出した。調査区の北西隅には弥生時代後期後半の周溝墓が1基あり、その東側には古墳時代まで機能する溝が1条ある。それを境に東側に縄文時代の土坑や落込み(遺構名は落込)、ピットなどが展開する。

**周溝墓10-1** 調査区北西隅に位置し、西側に接する(その8)調査では、この周溝墓の西側周溝の一部(70溝)が検出されている。13層下面検出としているが、この周溝墓の墳丘部分は、基盤となる14層の標高がもっとも高く、13層が残っていない。12層の下面ですでに墳丘の輪郭が検出できていた。周溝墓北端が調査区外のため、一部が未検出であるが、周溝(150周溝)が円形にめぐる円形周溝墓であったことは間違いない。その周溝は完全に一周せず、南端部を陸橋部として掘り残す。陸橋部の幅は0.8mで、その陸橋上には取束した周溝を連結させるように細い溝(146溝)が設けられている。溝の幅は0.3m、深さは0.12mで、埋土は基盤層の極細砂～シルトを含むオリブ黒色シルトである。同様の事例は、滋賀県長浜市(調査時は虎姫町)所在の五村遺跡の円形周溝墓でもみられ、そこでは張出部先端を区切る溝と解釈されている。周溝墓の規模は、東側周溝の東肩から、(その8)調査で検出した西側周溝(70溝)の西肩までが18.8m。墳丘の直径は、裾部で11.5m、周溝内側肩部では10.6～10.8mを測る。周溝の幅は3.5～4m程度であるが、東側周溝の陸橋部付近は若干広がり4.8mとなる。この陸橋部付近の周溝については、検出段階で墳丘側の輪郭に認識があった。明らかな土色の違いが認められたことから、空中写真測量時まで、図43の破線部と判断していたが、薄く掘り下げて再確認したところ、若干の掘り残しがあり、築造当初の輪郭(図43実線)が墳丘側に0.25～0.3mほどずれた位置で検出できた。これにより、墳丘の平面形はより円形となることが判明した。周溝の深さは約0.2～0.35mで、埋土は上層から、極細粒砂～シルトを含むオリブ黒色粘土質シルト、基盤層の偽礫が多く混じる黒褐色粘土、基盤層の偽礫が多く混じる黒褐色粘土質シルトの3層で、裾部には墳丘の崩落土と考えられる偽礫を多く含む灰色シルトが堆積する。これらより下の基盤層との間には、オリブ黒～暗オリブ灰色の粘土質シルト偽礫が多く混じるオリブ褐～暗オリブ色の細～極細粒砂が認められるが、これは周溝構築時の踏み込みなどによる乱れと考えている。なお、周溝外側の輪郭は、整った弧を描かず、東側の一部が角張って折れ曲がっている。(その8)調査で検出した西側周溝(70溝)の輪郭にも同様の折れ曲がりが見られることから、意図的な形状であったと考えられ、同様の類例に注意したい。墳丘上には、検出面の下にオリブ黒色の粘土質シルト偽礫が多く混じる暗オリブ灰～暗緑灰色の細粒砂～シルトが0.1～0.15m程度の厚みで広がっており、基盤層となる。基盤層との境は水平でなく凹凸が著しい。盛土や旧表土ではなく、これも墳丘築造時の踏み込みなどによる乱れと考えている。埋葬施設は確認できなかった。

この西側では、(その8)調査で1基(1号墓)、(その9)調査で2基(3・4号墓)の方形周溝墓が並ぶように確認されており、この周溝墓も一連の周溝墓であったと考えられるが、今回検出の周溝墓のみ平面形が円形を呈しており、特異である。

150周溝の最上層からは須恵器片も出土するが、底面からは弥生時代後期後半の土器片(350～352)が出土している。これらの土器の年代が周溝墓の築造時期を示していると考えているが、いずれも小片であり、墳丘上から転落したような土器ではない。

350は広口壺あるいは器台で、口縁端部に断面三角形の粘土を貼り足して垂下部を表現する。口縁部の凹線は明瞭でなく、2～3個の円形竹管浮文を付す。352も広口壺。外面はヘラミガキで、体部中位に櫛描きの波状文を施す。(その9)調査で検出した3号墓1011周溝からも、よく似た波状文を刻む壺が出土





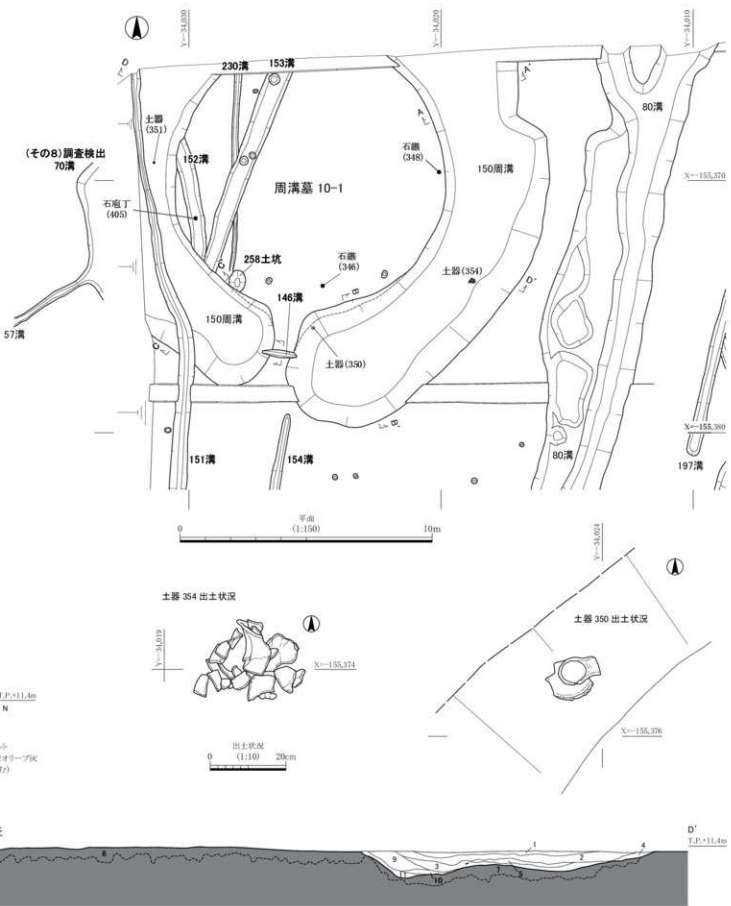
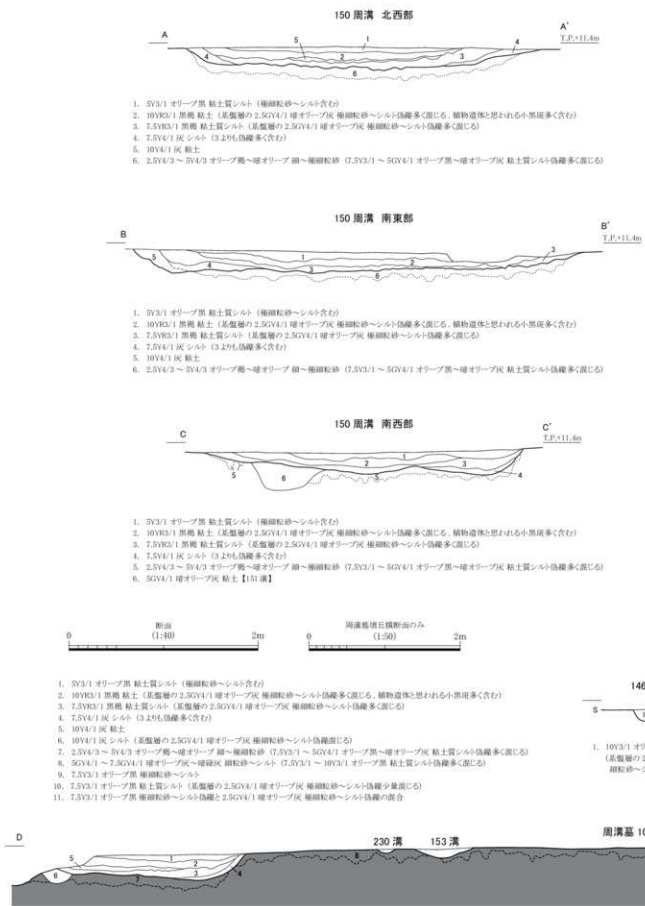


図 43 周溝墓 10-1 関連遺構平面・断面及び土器出土状況

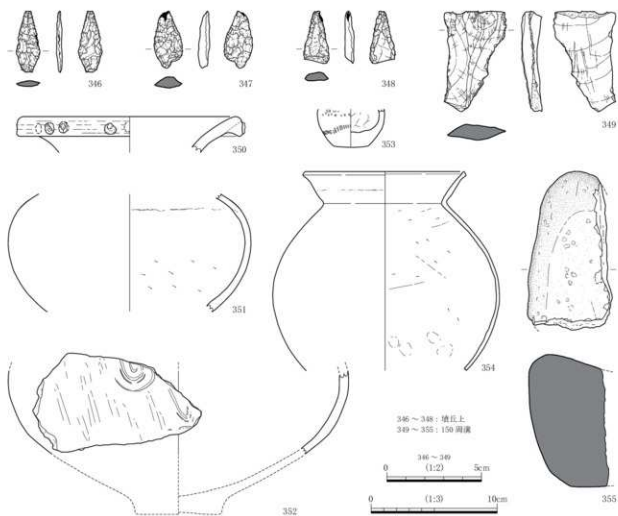


図 44 周溝墓 10-1 出土遺物

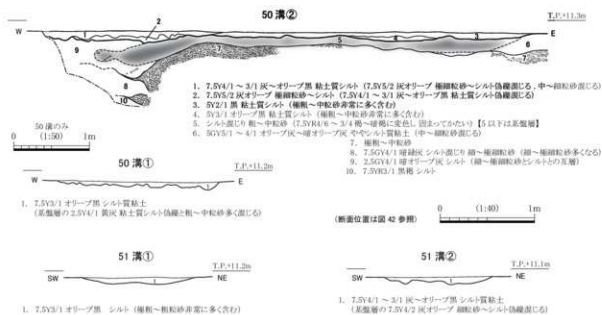


図 45 50・51 溝断面

している。

底からやや浮いた状態で、庄内式期末～布留式期初頭の土師器甕(354)が出土している。おそらくこの時期まで周溝が埋まることなく残っていたことがうかがえる。内面はヘラケズリであるが、頸部内面の屈曲部はそれほどシャープではない。外面はナデ調整で、口縁端部は外傾する面をもつ。352はミニチュアの壺。外面には櫛描きの刺突文がめぐる。

墳丘上精査時に石鐮(346～348)が3点出土しているほか、150周溝からは台石(355)やサヌカイト製の剥片・楔形石器・スクレイパー(349)・原礫なども出土している。346～348はいずれも弥生時代の有茎式石鐮である。

**50 溝** 南半西寄りに位置する。やや斜行する南北方向の浅い溝であるが、溝というよりは、下層の砂層の影響でできた浅い窪みというべき遺構である。この溝はちょうど、(その8)調査で確認された縄文時代晩期前葉の排水流路の東肩部(図42太破線)にあっており、溝の下部にはその流路肩部(写真図版9-7)にできた自然堤防状の砂の盛り上がりが見られる。この影響を強く受けて形成されたと考えられる。溝の幅は北側では約2～3m、南側では6.5～7mで、深さは西辺が若干深く、約0.13mを測るが、東辺は非常に浅く0.05m程度である。埋土は、西寄りの深い箇所が、偽礫や中～細粒砂が混じる灰～オリーブ黒色粘土質シルトや偽礫混じりの極細粒砂～シルトで、東寄り、極粗～中粒砂を非常に多く含む黒色粘土質シルトやオリーブ黒色シルト質粘土である。これらを除いた上で、縄文時代晩期末の土坑を多く検出した。

縄文土器(356～369)や石器(374～376)に混じって、僅かに弥生土器片(370・371)が出土している。縄文土器は、長原式が主であるが、水走型と呼ばれるタイプ(356)もみられる。356は口縁部が外反し、端部からやや下がった位置に凸帯を貼り付ける。凸帯は丸みをおびており、刻目はみられない。器形や胎土が他の凸帯土器と異なり、他地域からの搬入品の可能性がある。359はボール状になる浅鉢で、それ以外はすべて深鉢である。368・369は、猪鼻状になる底部である。370・371は弥生時代前期の壺で、370は頸部に段がみられ、肩部に1条のヘラ描沈線文を施す。371は外面にヘラミガキを施す。

石器には、サヌカイト製の剥片や楔形石器(374)・石核などのほか、敲石(376)や台石(375)がみられる。374は他の楔形石器に比べて大型で、両端に敲打痕がみられる。375は破面を下にして据えて使う台石と考えられる。376は端部に敲打痕がみられる。

**51 溝** 南半に位置する。南東—北西方向の浅い溝で、溝というよりは、後述する落込みとすべき遺構である。幅は一部くびれている箇所もあるが、おおよそ1.1m前後である。深さは0.1m足らずで浅い。埋土は極粗～粗粒砂を非常に多く含むオリーブ黒色の粘土質シルトや基盤層の偽礫が混じる灰～オリーブ黒色のシルト質粘土である。

縄文土器小片(372)と楔形石器(373)が1点出土している。372は長原式か。

**80 溝** 調査区北辺の中央から調査区南西隅に向かってのび、前記50溝と並行する。この溝を境に西側には周溝墓が点在するが、東側には同時期の遺構は展開しない。代わって縄文時代の遺構が多くなる。おそらく弥生時代後期後半に築かれた墓域を画する溝であったと考えられる。幅は南半が狭く1.6m前後で、狭い箇所では1.1m程度のところもある。深さは約0.3mである。北半はやや幅が広がり、2.3m前後から、北寄りの広い箇所では4mに達するところもある。深さは約0.4～0.45mで、東寄りが一段低い二段掘りのような形状となる。また、北壁際の溝内には鳥状の高まりがみられる。これより北側では溝がY字状に分岐しているかもしれない。埋土は灰～オリーブ黒色のシルトや粘土質シルトなどで、下層には粗～細粒砂の堆積がみられることから、ある程度の流水、あるいは帯水があったことがうかがえる。

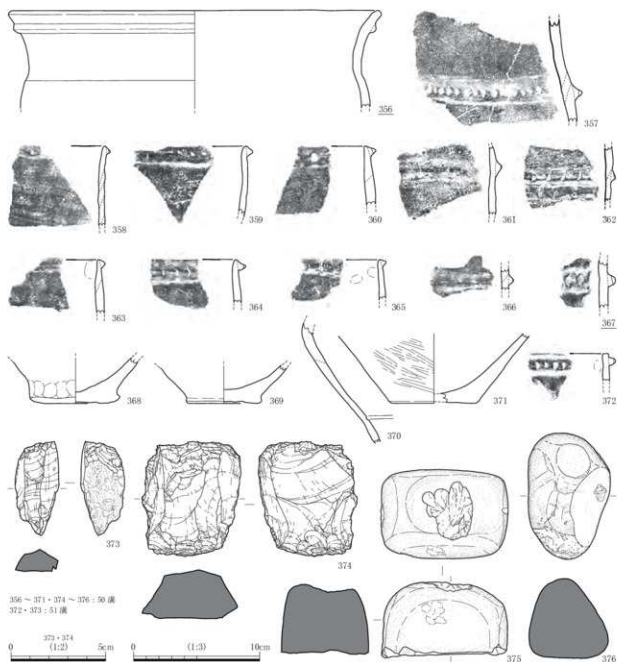


図46 50・51溝出土遺物

出土する遺物の中には、弥生土器（382～393）や、上層からは古墳時代の土師器（394・395）などが出土しているが、縄文土器（377～381）が圧倒的に多い。石器も多く、サマカイト製の石鎌（402）や、剥片・楔形石器・スクレイパー（403・404）・石核などのほか、北半の下層からは弥生時代の石庖丁（401）も出土している。

縄文土器はいずれも長原式のもので、379は浅鉢、380は壺の可能性がある。その他は深鉢である。382は弥生時代中期後半、383は後期後半の甕。384は櫛描籬状文を施す中期後半の広口壺で、385は棒状浮文上にキザミを施す中期後半の鉢。386は前期後半の広口壺で、口縁部に内側から穿孔を施す。388・390～392は後期後半の所産。391内面には炭化物が付着する。394・395は布留式期後半の甕。402は弥生時代の凸基式石鎌で、404は原礫をそのままスクレイパーにしている。

100溝 80溝の東側にコの字状に取り付く溝である。80溝から分岐し、再度合流するまでの間は約14m

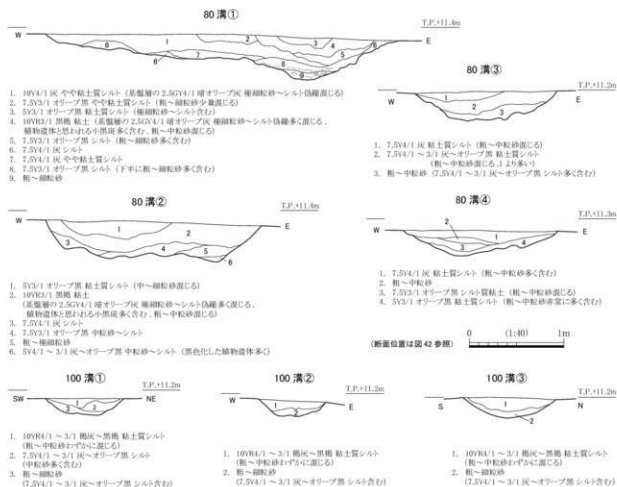


図47 80・100溝断面

で、80溝と100溝東辺部との間隔は約4mを測る。幅は0.75～1mで、深さは0.17～0.2mである。埋土は粗～中粒砂が僅かに混じる褐灰～黒褐色の粘土質シルトや粗～細粒砂などである。

出土する土器には、弥生土器(399・400)が数点含まれているが、80溝同様、縄文土器(396～398)が大半である。このほかサヌカイト製の剥片・楔形石器も出土している。396～398はいずれも晩期末の深鉢で、396は水走型、397・398は長原式である。399は弥生時代前期の広口壺。400は中期後半の高杯である。

**151溝** 北半の西端に位置する。(その9)調査区で検出した1017溝に続く溝である。南北方向の溝で、周溝墓の西辺周溝と重複する。周溝より深かったため、図面上ではこの溝が切っているような表現となっているが、実際には周溝に切られる周溝より古い溝である。幅は約0.6mで、深さは0.4mを測る。埋土は偽礫が混じる灰色シルトや粘土、暗オリーブ灰色の粘土などである。

縄文土器の小片とサヌカイト製の剥片が出土している。

**152・153・230溝** 周溝墓の墳丘上で検出した。周溝に切られていることから、周溝墓よりは古い遺構であったことは確実である。その中でも、230溝は153溝と重複し、153溝に切られるさらに一時期古い溝である。それぞれの規模は、152溝が幅0.6～0.7m、深さ0.08mで、153溝は幅0.6～0.9m、深さ0.15m、230溝は幅0.2～0.25mで、深さ0.06mを測る。埋土は152・153溝が偽礫混じりの灰色シルト、230溝が灰オリーブ色の砂質シルトである。153溝の底からは165～167ピットを検出している。

152溝からは、縄文時代晩期の土器小片と石庖丁(405)が出土している。405は緑色片岩製で、平面

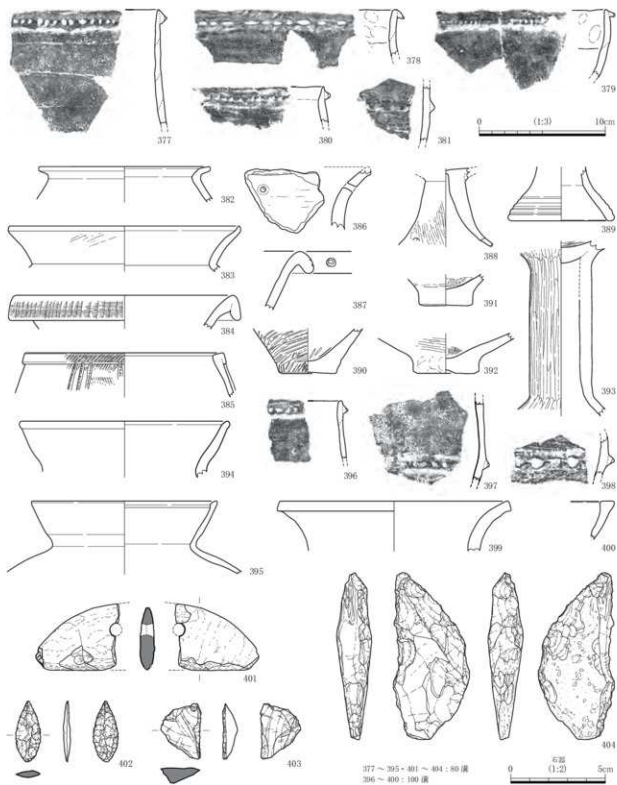


図48 80・100溝出土遺物

形は直線刃の楕円形を呈する。2孔は両面から穿孔する。片刃であるが、B面側からも僅かに傾きをかけて研ぎ出している。A・B面ともに自然面を多く残す。

153溝からは、縄文土器とサヌカイト製の楔形石器（406）が出土している。最上層からは古墳時代の須恵器小片が出土しているが、遺構の切り合い関係から混入品と考えられる。

230溝からは、縄文土器と土師器の細片が僅かに出土している。



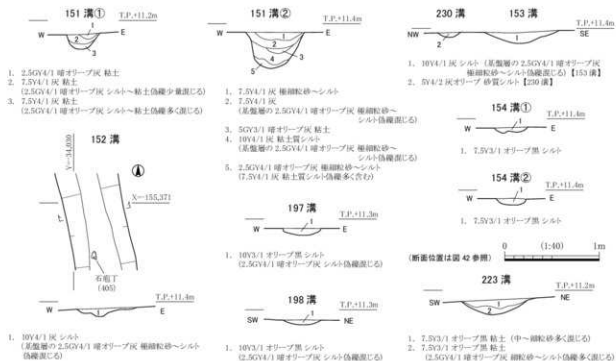


図 49 13層下面検出断面

**154 溝** 151 溝の東側に並行する。幅は 0.3～0.35 m、深さは 0.05 m で、埋土はオリーブ黒色シルトである。南端部が西側に緩やかに曲がっていることから、おそらく西側に並行する 151 溝に接続していたと考えられる。

縄文土器小片が出土している。

**197・198 溝** 北半の 80 溝の東側に位置する。197 溝は 80 溝に並行し、198 溝は 197 溝に鋭角に接続する。197 溝は長さ 8 m で、両端はどの遺構とも交わらない。幅は 0.4～0.5 m、深さ 0.08 m で、198 溝は幅 0.3～0.4 m、深さ 0.05 m を測る。埋土は両者とも偽礫混じりのオリーブ黒色シルトである。

197 溝からは、縄文時代晩期の土器小片と、楔形石器が 1 点出土している。

198 溝からは、縄文土器 (408) 小片のほか、サヌカイト製の石鏃未製品 (407) と石核が出土している。408 は長原式の深鉢。407 は縄文時代晩期の凹基式石鏃の未製品である。

**223 溝** 調査区北東隅に位置する。222 落込の底で検出した。南東—北西方向の溝で、幅約 0.8 m、深さ 0.15 m を測る。埋土は砂粒や偽礫が混じるオリーブ黒色の粘土である。

縄文土器小片に混じて弥生土器と思われる小片が 1 点出土している。

**53 土坑** 調査区南東隅に位置する。平面形は直径 1.8～1.9 m の円形で、深さは 0.62 m を測る。埋土は粗～中粒砂が多く混じる灰～オリーブ黒色の粘土質シルトや暗オリーブ灰色シルト質粘土、シルト質粘土の

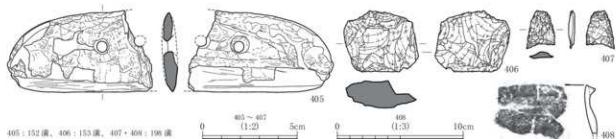


図 50 152・153・198 溝出土遺物



偽籾を多く含む粗～中粒砂などである。

縄文土器小片が数点出土している。

**55 土坑** 53 土坑の東側に近接する。土坑としたが後述する落込みの一つである。幅は 1.05 ～ 1.8 m、深さは 0.1 ～ 0.2 m を測る。埋土は灰～オリーブ黒色の粘土質シルトなどである。

縄文土器小片が 3 点出土している。

**88 土坑** 調査区南西隅の 50 溝内に位置する。平面形は長径 1.0 m、短径 0.85 m の楕円形で、深さは 0.3 m を測る。埋土は極粗～中粒砂を多く含む黒褐色や黄灰色のシルト質粘土である。

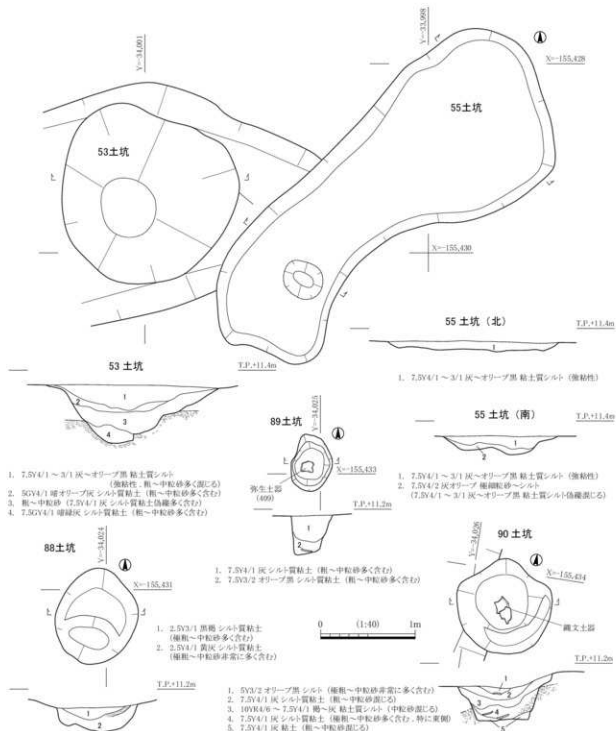


図 51 13 層下面検出土坑平面・断面 (1)

縄文土器小片が3点出土している。

**89 土坑** 88 土坑の南側に近接する。平面形は長径 0.6 m、短径 0.45 m の歪んだ楕円形で、深さは 0.4 m を測る。埋土は粗～中粒砂を多く含む灰色やオリーブ黒色のシルト質粘土である。

この土坑からは、縄文土器（410）と弥生土器（409）が出土している。409 は土坑の最下層から出土した弥生時代前期の壺である。外面はヘラミガキで、内面はハケ状の痕跡が残る板ナデ。底部の立ち上がり部外面には1条の沈線がみられる。410 は長原式の深鉢。

**90 土坑** 89 土坑の南側に近接する。平面形は直径 1.0 m の一部が窪んだ円形を呈する。深さは 0.5 m で、底は水平である。埋土は砂粒を多く含むオリーブ黒色シルトや灰色シルト質粘土などである。

縄文時代晩期末の水走型と考えられる凸帯文土器（411）の小片が出土している。凸帯の刻目は認められない。また、図化できなかったが、底からは晩期の深鉢体部片も出土している。外面はケズリで、器壁は約 9 mm とやや厚手である。

**92 土坑** 88～90 土坑北側の 50 溝内に位置する。平面形は長径 0.9 m、短径 0.7 m の楕円形で、深さは 0.28 m を測る。埋土は極粗～中粒砂を非常に多く含む褐灰～黒褐色の粘土質シルトである。

縄文土器小片が1点出土している。

**97 土坑** 調査区南端中央に位置する。平面形は直径 1.0～1.1 m の円形で、深さは 0.53 m を測る。埋土は粗～細粒砂を多く含むオリーブ黒色のシルト質粘土である。

**99 土坑** 調査区南西隅に位置する。平面形は長径 1.46 m、短径 1.1 m の隅丸の菱形を呈する。深さは 0.35 m で、埋土は偽礫混じりの灰～オリーブ黒色の粘土質シルトやシルト質粘土などである。

**101 土坑** 調査区南半の西端に位置する。平面形は長径 0.9 m、短径 0.6 m の楕円形で、深さは 0.1 m を測る。埋土は灰～オリーブ黒色の粘土質シルトである。

**102 土坑** 101 土坑の南側に位置する。平面形は長径 1.4 m、短径 0.85 m の楕円形で、深さは 0.14 m を測る。埋土は灰～オリーブ黒色の粘土質シルトである。

**103 土坑** 102 土坑の南側に位置する。西端を欠くため全体の形状は不明。規模は南北 1.45 m、東西 1.05 m 以上で、深さは 0.1 m を測る。埋土は灰～オリーブ黒色の粘土質シルトである。

**107 土坑** 92 土坑北西側の 50 溝内に位置する。平面形は直径約 0.9 m の歪んだ台形で、深さは 0.13 m を測る。埋土は基盤層の偽礫が混じる灰～オリーブ黒色のシルト質粘土や灰オリーブ色の極細粒砂～シルトである。

**109 土坑** 調査区南半の西端、101 土坑の北側に位置する。平面形は長径 1.35 m、短径 0.75 m の楕円形で、深さは 0.18 m を測る。埋土は基盤層の偽礫が混じる灰～オリーブ黒色のシルト質粘土である。

**110 土坑** 100 溝のすぐ東側の、50 溝内に位置する。平面形は長径 1.95 m、短径 1.5 m の楕円形で、深さは 0.5 m を測る。埋土は最下層に偽礫や粗～中粒砂を多く含むオリーブ黒色のシルト質粘土があり、その上が極粗～中粒砂となる。

長原式の縄文土器小片（412）が数点出土している。

**125 土坑** 110 土坑の南側に近接する。平面形は長径 1.97 m、短径 1.7 m の楕円形で、深さは 0.33 m を測る。埋土は極粗～中粒砂が混じる黒褐色～灰色のシルト質粘土や極粗～中粒砂である。

縄文土器（413・414）が出土している。413 は長原式の深鉢、414 は猪鼻状になる底部である。

**126 土坑** 129 土坑の北側に近接する。平面形は長径 1.4 m、短径 1.0 m のやや歪んだ隅丸長方形で、深さは 0.5 m を測る。埋土は、下層が粗～中粒砂を多く含むオリーブ黒色のシルト質粘土や極粗～中粒砂など

で、最上層が極粗～中粒砂を多く含む、炭混じりの灰色粘土質シルトである。

この土坑からは、縄文土器（416・418～420）とともに、弥生土器（415）が1点出土している。またサヌカイト製の石鏃（417）も出土している。415は弥生時代前期中葉の広口壺。肩部に段をもち、段の下に2条のヘラ描沈線文を施す。体部外面はヘラミガキ。416・418～420は長原式の深鉢。416は凸帯間隔が近接しており、口縁凸帯には刻目はみられず、胴部凸帯に簡略化した刻目を施す。417は縄文時代晩期の凹基式石鏃である。刃部の両側面に1箇所ずつ突起があり、五角形気味となる。

**127 土坑** 126 土坑北東側の 50 溝内に位置する。平面形は長径 1.6 m、短径 1.2 m のやや歪んだ楕円形で、深さは 0.58 m を測る。埋土は最下層に細粒砂を含むオリブ灰色のシルトがあり、その上が粗～中粒砂が混じる灰～オリブ黒色のシルト質粘土や細礫～中粒砂などである。この最下層のシルトについては、植物珪酸体分析を実施し、またそのシルト中に含まれていた炭化物について、放射性炭素年代測定を実施

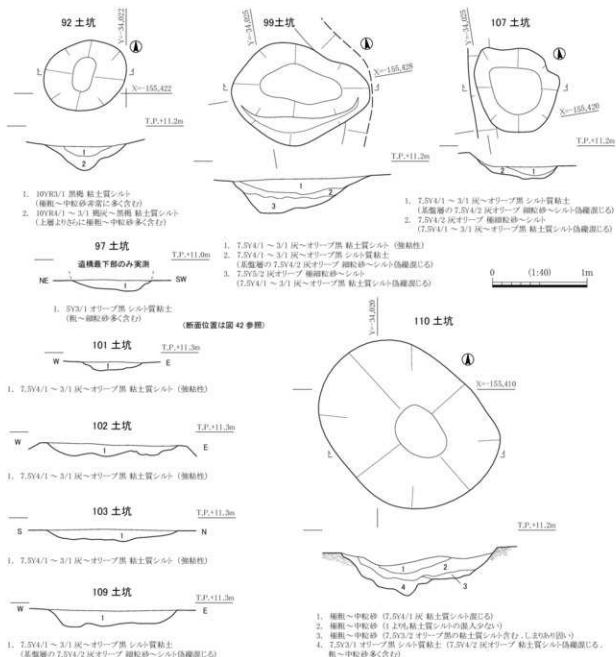


図 52 13 層下面検出土坑平面・断面 (2)

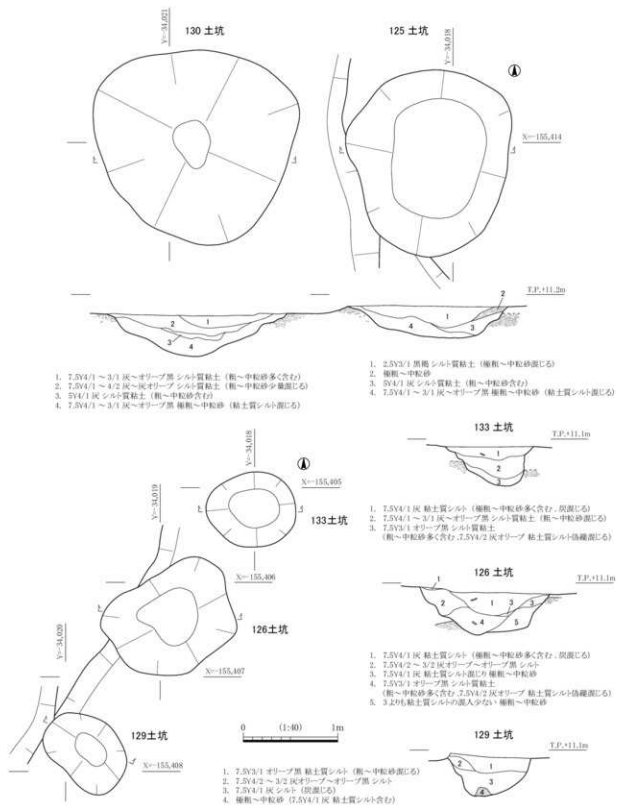


図 53 13 層下面検出土坑平面・断面 (3)

している。詳細については第 5 章で報告する。

縄文土器片 (421 ~ 433) が多数出土しているが、弥生時代前期のものと思われる壺体部片が含まれていた。このほかサヌカイ製の剥片が 1 点出土している。

421 はボール状になる浅鉢か。433 は碗形の鉢で、それ以外は深鉢である。422 は口縁凸帯の下に線刻

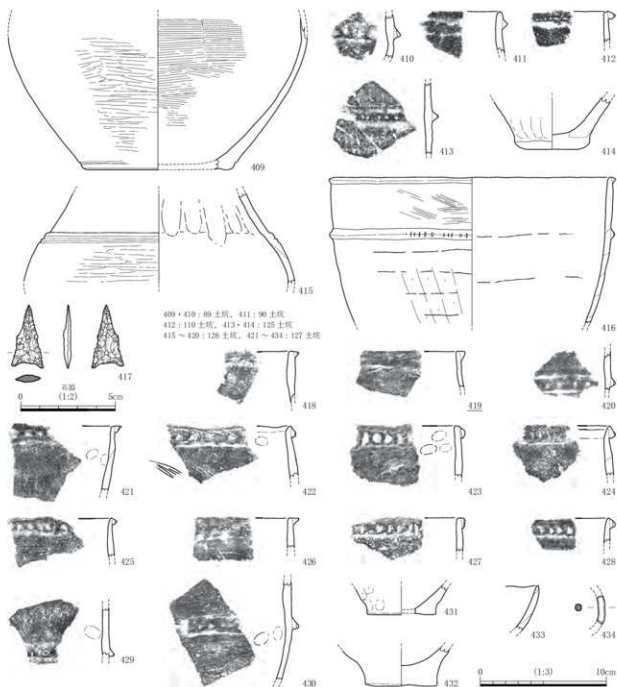


図54 土坑出土遺物(1)

による文様がみられる。いずれも長原式。このほか434のような環状土製品もみられる。

**129 土坑** 126土坑の南西側に近接する。平面形は長径0.95 m、短径0.65 mの楕円形で、深さは0.45 mを測る。埋土は粗～中粒砂が混じるオリブ黒色の粘質シルトや、炭が混じる灰色シルトなどである。

縄文土器(435)の小片が数点出土している。435は長原式の深鉢底部である。

**130 土坑** 125土坑西側の50溝内に位置する。平面形は長径2.15 m、短径2.0 mの隅丸三角形で、深さは0.45 mを測る。埋土は最下層に極粗～中粒砂があり、その上が粗～中粒砂が混じる灰～オリブ黒色や灰オリブ色のシルト質粘土である。

縄文土器(436・437)と土偶(444)が出土している。436・437は長原式の深鉢底部。

444は、縄文時代晩期後葉のいわゆる「台式土偶長原タイプ」と呼ばれる土偶である。頭部を欠損する

胴部片で、首の破断面には直径3mm程度の小孔が2箇所開く。細い棒を芯にして頭部と胴部とを接合していたと考えられる。脚部はなく、座している表現は完全に省略されている。底面は強いナデにより窪み、背面側にやや粘土が張り出すが、水平な箇所がまったくなく、また胴部が背面側に反っているため、自立はむずかしい。胴部正面左右にみられる2つの孔は、両手を腰に当てた際にできる胴部と腕との隙間を表したものであり、腹部には女性の妊娠時に現れる正中線を細い線刻で表現する。腕まで含めた左右の幅は8.2cmで、胴部の厚さは1.9cmを測る。胸部には長径1.4cm、短径0.7cm、厚さ1.5mm程度の楕円形の薄い粘土を逆ハの字状に貼り付けて乳房を表現するが、左胸のそれは剥落している。生駒山西麓産胎土。

**133 土坑** 126 土坑の北東側に近接する。平面形は長径0.95 m、短径0.8 mの楕円形で、深さは0.4 mを測る。埋土は極粗～中粒砂を多く含む灰色の粘土質シルトや、灰～オリーブ黒色のシルト質粘土などである。

縄文土器片(438)が出土している。長原式と思われる凸帯間の破片で、多条の線刻による文様がみられる。

**155 土坑** 周溝墓の南側に位置する。平面形は長径0.95 m、短径0.8 mの楕円形で、深さは0.2 mを測る。埋土はオリーブ黒色のシルトや粘土質シルトである。

縄文土器と思われる細片が出土している。

**156 土坑** 155 土坑の南側に位置する。平面形は長径1.75 m、短径0.65～0.7 mの隅丸長方形で、深さは0.1 mを測る。埋土は基盤層の偽礫が混じるオリーブ黒色シルトである。

縄文土器の小片と、サヌカイト製の剥片が出土している。

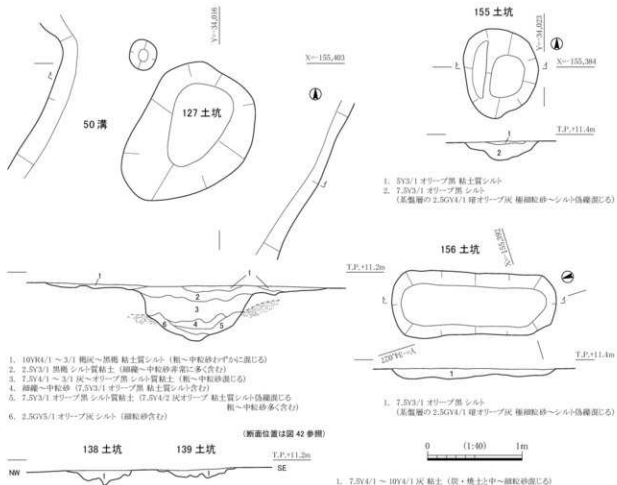


図55 13層下面検出土坑平面・断面(4)

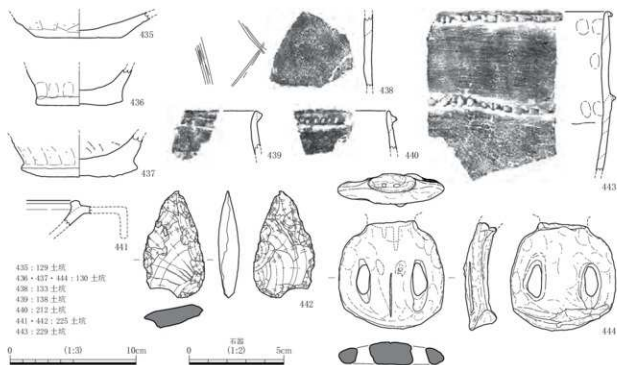


図 56 土坑出土遺物(2)

**170 土坑** 調査区の中央に位置する。平面形は長径 1.15 m、短径 0.85 m の隅丸の菱形で、深さは 0.15 m を測る。埋土は基盤層の偽礫と粗～中粒砂が多く混じるオリブ黒色のシルト質粘土である。

縄文土器の小片が出土している。

**171 土坑** 調査区の中央やや西寄りに位置する。平面形は長径 1.2 m、短径 0.65 m の楕円形で、深さは 0.2 m を測る。埋土は基盤層の偽礫と粗～中粒砂が多く混じるオリブ黒色のシルト質粘土や、粘土の偽礫が混じる暗オリブ灰色の細粒砂～シルトである。

縄文土器の小片が出土している。

**172 土坑** 170 土坑の南側に位置する。平面形は直径 0.5～0.55 m の円形で、深さは 0.5 m を測る。埋土は、最下層がオリブ黒色の粘土偽礫を多く含む灰色粘土、その上が炭や粘土質シルトの小偽礫が混じる灰～オリブ黒色の粘土である。

縄文土器片が 2 点出土している。

**175 土坑** 170 土坑北側の 174 落込内に位置する。平面形は直径 0.65～0.58 m の円形で、深さは 0.3 m を測る。埋土は基盤層の偽礫が混じるオリブ黒色のシルトや粘土質シルトである。

縄文土器の小片が出土している。

**209 土坑** 170 土坑の北東側に位置する。平面形は長径 1.1 m、短径 0.9 m の楕円形で、深さは 0.55 m を測る。埋土は、最下層が粗～細粒砂が混じるオリブ黒色の粘土で、その上が粗～細粒砂が混じる灰オリブ色の粘質シルトやオリブ黒色の粘土などである。

縄文土器片が 2 点出土している。

**212 土坑** 調査区北半の中央やや東寄りに位置する。平面形は不整形で、長径 0.95 m、短径 0.7 m を測る。深さは 0.3 m で、埋土は 3 層に分かれるが、いずれもオリブ黒色の粘土である。

縄文土器 (440) が出土している。晩期末の水走型と思われる。

**220 土坑** 175 土坑北側の 201 落込内に位置する。平面形は長径 0.65 m、短径 0.55 m の隅丸方形で、

深さは0.25 mを測る。埋土はオリープ黒色の粘土である。

**224 土坑** 220 土坑北側の 200 落込内に位置する。平面形は長径 4.8 m、短径 1.0～1.15 mの南北に長い楕円形で、深さは0.35 mを測る。埋土は灰色やオリープ黒色の粘土である。

弥生土器と思われる小片が多数出土している。

**225 土坑** 調査区北壁裾に位置する。227 落込の底で検出した。平面形は長径 7.9 m、短径 2 m以上の東西に長い楕円形で、深さは約 0.15 mを測る。埋土はオリープ黒色の粘土偽礫が多く混じる灰色の細粒砂～シルトである。

弥生土器(441)が多く出土しているが、僅かに縄文時代晩期末の凸帯土器も含まれていた。441は弥生時代中期後半の高杯片であるが、頸部に櫛描列点文を施す後期の壺片も出土している。このほかサヌカイト製の石鉄未製品(442)のほか、剥片や楔形石器も出土している。

**228 土坑** 212 土坑の北東側に位置する。平面形は長径 0.8 m、短径 0.6 mの楕円形で、深さは0.25 mを測る。埋土は中～細粒砂やシルトの偽礫が混じるオリープ黒色のシルト質粘土である。

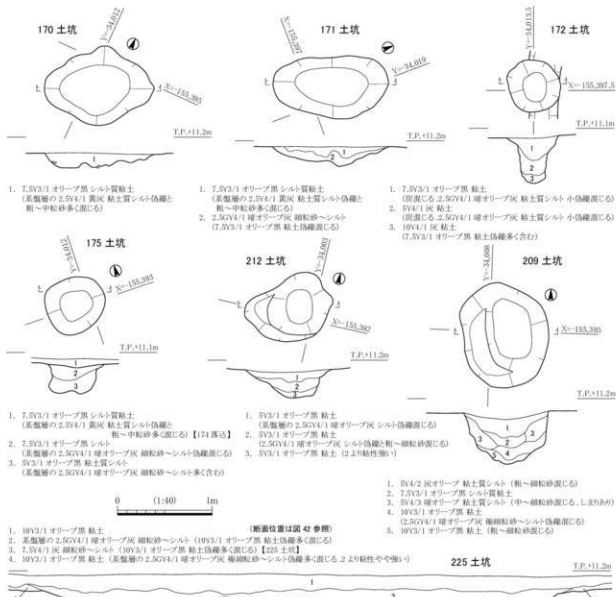


図 57 13 層下面検出土坑平面・断面(5)



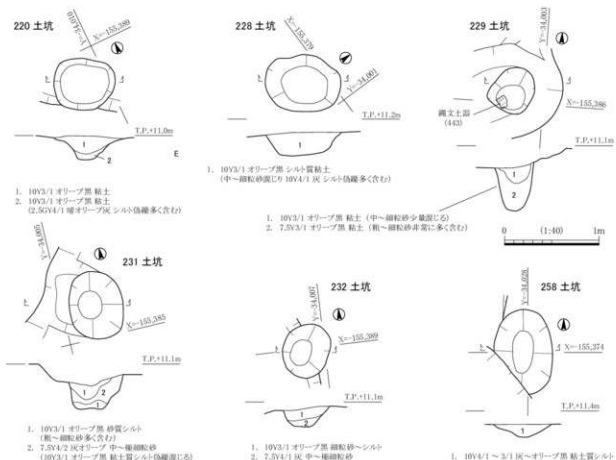


図 58 13 層下面検出土坑平面・断面 (6)

229 土坑 212 土坑南側に位置する。202 落込の底で検出した。平面形は長径 0.5 m、短径 0.42 m の隅丸方形で、深さは 0.52 m を測る。埋土は粒砂が混じるオリーブ黒色の粘土である。

底から縄文土器の大型片 (443) が出土している。長原式の深鉢である。

231 土坑 229 土坑の北西側に位置する。229 土坑と同じ 202 落込の底で検出した。平面形は長径 0.72 m、短径 0.57 m の楕円形で、深さは 0.35 m を測る。埋土は粗～細粒砂を多く含むオリーブ黒色の砂質シルトや、オリーブ黒色の粘土質シルト偽礫が混じる中～極細粒砂である。

232 土坑 220 土坑東側の 201 落込東肩部に位置する。平面形は長径 0.58 m、短径 0.48 m の楕円形で、深さは 0.2 m を測る。埋土はオリーブ黒色の細粒砂～シルトや、中～極細粒砂である。

258 土坑 周溝墓の墳丘上に位置する。150 周溝に切られる周溝墓より古い遺構である。平面形は長径 0.9 m、短径 0.6 m の楕円形で、深さは 0.14 m を測る。埋土は灰～オリーブ黒色の粘土質シルトである。

落込み (遺構名は「落込」) 50 溝の北側延長部に 174・201・200 落込がつづき、それを境に東側に広く分布する。その多くは人為的に掘削されたような遺構ではなく、当時の地表面にできた自然の形成による浅い窪みである。おそらく下層に広がる砂層の影響を強く受けていると思われる。平面形はどれもシミが広がったような不整形で、深さは 0.05 ～ 0.1 m 程度の非常に浅いものが多い。200 落込については若干深く、0.2 ～ 0.3 m 程度の深さがある。埋土は砂粒が混じるオリーブ黒色の粘土質シルトや粘土などである。

24 ～ 29・31・32・47・49・54・60・77・174・199 ～ 208・216・222 落込からは縄文土器片 (445 ～ 457) が出土している。446 は口縁部が逆「く」字形になる浅鉢である。船橋式か。449 は長原式の鉢で、457 は籐原式と考えられる波状口縁の深鉢である。それ以外は長原式の深鉢である。458 は弥

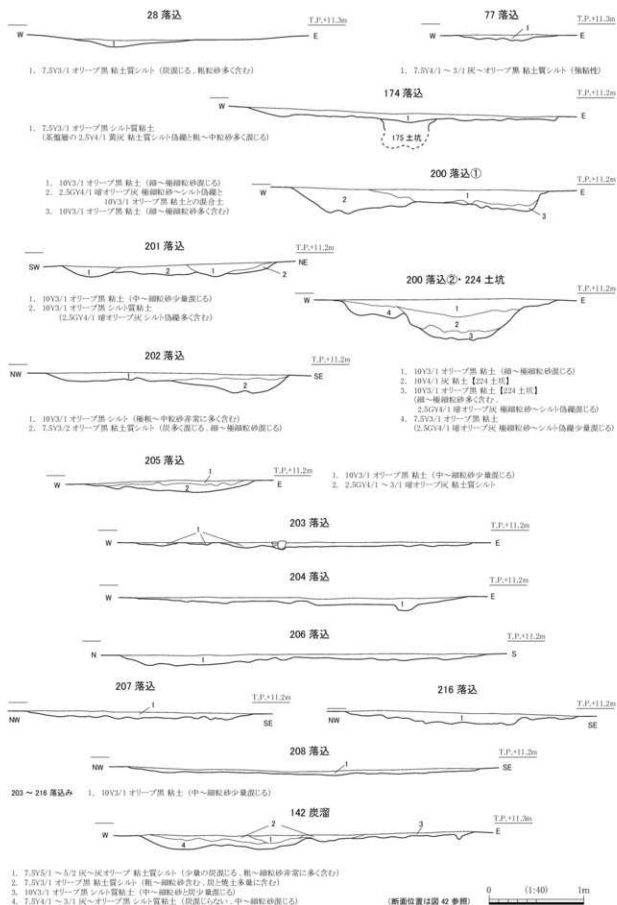


図 59 13層下面検出落込・炭溜断面

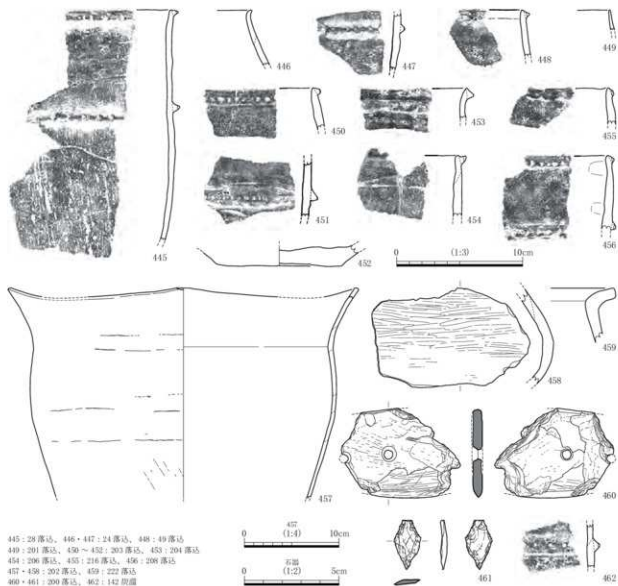


図 60 落込出土遺物

生時代前期の壺である。

このほか、25 落込からはサヌカイト製の剥片が、49 落込からは石核が出土している。

200 落込からは、多くの縄文土器に混じて弥生時代後期の壺片が数点出土している。また石庖丁(460)のほか、サヌカイト製の石錐(461)・剥片・楔形石器・石核なども出土している。460 は灰色の粘板岩製。461 については錐としたが、石礫未製品の可能性も考えられる。

208 落込からも、縄文土器に混じて弥生時代後期の壺片が数点と楔形石器が、222 落込からも、縄文土器に混じて弥生土器片(459)やサヌカイト製の剥片が出土している。459 の甕は弥生時代後期のものか。炭溜り(遺構名は「炭溜」) 東寄りの数箇所で炭の広がり(図 42 網部)を検出した(140・142 炭溜)。竪穴建物の痕跡である可能性が考えられたが、掘り下げた結果、竪穴建物ではないことが確認できた。140 炭溜は、炭・焼土と中～細粒砂が混じる灰色粘土が薄く広がっており、それを除去すると、深さ 0.1 m 程度の浅い窪みが検出できた。一部は 138・139

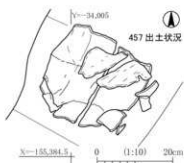


図 61 202 落込西肩部土器出土状況

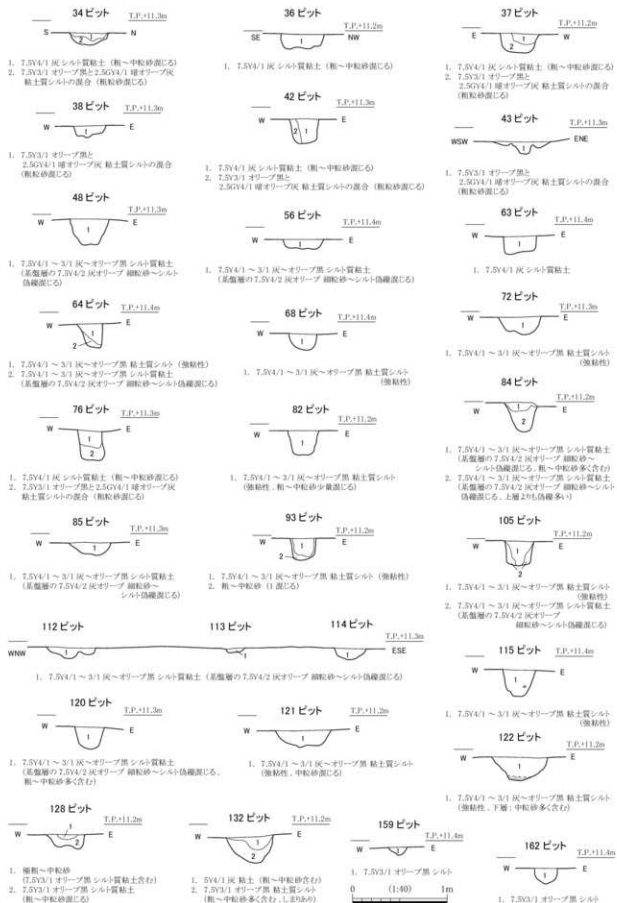


図 62 13層下面検出ビット断面(1)

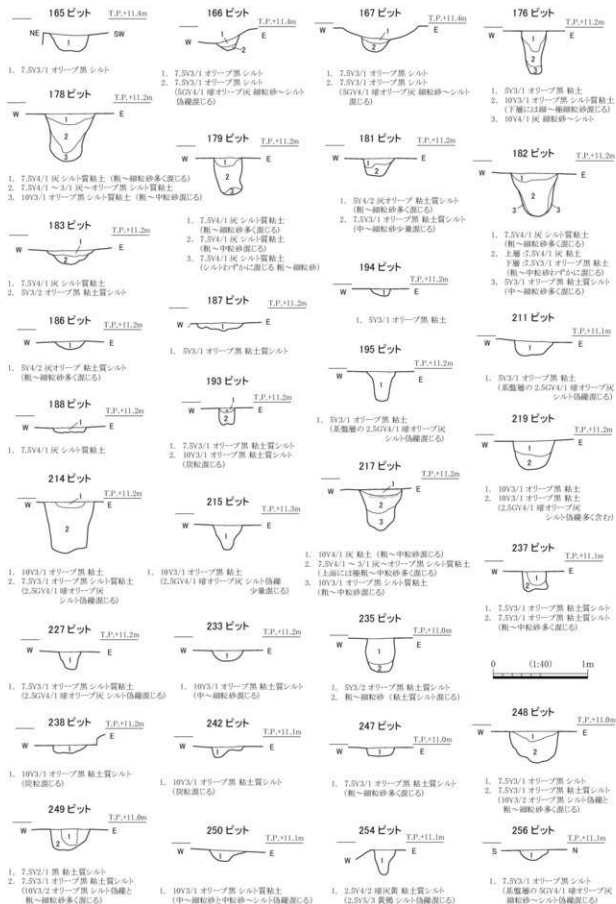


図 63 13層下面検出ピット断面(2)

表1 主要ビット一覧

ビット番号	位置	平面形	長径又は 長辺(m)	短径又は 短辺(m)	深さ(m)	土色 (上層から)
34	南半	円形	0.40	0.40	0.13	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土 (粗～中粒砂混じる) ・7.5Y3/1 オリーブ黒と2.5GY4/1 暗オリーブ灰粘土質シルトの混合 (粗粒砂混じる)
36	南半	楕円	0.55	0.45	0.16	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土 (粗～中粒砂混じる)
37	南半	隅丸方形	0.40	0.40	0.20	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土 (粗～中粒砂混じる) ・7.5Y3/1 オリーブ黒と2.5GY4/1 暗オリーブ灰粘土質シルトの混合 (粗粒砂混じる)
38	南半	楕円形	0.35	0.28	0.12	・7.5Y3/1 オリーブ黒と2.5GY4/1 暗オリーブ灰粘土質シルトの混合 (粗粒砂混じる)
42	南半	隅丸方形	0.31	0.31	0.26	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土 (粗～中粒砂混じる) ・7.5Y3/1 オリーブ黒と2.5GY4/1 暗オリーブ灰粘土質シルトの混合 (粗粒砂混じる)
43	南半	円形	0.65	0.65	0.13	・7.5Y3/1 オリーブ黒と2.5GY4/1 暗オリーブ灰粘土質シルトの混合 (粗粒砂混じる)
48	南半	楕円形	0.50	0.40	0.27	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる)
56	南半	円形	0.45	0.45	0.10	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる)
63	南半	隅丸方形	0.35	0.35	0.17	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土
64	南半	円形	0.26	0.26	0.25	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒粘土質シルト (強粘性) ・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる)
68	南半	楕円形	0.44	0.30	0.17	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒粘土質シルト (強粘性)
72	南半	楕円形	0.60	0.45	0.18	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒粘土質シルト (強粘性)
76	南半	楕円形	0.35	0.25	0.30	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土 (粗～中粒砂混じる) ・7.5Y3/1 オリーブ黒と2.5GY4/1 暗オリーブ灰粘土質シルトの混合 (粗粒砂混じる)
82	南半	楕円形	0.38	0.35	0.26	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒粘土質シルト (強粘性、粗～中粒砂少量混じる)
84	南半	楕円形	0.40	0.30	0.30	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる、粗～中粒砂多く含む) ・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる、上層よりも偽確認多い)
85	南半	ハート形 (2基盤層め)	0.50	0.40	0.14	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる)
93	南半	円形	0.30	0.30	0.22	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒粘土質シルト (強粘性) ・粗～中粒砂 (最上層の上層混じる)
105	南半	楕円形	0.30	0.25	0.25	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒粘土質シルト (強粘性) ・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる)
112	南半	楕円形	0.52	0.40	0.12	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる)
113	南半	円形	0.20	0.20	0.05	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる)
114	南半	円形	0.30	0.30	0.10	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる)
115	南半	円形	0.35	0.35	0.27	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒粘土質シルト (強粘性)
120	南半	円形	0.32	0.30	0.23	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (基盤層の7.5Y4/2 灰オリーブ細粒砂～シルト 偽確認混じる、粗～中粒砂多く含む)
121	南半	円形	0.60	0.59	0.18	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒粘土質シルト (強粘性、中粒砂混じる)
122	南半	楕円形	0.65	0.55	0.24	・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒粘土質シルト (強粘性、下層、中粒砂多く含む)
128	南半	楕円形	0.41	0.35	0.15	・機軸～中粒砂 (7.5Y3/1 オリーブ黒シルト質粘土含む) ・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト質粘土 (粗～中粒砂混じる)
132	南半	円形	0.50	0.50	0.30	・5Y4/1 灰粘土 (粗～中粒砂含む) ・7.5Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト (粗～中粒砂多く含むしもあり)
159	北半	円形	0.20	0.20	0.09	・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト
162	北半	円形	0.24	0.24	0.15	・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト
165	北半	隅丸方形	0.42	0.43	0.17	・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト
166	北半	円形	0.25	0.25	0.15	・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト ・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト (5GY4/1 暗オリーブ灰 細粒砂～シルト 偽確認混じる)

ビット番号	位置	平面形	長径又は 長辺(m)	短径又は 短辺(m)	深さ(m)	土 色 (上層から)
167	北半	円形	0.34	0.32	0.15	・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト ・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト (56Y4/1 暗オリーブ灰 細粒砂～シルト混じる)
176	北半	楕円形	0.32	0.26	0.45	・5Y3/1 オリーブ黒粘土 ・10Y3/1 オリーブ黒シルト質粘土(下層には細～極細粒砂混じる) ・10Y4/1 灰 細粒砂～シルト
178	北半	円形	0.54	0.50	0.50	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土(粗～細粒砂多く混じる) ・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 ・10Y3/1 オリーブ黒シルト質粘土(粗～中粒砂混じる)
179	北半	円形	0.32	0.29	0.38	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土(粗～細粒砂多く混じる) ・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 ・10Y3/1 オリーブ黒シルト質粘土(粗～中粒砂混じる)
181	北半	円形	0.34	0.32	0.19	・5Y4/2 灰オリーブ 粘土質シルト(粗～細粒砂多く混じる) ・7.5Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト(中～細粒砂少量混じる)
182	北半	円形	0.49	0.45	0.45	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土(粗～細粒砂多く混じる) ・上層7.5Y4/1 灰粘土 下層7.5Y3/1 オリーブ黒粘土 (粗～中粒砂僅かに混じる) ・5Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト(中～細粒砂多く混じる)
183	北半	楕円形	0.50	0.40	0.15	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土 ・5Y3/2 オリーブ黒粘土質シルト
186	北半	楕円形	0.39	0.32	0.08	・5Y4/2 灰オリーブ 粘土質シルト(粗～細粒砂多く混じる)
187	北半	円形	0.50	0.50	0.08	・5Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト
188	北半	楕円形	0.40	0.35	0.05	・7.5Y4/1 灰シルト質粘土
193	北半	楕円形	0.21	0.16	0.18	・7.5Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト ・10Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト(炭粒混じる)
194	北半	円形	0.2	0.2	0.07	・5Y3/1 オリーブ黒粘土
195	北半	円形	0.33	0.32	0.30	・5Y3/1 オリーブ黒粘土 (基礎層の2.5GY4/1 暗オリーブ灰シルト偽礫混じる)
211	北半	円形	0.42	0.40	0.15	・5Y3/1 オリーブ黒粘土 (基礎層の2.5GY4/1 暗オリーブ灰シルト偽礫混じる)
214	北半	円形	0.53	0.53	0.54	・10Y3/1 オリーブ黒粘土 ・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト質粘土 (2.5GY4/1 暗オリーブ灰シルト偽礫混じる)
215	北半	円形	0.31	0.32	0.26	・10Y3/1 オリーブ黒粘土 (2.5GY4/1 暗オリーブ灰シルト偽礫少量混じる)
217	北半	楕円形	0.55	0.45	0.44	・10Y4/1 灰粘土(粗～中粒砂混じる) ・7.5Y4/1 ～3/1 灰～オリーブ黒シルト質粘土 (上層には極粗～中粒砂多く混じる) ・10Y3/1 オリーブ黒シルト質粘土(粗～中粒砂混じる)
219	北半	円形	0.48	0.44	0.30	・10Y3/1 オリーブ黒粘土 ・10Y3/1 オリーブ黒粘土 (2.5GY4/1 暗オリーブ灰シルト偽礫多く含む)
227	北半	円形	0.25	0.24	0.20	・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト質粘土 (2.5GY4/1 暗オリーブ灰シルト偽礫混じる)
233	北半	円形	0.33	0.32	0.10	・10Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト(中～細粒砂混じる)
235	北半	円形	0.28	0.28	0.35	・5Y3/2 オリーブ黒粘土質シルト ・粗～細粒砂(粘土質シルト混じる)
237	北半	円形	0.25	0.25	0.2	・7.5Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト ・7.5Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト(粗～中粒砂多く混じる)
238	北半	楕円形	0.36	0.30	0.08	・10Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト(炭粒混じる)
242	北半	円形	0.34	0.34	0.10	・10Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト(炭粒混じる)
247	北半	円形	0.30	0.30	0.09	・7.5Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト(粗～細粒砂多く混じる)
248	北半	楕円形	0.36	0.30	0.08	・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト ・7.5Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト (10Y3/2 オリーブ黒シルト偽礫と粗～細粒砂多く混じる)
249	北半	円形	0.44	0.42	0.22	・7.5Y2/1 黒粘土質シルト ・7.5Y3/1 オリーブ黒粘土質シルト (10Y3/2 オリーブ黒シルト偽礫と粗～細粒砂多く混じる)
250	北半	楕円形	0.45	0.39	0.11	・10Y3/1 オリーブ黒シルト質粘土 (中～細粒砂と中粒砂～シルト偽礫混じる)
254	北半	円形	0.22	0.22	0.26	・2.5Y4/2 暗灰黄 粘土質シルト(2.5Y5/3 黄褐色シルト偽礫混じる)
256	北半	楕円形	0.30	0.25	0.10	・7.5Y3/1 オリーブ黒シルト (基礎層の5GY4/1 暗オリーブ灰 細粒砂～シルト偽礫混じる)

※道横断面図を作成した位置と、規模を計測した位置が異なるため、両者の数値は若干異なる場合がある。

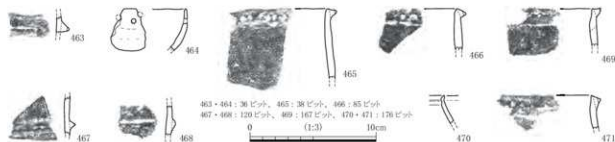


図64 ビット出土遺物

土坑と遺構番号を振ったが、底には凹凸がみられ、人為的に掘削された遺構ではない。142炭溜も同様に、炭と焼土を多量に含むオリブ黒色粘土質シルトなどが0.02～0.03m程度の厚さで広がっており、それらを除去すると、深さ0.1m程度の浅い窪みが検出できた。窪みの肩部はなだらかで、これも人為的に掘削された遺構ではないが、窪みの埋土には炭は混入していなかった。

140炭溜からは縄文土器片が数点出土しており、140炭溜下面の138土坑からは、長原式の深鉢片(439)が出土している。142炭溜からも同時期の凸帯土器(462)が数点と、サヌカイト製の剥片が2点出土している。

ビット 調査区全体に多くのビットが広がる。主なものについて、その形状や規模、埋土を一覧表にまとめた。これらのうち、176・178・179・182・183・186・188・214・217ビットは落込みの埋土上面で検出できた。

36～38・43・72・85・105・115・120・128・165～167・176・178・193ビットなど、多くのビットからは縄文土器片が出土していることから、多くが縄文時代の遺構であったと考えられる。このうち36・38・85・115・120ビット出土のもの(463・465～469・471)はいずれも長原式の深鉢である。464も同時期の鉢で、口縁部に多数の穿孔を施す。470は口縁部が逆「く」字形になる浅鉢で、内面に1条の沈線を施す。船橋式か。

数は少ないが、105・194ビットからは弥生土器片が出土している。両者ともに弥生時代中期の壺で、105ビット出土のものには櫛描籬状文が、194ビット出土のものには櫛描直線文が刻まれている。このほか、120ビットからはサヌカイトの剥片が出土している。

#### 14層出土遺物(図65)

上記遺構の調査完了後、その基盤層となっている14層を掘削したところ、13層下面で検出した遺構とはまったく関わりない場所から、縄文土器(472～474)が出土した。遺構に伴う土器ではないことから、14層生成過程で混入したものと考えている。

472・473は外面に粗い貝殻条痕がみられる深鉢。晩期中葉の篠原式である。474はそれよりも古い滋賀里Ⅱ式の多段口縁の深鉢と思われる。

#### 註・参考文献

- 1) 佐藤甲二 1999「水田址に関する疑似畦畔Bと連続耕作—仙台市富沢遺跡の事例から—」『人類誌集報1999』東京都立大学考古学報告4
- 2) 柏原市教育委員会 1993「柏原市遺跡群発掘調査概報 1992年度」八尾市教育委員会 2009「高安古墳群 調査報告書」八尾市文化財調査報告60
- 3) 園原悠斗 2021「近畿地域における弥生時代打製石鏃の研究」『日本考古学』第52号など参考に、田中は石鏃の刃部形態によ



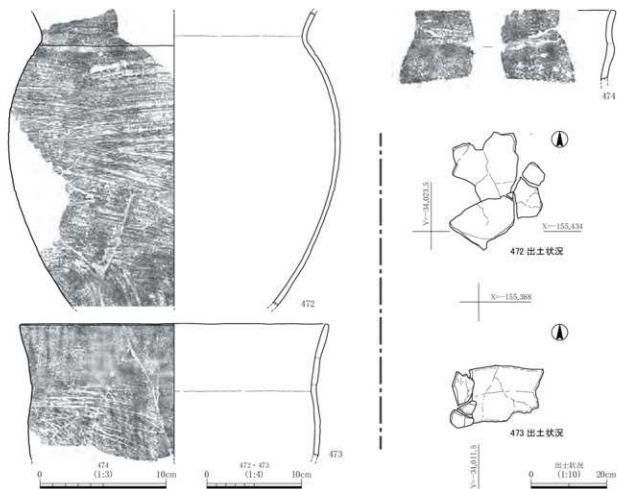


図 65 14層出土遺物及び土器出土状況

る分類を行ない、当初は石鐮 294～297 が長三角形で、298・299 は柳葉形としていたが、295 と 299 との違いが明瞭でないとの伊藤の意見により、協議の上、本書内では刃部による分類は行わないこととし、一覧表からも削除した。物の形状を表現する際、例えば「柳葉形」については違和感なく受け入れられるが、刃部が外湾するという理由から石鐮 299 を柳葉形とすることには大きな違和感がある。確かに木葉の形には似ているが、細長くスラっとした柳の葉にはまったく似ていないように思われるからである。どちらかと言えば、むしろ石鐮 296・297 や 134 のように長三角形としているものの方が柳葉に似ており、誤解を招きやすい。また石鐮 295 は刃部の形態だけをみれば、長三角形なのか柳葉形なのか、どちらに分類すべきか非常に分類が難しく、基準に曖昧なところがある。石鐮の分類に、柳葉を含めた木葉の形を用いるならば、刃部の形態ではなく、基部までを含めた形状で検討すべきであり、刃部の形のみでの分類ならば、木葉の形を用いず、直線的か、湾曲しているかの表現でよいのではないか。いずれにせよ、石鐮の刃部形態の分類に「柳葉形」はふさわしくないように思われる。

- 4) 泉 拓良 1979 「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集 1 日本原始』、泉 拓良・山崎純男 1989 「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』、泉 拓良 1990 「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第八集 奈良大学文学部文化財学など、口縁部（または口頸部、胴部）の屈曲を「逆く」字形と呼んでいるため、本書もそれに倣ったが、土器に向かって左側は、「逆く」ではなく、単なる「く」の字状の屈曲である。あえて「逆」を付ける必要があるのかいささか疑問である。
- 5) 虎姫町教育委員会 1997 「五村遺跡」、植野浩三 1997 「区画溝と周溝墓—滋賀県五村遺跡の調査成果をもとに—」『文化財学報』第十五集 奈良大学文学部文化財学

## 第5章 自然科学分析

### 第1節 分析の目的

今回の調査では、13層下面で縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺構を数多く検出した。遺物も豊富で、多くの凸帯文土器や石器のほか、石棒や土偶なども出土している。また、一つの遺構から縄文時代晩期末（長原式）の凸帯文土器と弥生時代前期の土器が出土している例もあり、時代の境界を示す遺構・遺物として注目される。

この凸帯文土器と弥生土器が出土する土坑の一つに126土坑がある。出土した土器は、図54に示したとおり、それぞれの年代を示す特徴を有しており、明らかに縄文土器と弥生土器とに区別されものである。この土器の年代を特定することは、縄文文化と弥生文化の過渡期の年代を知るためにも、また河内平野における凸帯文土器の動向を知る上でも非常に重要である。そこで、126土坑から出土した凸帯文土器外面に付着していた炭化物について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施し、縄文土器の最終末期の年代を特定することとした。また、近接する127土坑の底付近に混入していた炭化物も合わせて測定し、遺構の形成・埋没時期や、凸帯文土器との時期的な関係を明らかにすることとした。

なお、分析を行なうにあたり、炭化物の起源物質が海産物であった場合に、測定値が古くなる海洋リザーバー効果を検討する必要があったため、放射性炭素年代測定と合わせ、土器付着炭化物の炭素窒素安定同位体比測定を実施することとした。これらの測定は株式会社パレオ・ラボに委託した。

上記の炭化物が混入していた127土坑については、126土坑と同じ縄文時代晩期末の凸帯文土器が出土している。ちょうど稲作が開始される時期にあたり、調査区周辺でも水田耕作が営まれていたことが十分予想された。当時の古環境を復原することは、水田の有無はもちろん、縄文時代から弥生時代への過渡期の生業を検討するうえでも非常に重要である。したがって年代測定を実施する127土坑の底付近の土壌について、植物珪酸体分析を実施し、その手掛かりを得ることとした。こちらの分析は株式会社古環境研究所へ委託した。

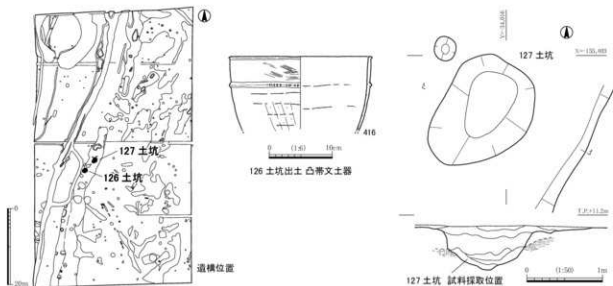


図66 分析試料とその出土位置

## 第2節 放射性炭素年代測定

### 1. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表2のとおりである。測定試料及び採取位置を写真6に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

### 2. 結果

表3に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行なって暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、図67に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行なうために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730 $\pm$ 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### 3. 考察

#### (1) 年代値

図68に、試料No.1とNo.2の較正年代を示したマルチプロット図を示す。126土坑から出土した遺物No.421の燃料材由来と推定される煤とみられる土器外面の付着炭化物の試料No.1（PLD-49758）は、<sup>14</sup>C年代が2445 $\pm$ 20 BP、 $2\sigma$ の較正年代が750-685 cal BC (24.99%)、666-637 cal BC (10.29%)、618-616 cal BC (0.19%)、589-579 cal BC (1.17%)、572-411 cal BC (58.80%)で、紀元前8世紀中頃～紀元前5世紀後半の暦年代を示す。

127土坑の最下層から出土した炭化材片の試料No.2（PLD-49759）は、<sup>14</sup>C年代が2305 $\pm$ 20 BP、較正年代が405-361 cal BC (90.77%)、274-264 cal BC (2.78%)、241-235 cal BC (1.90%)で、紀元前5世紀末～紀元前3世紀後半の暦年代を示す。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。試料No.2は、最終形成年輪を欠く部

位不明の木材であり、その木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

## (2) 土器附着炭化物について

土器外面の附着炭化物の年代については、土器の煮炊き内容物のふきこぼれが含まれている可能性があり、その内容物に海産物が含まれる可能性があるため、海洋リザーバー効果の影響も合わせて検討する必要がある(小林, 2014)。ただし、 $\delta^{13}\text{C}$  値は同位体比質量分析計(IRMS)で測定された値で検討を行なう必要性があり、今回のような加速器質量分析計(AMS)による測定値は参考値に留めておく必要がある(小林, 2014)。



1. 試料 No.1 の土器附着炭化物の試料採取位置



2. 試料 No.1 の土器附着炭化物の附着状況



3. 試料 No.1 の土器附着炭化物の試料採取後の状況



4. 試料 No.1 (PLD-49758) の測定試料



5. 試料 No.2 の炭化材



6. 試料 No.2 (PLD-49759) の測定試料

## 写真6 測定試料

表2 測定試料及び処理

測定番号	道跡データ	試料データ	前処理
PLD-49758	地区：15-2a 道構：126 上坑 遺物 No.421 実測 No.154 試料 No.1	種類：土器付着物・外面（煤（燃料材）） 状態：dry ガス化重量：14.90mg 炭素含有量：4.36mg 炭素含有率：29.26%	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-49759	地区：15-2a 道構：127 上坑 層位：最下層 試料 No.2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet ガス化重量：2.10mg 炭素含有量：1.26mg 炭素含有率：59.99%	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

表3 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-49758 試料 No.1	-25.28 $\pm$ 0.27	2444 $\pm$ 22	2445 $\pm$ 20	736-694 cal BC (19.83%) 666-637 cal BC (10.29%) 546-471 cal BC (35.92%) 435-422 cal BC (5.08%)	750-685 cal BC (24.99%) 666-637 cal BC (10.29%) 618-616 cal BC (0.19%) 589-579 cal BC (1.17%) 572-411 cal BC (58.80%)
PLD-49759 試料 No.2	-25.81 $\pm$ 0.19	2306 $\pm$ 20	2305 $\pm$ 20	399-382 cal BC (68.27%)	405-361 cal BC (90.77%) 274-264 cal BC (2.78%) 241-235 cal BC (1.90%)

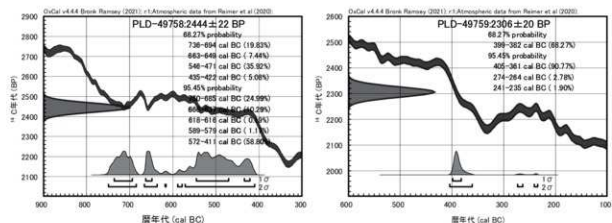


図 67 暦年校正結果

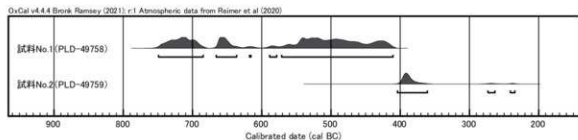


図 68 マルチプロット図

本章第3節で示す同位体比質量分析計による今回の $\delta^{13}\text{C}$ 値の測定値は、 $-26.23\text{‰}$ である。No.1の土器付着炭化物の $\delta^{13}\text{C}$ 値は、吉田(2012)が示した、植物のほとんどすべてに該当するとみなして良い $\text{C}_3$ 植物に由来する $-33 \sim -23\text{‰}$ の範囲に収まる。したがって、今回の試料については、海洋リザーバー効果の影響を考慮する必要がないと判断できる。

なお、土器付着炭化物の通常炭素含有率は、 $50 \sim 60\%$ とされる(小林, 2017)。炭素含有量がかなり低い試料は、土器胎土や埋没土壌に含まれる鉱物に由来する起源の古い微量の炭素の影響を受け、数百 $^{14}\text{C}$ 年程度、古い年代値を示す場合がある(小林, 2017)。そのため、特に炭素含有量が $40\%$ よりも低い試料の年代値の評価には、注意を要する。

今回の試料No.1の炭素含有量は $29.26\%$ であり、上記の小林(2017)で示された目安よりも低い値を示す。ただし、試料採取時の観察では、土器外面の炭化物の付着状況が見かけ上良好であり、土器の器壁を傷つけるような試料採取を行っていない(写真6の1~4)。よって、試料No.1の土器付着炭化物では、埋没後の堆積物から、何らかの過程を経て、鉱物などの無機物の影響を受けている可能性が考えられる。試料No.1の炭素含有量は、極めて低い値ではないものの、小林(2017)に示された目安をふまえると、年代値の評価に関しては慎重に行なう必要がある点を指摘しておきたい。

### (3) 既往の年代値との対比

**試料No.1の年代値** 縄文時代晩期末の定点的な年代値としては、奈良県御所市の中西遺跡、秋津遺跡の発掘調査において、放射性炭素年代と酸素同位体比年輪年代の双方の年代値が得られている(岡田・金原, 2022)。詳細な層位的な発掘調査の結果により確定した水走型の凸帯文土器の時期の下限に相当する酸素同位体比年輪年代は、BC 602である。また、この酸素同位体比年輪年代が得られた遺構に伴う木材は、 $2488 \pm 20 \text{ BP}$ の $^{14}\text{C}$ 年代を示している。

なお、中西遺跡、秋津遺跡では、水走型の凸帯文土器の付着炭化物の放射性炭素年代も得られており、 $^{14}\text{C}$ 年代で $2502 \pm 25 \text{ BP}$ を示した。さらに、中西遺跡、秋津遺跡では、水走型以前の凸帯文土器の付着炭化物の放射性炭素年代も多数得られている。年代値としては、凸帯文3bで $2474 \pm 20 \text{ BP}$ 、 $2424 \pm 23 \text{ BP}$ 、凸帯文3aで $2502 \pm 24 \text{ BP}$ 、 $2476 \pm 24 \text{ BP}$ 、 $2460 \pm 24 \text{ BP}$ 、凸帯文2で $2562 \pm 24 \text{ BP}$ 、 $2505 \pm 25 \text{ BP}$ 、 $2436 \pm 24 \text{ BP}$ 、 $2421 \pm 24 \text{ BP}$ の結果が得られている。ただし、現状の測定結果では、年代値が型式に沿って系統的に古くはなっていない。

次に、弥生時代前期を中心とする土器付着炭化物の年代値についてみていきたい。大阪府では東大阪市の水走遺跡において、長原式で $2540 \pm 40 \text{ BP}$ と $2520 \pm 40 \text{ BP}$ 、前期最古で $2540 \pm 40 \text{ BP}$ の年代値がある(西本編, 2006)。この他に、西本編(2006)によると、河内1期の古段階の年代値として、東大阪市の若江北遺跡の河内I-1期で $2515 \pm 35 \text{ BP}$ と $2480 \pm 40 \text{ BP}$ 、八尾市の木の本遺跡の長原式で $2480 \pm 45 \text{ BP}$ 、河内1期(古段階)で $2490 \pm 40 \text{ BP}$ 、 $2465 \pm 40 \text{ BP}$ 、 $2430 \pm 40 \text{ BP}$ 、 $2410 \pm 40 \text{ BP}$ の測定結果が存在する。河内I-1期ないし河内I期(古段階)の土器型式に後続する土器型式としては、東大阪市の山賀遺跡の河内I-3期で $2530 \pm 40 \text{ BP}$ 、 $2470 \pm 40 \text{ BP}$ 、交野市の私部南遺跡の長原式で $2475 \pm 25 \text{ BP}$ 、 $2505 \pm 25 \text{ BP}$ 、河内I-2~3期で $2395 \pm 25 \text{ BP}$ 、河内I-3~4期で $2450 \pm 25 \text{ BP}$ 、河内I-4期で $2475 \pm 25 \text{ BP}$ 、 $2405 \pm 25 \text{ BP}$ の年代値がある。

土器付着炭化物以外の測定結果としては、宮本(2022)が時期決定に良い試料とした一年草のイネ炭化米の年代値が大阪府寝屋川市の讃良部条里遺跡に存在する。この讃良部条里遺跡のI期古段階と考えられる遺構に伴う炭化米の測定結果は、 $2450 \pm 25 \text{ BP}$ である(中尾・山根編, 2009)。